岩陽学会々誌

第五十四号

目　次

一、これまでとこれから　舎友　石村　航……3
二、働き始めて、印象に残っている方の印象に残っているエピソードについて　舎友　原田　寛也……4
三、大学院生になって　OB　森本　龍……6
四、自分らしいリーダーシップ　OB　吉谷　碧海……9
五、四年間を振り返って　目白大学人間学部人間福祉学科　四年　大塚　はな……11
六、優先順位とセレンディピティ　青山学院大学総合文化政策学部総合文化政策学科　四年　高石　光輝……13
七、東南アジア日記　早稲田大学文学部英文学コース　四年　髙部　吉之介……15
八、お墓について考える　日本大学理工学部機械工学科　四年　谷上　龍平……21
九、インドの諸文化～都市と地方のかかわり～　駒澤大学仏教学部　四年　田弘　一真……24
十、そういうものにわたしはなりたい　東京電機大学工学部第二部電気電子工学科　四年　中島　章伸……26
十一、夏の思い出　法政大学法学部法律学科　四年　藤川　遥……29
十二、就活で学んだこと　慶應義塾大学経済学部経済学科　四年　松本　誠也……31
十三、大学卒業に向けて　東京科学大学環境・社会理工学院建築学系　四年　北村　俊樹……33
十四、地元での演奏　東京音楽大学音楽学部音楽学科　三年　片山　深晴……36
十五、ディズニープリンセスから学ぶ理想の女性像の変化　駒澤大学文学部国文学科　三年　河井　風香……38
十六、八月と戦争　上智大学総合グローバル学部　三年　川本　蓮……42
十七、三島由紀夫の金閣寺を読んで　青山学院大学経営学部経営学科　三年　末政　快晴……45
十八、私が大学でどのようなことを学んでいるのか　東京歯科大学歯学部歯学科　三年　宮下　真輝……47
十九、ウズベキスタン行ってきた　東京大学理科二類　二年　清永　遥生……50
二十、ふるさと　日本大学経済学部経済学科　二年　高木　将士……54
二十一、キャンプ実習　日本体育大学体育学部健康学科　二年　中村　果鈴……56

二十二、タイに行きタイ　神奈川大学経済学部経済学科　二年　平中達海……58
二十三、二十歳になって　中央大学法学部法律学科　二年　舛本晃誠……61
二十四、大学で学んでいること　青山学院大学文学部フランス文学科　二年　三上広太……63
二十五、今年のMBOs　明治大学経営学部経営学科　二年　茅原鼓海……65
二十六、寮生活と岩陽学舎での一人暮らし　昭和大学薬学部　二年　妹尾晏奈……67
二十七、大学一年生の半分を振り返って　東京科学大学工学院　一年　上野佑記……69
二十八、都市部と地方におけるエンタメの規模の違いについて　明治大学政治経済学部地域行政学科　一年　江﨑光賀……72
二十九、将来の進路　上智大学総合人間科学部心理学科　一年　河村七恵……74
三十、夏休みを半分終えてみた感想　早稲田大学創造理工学部　一年　北川創大……77
三十一、日本の教育現場に関するレポート　上智大学総合人間科学部教育学科　一年　野村宗一郎……79
三十二、私とロシア語についての雑記　早稲田大学文学部　一年　濱田琴音……81
三十三、私の成り立ちとウインドサーフィン　明治大学法学部法律学科　一年　林つぐみ……84
役員名簿……87

これまでとこれから

舎友（二〇二二年卒舎）　石村　航

本年度、舎友の一人として寄稿させて頂く石村　航と申します。早稲田大学文化構想学部出身で、二〇二二年に岩陽学舎を卒業しました。学生時代は社会学を専攻しており、研究らしい研究ではないですが、地元岩国市の活性化をテーマに論文を書いておりました。現在は都内のＩＴ企業で、システムエンジニアとして研究開発を行なっています。専攻とは全く異なる今の職業を志望した理由を思い返すと、就活がうまくいかない時期にＩＴ業界について調べた時に、ＩＴによる作業の自動化に対して工数削減という魅力を感じ、他者がやりたいことに使える時間を増やしたいことを理由に挙げていたと思います。就活の時期には、その志望動機を持って入社試験を受け続け、結果に一喜一憂しながら、何とか今の会社に採用して頂き、今日までこの仕事を続けています。

社会人として生活する中で、技術面の知見を深めることを大変に感じていました。学生時代の専攻分野とは異なるため、プログラミングといった技術面については内定が決まって一からのスタートでした。そのため、分かっていない箇所が分からないほど分からない箇所が多く、どこから理解していくべきか、何から勉強し始めるべきか悩む日々が続きました。分からない言葉の意味を調べることもありましたが、先述の悩みは尽きず途中で辞め、「どうせ分からないから」、「関係ない分野出身からこの職業を続けるのは無謀かもしれない」と自暴自棄になる時期もありました。そんな折、野球のテレビ中継が目に入り、負けそうな展開の中でも最後まで諦めず逆転勝利を目指し、勝利を成し遂げた選手たちの姿に心を打たれました。それが契機で、野球観戦をするようになり、たとえ試合の結果が出なくても気持ちを切り替え次の試合で結果を出す選手たちの姿勢に感銘を受けるようになりました。その姿勢から自分を振り返り、うまくいかなくても諦めず結果を出せるよう頑張ろうと気合いを入れることができました。そこで奮起して、分からない言葉を調べる他、知りたいと思う内容を書籍等を通じて理解するようにしました。その結果、分からない箇所が出てきても狼狽えることが以前に比べて少なくなり、もっと知りたい、知るための本や教材がないかと技術への関心が深まったように感じています。まだまだ分かっていない分野も多く、日々技術も進歩するので一つ分かってもまた積み重ねていく必要があり、終わりが見えない大変さはあります。しかし、この職業を選んだからには、この大変さを楽しみ、引き続き精進していきたいと考えています。

社会人になって学舎を出てから、生まれて初めて賃貸で一人暮らしを始めました。家事を含めた日々の生活リズムは学舎時代に培っていたので、すぐに慣れることができました。ただ、社会人になってからは大学時代の友人も仕事に忙しく、気軽に話す機会が少なく、その点については未だに慣れていません。大学時代は、学舎に帰ってきて舎生に会ったら気軽に話をしており、気が紛れる良い時間を過ごせていました。しかし、今は、話したいことがあっても友

人と会う機会を待つ他なく、寂しさを感じる機会も少しずつ増えている状況です。当時を懐かしいと思うと共に、当時に戻ることはできないので、プライベートで気軽に話ができるよう自分なりに考えていく必要があると痛感しており、今後はその工夫をしていきたいと考えています。

最後に現役舎生の皆様、舎友・舎監の皆様それぞれに向けて一言ずつお話をしてこの文章を終わりにしようと思います。現役舎生の皆様に向けて、大学生活は自分の考え次第で、何事も中途半端にも最高にもできると思います。自分の気持ちに負けず、後悔しない決断をして日々楽しく健康に過ごして頂ければ嬉しいです。舎友・舎監の皆様に向けて、学舎卒業後お会いする機会がなかったので、今後飲み会などでお話しできますと幸いです。今後の皆様のご健勝とご活躍をお祈りしています。

働き始めて、印象に残っている方の印象に残っているエピソードについて

舎友（二〇二四年卒舎）　原田　寛也

私は大学四年生の九月に舎友の長藤さんの紹介で岩陽学舎に入寮させていただきました。在寮期間はわずか半年ほどでしたが、入寮の面接時から暖かく迎えてくださった太田さんと三宅さん、最終的に入寮を認めてくださったり送別会で優しく語りかけてくださったりした伊藤理事長、親しく接してくれた舎生のみなさんには、今でも大変感謝しています。

入寮のタイミングの関係で舎誌を書くのは今回が初めてで、そのうえ舎友枠の担当となり、寄稿依頼を頂いてからずっと何について書くか悩んでいました。興味深いかもしれないのは現在担当しているプロジェクトに関する話ですが、これは秘密保持の関係で面白い箇所こそ書くことができません。また、大学時代に学んでいた日本の選挙制度と、昨今話題にあがっている派閥との関係に関する話を書こうとも思いましたが、舎友枠を大学時代の話で埋めるのは多少趣旨に沿わない可能性もあります。色々と考えましたが、今回は働き始めてから一緒に働いて印象に残っている方の印象に残っているエピソードをいくつか紹介しようと思います。

Aさんは私の教育担当のような役割を担ってくださっている先輩で、現在は海外研修中です。海外からも月に一度、1on1という面談のような時間を設けてくださったり研修記を共有してくださったりと、関わりは現在も継続しています。そんなAさんの尊敬する点は、とりわけ課題を改善しようとする意識の高さです。例年、配属初期の新入社員は所属部署の先輩にレクチャーを受けて、基本的な業務を覚えていきます。ただ、所属部署単位でのレクチャーであるため、他の部署の業務内容や全体における所属部署の位置付けが分かりにくいという課題があったようです。そこでAさんはちょうど

今年度から、本部全体を概観できるような講義をレクチャーとは別に設け、新入社員が本部の全体像を把握できるようにしてくださりました。この講義は新入社員を対象にしており、講師への依頼などの調整業務を担当されたAさんには必ずしもメリットはなかったのではないかと思いますが、それだけいっそう、課題があれば改善しようとするAさんの意識の高さを感じました。他にも、Aさんは新入社員時代から所属部署の業務改善を提案されていたようで、Aさんの課題を見つける感度の高さと課題を改善しようとする意識の高さには、学ぶことが多いと思います。私はAさんの担当していたプロジェクトを引き継ぎましたが、このプロジェクトに関する過去の交渉経緯を記した面談メモや現在締結に向けて励んでいる契約書からは、Aさんの思考の履歴が感じられ、私自身、「Aさんならどう考えるのだろう」と、ことあるごとに思ってしまいます。そのくらい、影響を与えてくださった先輩です。

Bさんは部署外の先輩ですが、あるプロジェクトで、取引予定の各社との契約締結業務でご一緒させていただいています。このプロジェクトの特徴は取引先が多いことで、各社との調整事項も多岐に渡ります。このようなプロジェクトをご一緒させていただくなかで、Bさんの着実な仕事の進め方が印象に残っています。私は推測で業務を進める傾向があり、このプロジェクトのように調整事項が多岐に渡ると、推測をもとにして一括で進められる方法はないかと考えていました。しかし、対処すべき課題がすでに整理されているなかで、推測をもとにした（言い方を変えれば熟慮を欠いた）、進め方は不要であり、各社と個別に交渉して進めた方が着実であると教えてくださりました。実際、Bさんと働いていると、その丁寧な進め方が功を奏していると感じることが多くあり、入社初期に良い教訓を得られたと思います。また、Bさんには、働く上での物事の考え方や進め方を教えてもらっていて、このエピソード以外にも、自分の能力に比して難しい業務を振られたときの対処の仕方や、自分により良いアイデアがあるときの提案の仕方など、社会人としての振る舞いを学んでいます。このプロジェクトの契約締結業務が終了しても、関係を維持させていただきたい先輩です。

Cさんは部署外の同期です。業務を一緒に行ったことはありませんが、時に各自の業務について質問し合っています。色々と質問してもらいつつも、Cさんが所属部署でどのような業務を担当しているかはほとんど知らないですが、実際的な業務を経験しているイメージがあります。所属部署の特性も関係していると思いますが、契約の締結や稟議の起案などを入社四か月ほどで既に経験しており、「同期だよね？」と感じています。Cさんはこういった経験を言葉にして説明するのが上手く、私がどんな質問をしても上手く回答し、今後の対応方針まで的確に伝えてくれます。また、理解を曖昧にしないようにする姿勢もあり、Cさんからの相談に対して私が大学時代に学んだ法学の知識に基づいて回答したとき、Cさんは「つまり、～ということ？」「～っていう理解であっている？」など、丁寧に確認をしてくれます。このようにわかったふりをしない姿勢を本当に尊敬しています。私はなんとなくその場で概要だけ理解し

（たつもりになっ）て、後から自分でもう一度考え直せば良いかと、流してしまう傾向があるように思います。そんな私には、Cさんの姿勢が大変印象に残っています。

社会人になって印象に残っている人の印象に残っているエピソードを書き綴りましたが、振り返るとなかなか良い学びができているなと思います。私は昔から狭いコミュニティで心地よく自分の好きに学んできたように思いますが、誰とでも円滑にやっていく必要がある社会人の現在も、自分の感度で、自分のペースで学ぶことができており、楽しいです。今回は書いていないだけで、印象に残っている人は他にもたくさんいます。今後はより意識してそういった周囲の人から学ぶべきことを学び、日々の仕事を学びで充実したものにしたいです。また、そういった学びを実際に活かすことも重要なので、こちらも意識したいと思います。

大学院生になって

東京大学　情報理工学系研究科創造情報学専攻　修士一年
森本　龍

今年も舎誌の季節となった。昨年度の舎誌にも書いたが、私は大学院試験で浪人をしてしまい今年の四月から大学院生となった。浪人していた昨年度は、毎日バイトや勉強に集中しており、そのような生活から急に学生生活に切り替わったため、日々の忙しさを強く感じている。今年の舎誌では、大学院生になって行っている研究活動について中心に書いていこうと思う。

大学院ではなんの研究をしているの？と聞かれることがある。そう聞かれると私は、プログラミングに関する研究を行っていると答える。大体の会話ではそこで話が終わる。こうなる原因の一つとして、プログラミングを難しそうと感じている人が多く、それ以上踏み込めないのではないかと考えている。これまではそれ以上話すことはしていなかった。しかし今回の舎誌ではあえて自分の研究について書いていきたいと思う。

自分の研究について書こうと思ったのには二つの理由がある。一つ目は研究を行っている身として、自分の研究について誰にでも分かりすく言えたほうが良いと思うようになったからである。そして二つ目が主たる理由であるが、私が人と話すのが好きだからである。これまでに、話し相手がどのような研究をしているかを聞いて、その話で盛り上がることが数回あった。しかし自分の研究の話で盛り上がったことはない。自分の研究を、誰が聞いてある程度イメージが掴めるように説明し、会話になるぐらいにはしたい。

今回の舎誌では、私の専攻している専門分野の知識がない人でも、理解できるように書くことを目標としている。是非教養的な話として読者の方々に捉えていただけると幸いである。

私の行っている研究ではProcessing-in-Memory（ＰＩＭ）と呼

ばれるものを扱っており、その上でプログラミングを行なっている。ほとんどの方はＰＩＭを聞いたことがないと思う。ここではコンピュータの一種と理解していただければ十分である。ＰＩＭとは何なのかを理解するために、一般的なコンピュータと比較して説明を行なっていく。

ＣＰＵは聞いたことがある人が多いのではないだろうか。ＣＰＵは多くの人が使用する一般的なコンピュータ、デスクトップコンピュータやノートパソコンの中に入っている。ＣＰＵはコンピュータの核となるパーツであり、ＣＰＵにおいて計算が行われている。例えばコンピュータの上で電卓アプリを動かすとする。電卓アプリで計算式を入力し、実行するとその計算はＣＰＵで行われる。この例はかなり直接的な計算の例であるが、これ以外にも様々な処理をＣＰＵで行っている。Windows のパソコンであれば、i5やi7と書かれたシールが貼ってあることが多いが、これはＣＰＵの性能を表すもので、ＣＰＵの性能が高いほどより高性能なコンピュータである。

ＣＰＵの説明を行なったが、一般的なコンピュータを理解する上で、メモリも一つの重要な構成要素である。メモリはデータの置き場所で、ＣＰＵで計算を行う際に計算対象がメモリに置かれている。例を用いて説明をする。図書館のような本棚が多くあるような場所で、作業机の上で作業をするとする。作業をする人がＣＰＵに相当する。作業をする人は、多くの本棚から必要な本だけを取り出し、それらを作業机に置く。それらを読み、ノートをとるといった作業を行う。ここで作業机がメモリに相当する。必要な情報を本棚という情報置き場から取り出し、それを作業机（メモリ）に置いておき、作業をする人（ＣＰＵ）が作業机においてある情報をもとに作業を行う。このようにＣＰＵが計算対象とするデータをおいておくのが、メモリである。メモリは大きいほど性能が良いと言える。先ほどの例で言うと、作業机が大きいほど、より多くの情報をおいておくことが可能であるが、作業机が小さいと必要な情報が作業机に置ききれない。そのため作業机から必要のなくなった本を本棚に戻し、新たに必要となる本を本棚から取り出す必要があり、余分な作業が発生してしまう。

これまでをまとめると必要なデータをメモリにおき、それを用いてＣＰＵが計算を行うのが一般的なコンピュータの構成である。では私の研究で扱っているＰＩＭはこれと何が異なるかをここから説明していく。

ＰＩＭは Processing-in-Memory の略であり、メモリ上で処理を行うと日本語訳できる。先ほどの例において、作業する人（ＣＰＵ）は作業机（メモリ）にある本を読み、そのデータをもとに作業を行う必要がある。作業をする人は一人しかいないため、作業机にある本を読んでいる間は他の作業ができない。そこで作業机自体に作業をする能力を持たせてしまうのがＰＩＭである。つまり作業をする人が何もしなくても、作業机が机においてある本を読み、そのデータをもとに作業を行う。これにより作業をする人は、本来であれば行う必要のあった作業が作業机によって完了されているため、

他の作業に取り掛かることができる。このようにメモリ自体に計算機能をつけたのがＰＩＭである。ＰＩＭは従来のコンピュータと比べて大きく二つの特徴がある。

一つは全体としての計算速度が向上する可能性を持っていることである。作業机自体に計算機能がついていることにより、作業をする人だけが作業をするよりも全体として、高速に全ての作業を完了させることができる可能性がある。ここで可能性があると断言をしていないのは、現段階ではＰＩＭはまだ研究されている途中であり、一般的に従来のコンピュータよりも高速であるとは言い切ることができないためである。従来のコンピュータにおいて、メモリからＣＰＵにデータを送る処理、例で言えば作業机にある本を作業する人が読むという作業は、他の作業よりも多くの時間がかかっている。近年半導体技術の向上により、ＣＰＵの性能は向上し続けている。しかしメモリからＣＰＵにデータを送る速度はあまり向上しておらず、メモリの壁と呼ばれている。つまりＣＰＵの性能が向上しても、データをメモリからＣＰＵに送る処理が遅いため、それがコンピュータの性能向上の足を引っ張っているということである。ＰＩＭではメモリからＣＰＵにデータを送る必要がないので、この問題を解決するのではないかと期待されている。

二点目の特徴として、消費電力が小さいことである。コンピュータは電気で動いている。消費電力が高いことの問題は身近な例で言うと、電気代が高くなることである。私たちが普段使用するデスクトップコンピュータやノートパソコンであれば、消費電力はそれ程のものではないが、これが大規模なコンピュータとなれば話が違ってくる。近年流行りのＡＩでは、ＡＩを構築するにあたって多くの計算を行うが、これには多くの電力を消費する。またスマートフォンを使用している人の中には、写真やバックアップデータをクラウドに保存している人が多いと思う。クラウドの内部にはそのようなデータを保存しているコンピュータがあり、そこでは毎日かなりの電力を消費している。このようにコンピュータを普段使いする際にはあまり気にすることのない消費電力であるが、大規模なコンピュータでは問題となっており、これを解決できる可能性をＰＩＭは持っている。

ＰＩＭの説明とともに、一般的なコンピュータの話をしてきたが、理解できただろうか。近年ＡＩに代表されるＩＴ技術が発展しており、多くの人が一度は使用したことのあるコンピュータがどのように構成されているかを理解するのは、非常に有意義であると考えている。私の舎誌を読んでコンピュータや、私の行なっている研究に興味を持ってくれる読者がいると幸いである。

自分らしいリーダーシップ

東京科学大学　情報理工学院情報工学系　修士一年
吉谷　碧海

私は最近就活をしている。エントリーシートで「あなたがリーダーシップを発揮した経験」を聞いてくる企業がいくつかあった。リーダーシップとはなんだろうか。今回の舎誌ではこの「リーダーシップ」をキーワードに自分の考えを述べる。

wikipediaには次のように書かれていた。リーダーシップ：「自己の理念や価値観に基づいて、魅力ある目標を設定し、またその実現体制を構築し、人々の意欲を高め成長させながら、課題や障害を解決する行動」また、chatgptに聞くと「個人や集団が目標を達成するために、他者を導き、影響を与える能力や行動」と返した。chatgptの返の方がわかりやすいがwikipediaの「自己の理念や価値観に基づいて」という部分はリーダーシップを考える上で重要なものだと感じる。そのため、リーダーシップとは各個人によって定義の違うものであり必ずしもリーダーだけが持つべきものではない。どのようなコミュニティ、ポジションにいても自分らしいリーダーシップを確立させることが大事である。自分らしいリーダーシップがどのようなものかを考えるためには、まず自分を見つめ直し、自分は何が好きか、得意なことは何か、何がしたいかを明確にすべきである。

完全なるリーダーに必要な要素を考えることを見つけ出すのは非常に困難である。リーダーやリーダーシップに関する文章を読むにあたって、人それぞれリーダーシップのあるべき姿の主張は、重なる部分はおおくも、異なっている部分もあった。例えばリーダーは、自分への集中力、他人への集中力、外界への集中力を高め、それらを自在に操ることができなければならないと主張する文章がある。また他の著者は、リーダーは「先を見通す力」、「疑問を投げかける力」、「読み解く力」、「意思決定力」、「一つの方向にまとめる力」、「学習する力」の六つの力を完備すると述べている。このようにリーダーに必要な力は人によって主張は様々であり、あげ出すとキリがない。それと同時にそれぞれの人間が主張するリーダーのあり方、リーダーシップを網羅的に自分の能力として向上させることは不可能であると感じた。例えば先に述べている六つの力を全て得るだけでも非常に困難なことだ。だからこそ、自分らしいリーダーシップを確立させ、メンバーで補完しあい組織として様々な能力を持ち合わせていれば良い。

今まで、リーダーシップと聞いて思い浮かぶものといえば、コミュニケーション力や、マネジメント力、とにかくチームをある目標に引っ張っていくことができるということであった。しかし、自分らしいリーダーシップはなんなのだろうと模索する中でリーダーシップに関する興味深い新しい発見が二つあった。一つは「他人へのリーダーシップの付与」。もう一つは「貪欲にたくさんの知識を学ぶ」ということである。この二つは私が将来仕事などでリーダーのようなポジションに着いた時に実行したいものだと感じた。

一つ目の他人へのリーダーシップの付与に関しては、シェアドリーダーシップという考え方が元になっている。シェアドリーダーシップとは、従来のリーダーシップモデルとは異なり、リーダーシップの役割や責任が一人のリーダーに集中するのではなく、チームメンバー全員に分散されるリーダーシップスタイルのことである。聞くと素晴らしいスタイルだと感じるが簡単に実現できるようなスタイルではないように感じた。組織のメンバーは一人一人違う性格を持っており、それぞれが簡単にリーダーシップを発揮できるとは到底思えない。例えばモチベーションの低いメンバーもいる可能性があるはずだ。モチベーションが低いメンバーがいる組織で、どのようにしてシェアドリーダーシップのスタイルを実現させることができるだろうか。ここで必要になるのが、それぞれの人間へのリーダーシップの付与だと感じた。リーダーシップの付与に必要なステップは、各メンバーとの関係性の構築、メンバーへの共感と質問、メンバーの理解だと考えている。このステップを踏まなければ、リーダーシップの付与はできない。メンバーへの理解がなければ適切なリーダーシップを付与することができない。メンバーの理解ためには共感と質問を繰り返さなければならない。共感と質問をするにはそのメンバーとの関係性が重要である。このようなステップを経て初めてシェアドリーダーシップが実現される。そのため、組織で行動する上であまり献身的でないメンバーに対し、上記のようなステップを踏まずにリーダーシップやそれに値する行動を求めるのは私に取っては正しいリーダーシップではないと考える。

二つ目の貪欲にたくさんの知識を学ぶことは、リーダーに必要なものとして深く共感した。私は幼少期から高校生まではリーダーのポジションにつくようなことがよくあった。例えば、委員長や体育祭の応援団団長、生徒会執行委員など。しかし、大学に入りリーダーのようなポジションにつくことが極端になくなった。この要因として一つはそのような機会が減少したことがあるがもう一つは自分自身の問題である。自分自身の問題とは、リーダーとなる機会が減少したことによる挑戦することへの恐れと、その恐れの根本的な原因となるリーダーとしての知識量の少なさである。高校生までの学生時代、それほど大量な知識量がなくともメンバーとの相互の信頼とやる気だけでリーダーに努めることが出来ていた気がしている。しかし、大学に入り周りが成人した大人である以上中途半端な知識量とやる気では人の上に立つことが出来ないと思っている。このことから自分はリーダーに関する知識、組織に関する知識、組織を取り巻く知識を貪欲に追い求めることをせず、リーダーというポジションにつかなくなってしまったのだと改めて感じた。自分を見つめ直すことが出来た今、あらゆる知識を貪欲に取り入れる姿勢を重視したいと考えている。

結局自分らしいリーダーシップにおいて大事にしたいことは「ピープルリーダーシップ」、「ナリッジリーダーシップ」のどちらも取りこぼさずに向上させるということである。経験や勉強によるノウハウの習得と他人を成長させるような行動で将来組織のリーダーとなった時に自分のリーダーシップを発揮したい。

四年間を振り返って

目白大学　人間学部人間福祉学科　四年
大塚　はな

今年の舎誌では大学四年間を振り返ってみようと思います。

一．大学一年生二年生

私が大学に入学したのは二〇二一年四月でした。コロナ禍真只中で一年生の頃はほぼ大学には通学せずリモート授業でした。今思えばすごく良い経験をしたと思います。私は人とかかわるのがあまり好きではないので、四年間リモート授業がいいなーと思っていました。自分のペースで自分の好きな時に授業動画を再生して授業を受けることができました。登校する日があまりなく友達を作れる状況ではなかったためテスト対策など不安な部分もありますが、なんとか乗り越え単位を落とすことなく一年生を終えることができました。二年生からは通常の学校生活を送れるようになりました。一限は九時からだったので早起きするのに苦労したり、友達とたくさん遊ぶ予定を立てていたので月に一〇〇時間もアルバイトのシフトを入れてアルバイトを頑張ったりと大変なこともありましたが、充実した一年でした。

二．大学生活、ゼミについて

大学のゼミでは「高齢者・若者の社会的孤立」「母子世帯や子どもの貧困」について学んでいます。

出生数の減少や若者の未婚化、晩婚化などを背景に、日本では少子高齢化が進行しています。そうした社会の変化や現状を調べ、さまざまな社会問題を解決するために必要な社会保障や社会福祉の役割について考察し実践的なフィールドワークを行なっています。ゼミのメンバーのみんなとも仲良くなれるか心配でしたが、一緒にゼミで施設見学に行ったり、遊びに行ったりするうちに仲良くなることができて良かったです。

三．授業と実習について

大学では福祉を四年間学びました。社会福祉士課程の実習で行った福祉事務所、更生施設、精神保健福祉士課程の実習で行った精神科病院、生活支援センターでの実習は特に印象に残っています。去年の二月に更生施設へ実習に行きました。今回の実習ではインテーク面接の練習を行うことができました。年齢、疾病、障害等が様々な人に面接を行いました。大学の授業でインテーク面接について授業で少し学んでおり、頭の中で質問内容も考えて挑んだのでうまくいくだろうと意気込んで挑んだがなかなかうまくできず苦戦しました。しかし二週間の実習中何度も面接を繰り返していくうちにコツやポイントをつかめたように感じました。相手へ質問責めになるのではなく自分自身の感情や情報も開示すること、相手が吐き出した感情に対しフィードバックすること、質問内容を工夫してみること等を意識して面接を行うとより良い面接ができるようになったと感

じました。また、利用者の名前や生年月日などを聞き出すことも重要だが利用者がどんな人なのか、人となりを知るということも重要なことだと学ぶことができました。また、一回の面接で相手の全てを知ることはできず日々のコミュニケーションでの積み重ねが相手のことをより知るためにかかせないものなのだと学びました。

また、福祉事務所に実習に行った際、アルコール依存症の家族会議に参加することができました。家族会に参加することで自分自身の視点を増やすことができました。家族会に参加する前（実習生としての視点）は旦那を自助グループや断酒会に参加させて、医療につなげればいいのでは？と考えていました。しかし家族会に参加した後（家族のお話を聞いて新しく見えてきた視点）は家族側にも葛藤があり、日々悩んでいること、「早く医療につなげろ」と様々な人に言われるたび自分自身を責めてしまうということ、本人が依存症であることを認めず治療につながらないことがよくあるということなど家族側の葛藤を知ることができました。また家族は依存症本人が元気だった頃や依存症になる前を知っているが故に余計に悩んだり苦しんだりしているのだと学ぶことができました。

四．アルバイトについて

大学ではサークルには入りませんでした。しかし、大学生になりアルバイトを始めました。私は三年間カラオケで働きました。時給は良くも悪くもないですが、なにより人間関係がいいのでここまで続けることができたのだと思います。わたしが働いているカラオケは治安が良く、嘔吐処理やクレーム対応もすることがなかったので働きやすかったです。

五．人間関係と友達

大学ではたくさんの友達に恵まれました。一年生の頃はリモート授業でほぼ学校に行きませんでした。しかし、月に一回程度登校する日がありその登校日で仲良くなった友達と新宿と遊びに行ったりディズニーに一緒に行ったりとたくさんの思い出を作ることができました。一緒に履修登録したり、授業を受けたり、期末テストに向けて頑張ったりと、友達がいたから自分も頑張れたと思います。小学校、中学校、高校とずっと友達には恵まれてきた人生でしたが、大学でも素敵な友達に巡り会えて良かったです。社会人になると会える機会も少なくなってしまうかもしれませんが、連絡を取り合って、時々、会えたらいいなーと思います。

六．四年間の振り返り

この四年間はあっという間だったと感じます。大学でたくさんのことを学ぶことができ充実した四年間でした。コロナ禍からはじまり、大変なことも多かったですがその分様々なことを経験することができたと思います。また、四年間一人暮しをしてみて辛いことがひとつもなく、ただたのしくて、一人の空間が楽でした。自分の部屋を自分の好きなように使えること、好きな時に好きなことができること、なにより一人でいることが本当に大好きなのでそれが一番

嬉しいし楽しかったです。これからは、二月の国試に向けて勉強を頑張っていきたいと思います。

優先順位とセレンディピティ

青山学院大学　総合文化政策学部総合文化政策学科　四年
髙石　光輝

気が付けば大学四年生になっていた。大学生活も残り約半年。そして今学生生活最後の夏休みを迎えている。「学生生活最後の夏休みだし、後悔がないよう満喫するぞ！」そう思っていたのだが、どうして今私は頭を抱えているのだろう。お察しの通り、今年も舎誌の季節がやってきてしまったからである。思い返してみると、去年も、それ以前もずっとこの時期には頭を抱えていたような気がする。四年間の大学生活で様々な経験を積み、それなりに成長してきたつもりではあったがどうもこの部分は変わらないらしい。なんて言っていても舎誌がひとりでに完成するわけでもない。そろそろ覚悟を決めるしかないだろう。まあ、毎年書き続けてきたわけだから、今年に限って書くことができない、なんてことはあるまい。なんて自分に言い聞かせつつ、今年も私が今考えていることについて綴っていこうと思う。

さて先にも書いたとおり私もとうとう大学四年生。来年の春からは社会人になるということもあり、友人たちと将来について話す機会が格段に増えたように思える。どんな仕事がしたいのか、転職はするのかといった仕事の話はもちろん、結婚はしたいのか、するとすれば何歳ごろがいいのか、子供は欲しいのかなどなど。お互いにそういった話をすることで各々が自分の将来をどんなふうに考えているか分かることはもちろん、一見似ているようなものはあっても一人一人異なっているところも非常に面白い。むろんこういった理想の将来はこれを読んでいる皆様をはじめ多くの人々が持っているだろう。もし機会があるならば是非聞いてみたいものだ。

そんな中、私はこんな動画を目にした。題名は、「人生をビンに例えると…」。YouTubeをはじめ各種ＳＮＳで検索すれば同様の動画が多くヒットすると思うので、時間があれば是非視聴してみてほしい。とりあえず、（ネタバレにはなってしまうが）動画の内容について簡単に説明しようと思う。とある大学で行われた授業での話。教授が、生徒の前に大きなビンを持って現れる。教授は、生徒たちに「これで満杯かな？」と問いかけながらそのビンにゴルフボール、小石、砂を順に詰めていく。そして最後にビールを取り出しビンに注ぐと、ビンは満杯になった。その後、教授は生徒たちに「このビンは人生を意味していると思ってくれ」と言った。教授によると、ゴルフボールは家族や友達、健康など「一番大切なもの」を、小石は車や仕事などの「ある程度大切なもの」、そして砂は「それ以外の些細なこと」を指しているという。そしてこう続ける。

「もし砂を先に入れたらゴルフボールや小石が入るスペースがなくなる」、そしてこれは「人生と一緒さ」と。重要ではないことに時間を使いすぎてしまうと、本当に大切なものに時間を使えなくなってしまう。だからこそ自分の幸せに必要なことを整理し、優先順位をつけるべきだと。最後に、生徒がビールの意味について尋ねる。すると教授はこう答えた。「どれだけ満杯に（＝忙しく）見えても、友達とビールを飲む時間はあるってことさ」。

ここまでざっと動画の説明をしてきたが、この話を聞いて皆様はどう思われただろうか。私はこの動画を初めて目にした時、はっとさせられたことをよく覚えている。特に、入れる順番を逆にしてしまうと、他のものが入らなくなるという部分には強く考えさせられた。これまで約二二年過ごしてきたわけだが、明確な優先順位は持っていなかったように思える。もちろん、何らかの価値基準に基づいて選択を繰り返してきたわけだが、優先順位と呼ぶにはいささか曖昧すぎるように思える。かといって、これまで過ごした二二年を後悔しているわけではないのだが、「人生一〇〇年時代」ということを踏まえると既に二〇％ほど使い切ってしまった計算になる。しかも、幸運にも私はいま学生から社会人という節目にいる。この辺りで残り約八〇年の人生を最大限楽しむためにも今一度考え直してみようと思った。確かに、私たちの人生はビンのように有限であるし、そのビンもいつ割れてしまうか分からない。そんな中で何が自分にとってのゴルフボールなのか改めて考えてみるのも悪くないのではないだろうか。むろん、自分にとってのゴルフボールが誰かにとっての小石や砂であることもあるかもしれないし、逆もまた然りである。例えば、動画の中ではゴルフボールは「家族、友達、健康」小石は「車や仕事」とされていたが、仕事が最も大切だ、という方もいるかもしれない。だが、大事なのはそこではない。自分にとってのゴルフボールを設定し、優先順位をつけていくこと。そうすることで、人生の充実度は変わってくるのではないだろうか。

とまあここまで優先順位の重要性・必要性について考えてきたのだが、私は優先順位にこだわりすぎることも良くないと考えている。というのも、以前読んだ本にこんな一節があったからである。『こだわり』は、いい意味で使ってはならん言葉だぞ。（中略）本来の意味は、『拘泥すること。難癖をつけること』なんだから」（三浦、二〇一一）。こだわりという語意についてはひとまず置いておくとして、どうして私がそう考えたのかを少し説明したいと思う。

「セレンディピティ」という言葉がある。辞書を引いてみると「求めずして思わぬ発見をする能力。偶然の発見」（デジタル大辞泉）という風に書いてあるが、一般的には幸運な偶然、予期せぬ出会いといった意味で使われている。そんなセレンディピティも、人生を有意義に過ごすためには大事なのではないかと考える。というのも、セレンディピティにより成功した事例は数多く存在しているからである。コカ・コーラやX（旧Twitter）、果ては万有引力の法則までもがセレンディピティの事例とされているほどだ。もちろんただの偶然と言ってしまえばそれまでなのだが、その偶然が成功に結びついていることは紛れもない事実である。これらの事例は科学

的、商業的なものだが、人生にも当てはまるのではないだろうか。道に迷ったらとても景色が綺麗なスポットを見つけたとか、たまたま入ったご飯屋さんが絶品だったとか。皆様も一度はそういう経験をしたことがあるのではないか。些細な出来事だったとしても、そういう偶然の出会い、セレンディピティは人生に喜びを与えてくれるはずだ。そしてそんなセレンディピティは、何事にも好奇心をもち行動量を増やす、人との接触を増やすなどの方法によって高めることができるという。より具体的に言うと、いつもと違う行動をしてみる、他者との交流を増やしてみる、といった形だ、つまり、自分に固執するのではなく、積極的に変化を楽しみ外へ出てみる。そんな姿勢が重要だということだ。自分の中の優先順位も確かに大切だが、こだわりすぎるべきではないのだ。

まとめると、「自分の中の優先順位を大切にしつつも、変化を楽しむ姿勢でいること」こそが、人生を有意義なものにするうえで大切なことだと私は考える。人生何が起こるか分からない。だからこそ、こんな姿勢で過ごすことが大切なのではないだろうか。もちろん、この考えが絶対的に正しいとも思わないし、ただの気休めだと忘れてもらっても構わない。だが、これを読んでいる皆様が自身の人生を考えるときに少しでも参考にしてもらえれば幸いである。

参考文献・引用元

https://www.youtube.com/watch?v=SUtXF6WhKXw
https://dmzcms.hyogo-c.ed.jp/sandaseiryo-hs/NC3/wysiwyg/file/download/1/8610
三浦しをん（二〇一一）『舟を編む』光文社
セレンディピティー【serendipity】、デジタル大辞泉、Japan Knowledge, https://japanknowledge-com.aguilin.idm.oclc.org
グロービス経営大学院（二〇二二）・〝セレンディピティとは？ビジネスで注目される理由と起こりやすくする方法〟GLOBIS CAREER NOTE. https://mba.globis.ac.jp/careernote/1497.html

東南アジア日記

早稲田大学　文学部英文学コース　四年
高部　吉之介

九月四日

韓国の大邱空港で乗り換えをする。割と時間もあるので、歩いて行けるあたりで軽くご飯を食べることにした。小さな個人経営のお店に入ると、メニューは韓国語のみで、写真もないので困っていると、見かねたお店の人がおすすめの料理を教えてくれた。キンパとトッポギだ。キンパは、日本で食べる「韓国海苔」の味がして食べやすかったが、トッポギは想像以上に辛くて、全部食べきれなかった。申し訳ない、と思いながら支払いをして、「カムサハムニダ」

と言って店を出た。
ベトナム・ダナンまでの飛行機の中で、船を漕ぎながら見た輝く都市は、もしかしたら上海か香港だったりするのだろうか。ダナンに着いたのは日付を超えた後で、ビールとフォーを宿の近くで食べてすぐに寝た。

九月五日

街の中心のはずなのに、やけに暗くて少し怖いなと昨晩は感じていたが、昼間は人通りも多くて賑やかな通りだったんだと気づく。
それにしても原付が多い、だから僕たち歩行者は原付の隙間をうかがって道路を渡る。四人家族で一つのバイクに乗っている人たちも見かけた、文字通り車の代わりになっているのだ。バイクタクシーのおじさんに誘われて、初めて三人乗りをした時は、たった数キロメートルの移動だったのに原付を降りると手が汗でぐっしょりだった。
ダナンのビーチ、南シナ海は波が高くて強い。波に流されて、近くで泳いでいた欧米の観光客と何度もぶつかってお互いに笑った。仰向けになってプカプカ浮かびながら、眠くなりながら空を見ていられる海を、まだ私は瀬戸内海しか知らない。

九月六日

午前中のうちに五行山（マーブルマウンテン）に行き、午後からはダナンから三、四十キロほど離れた場所にあるホイアンに向かった。ベトナムは東京のようにどこでも鉄道が通っているわけではないので、観光客は主にタクシーを使った移動になる。ただ、客引きや流しのタクシーはぼったくられることが多いと聞いたので、スマホからタクシーを予約して乗ることにしていた。この日の移動もそのつもりだったのだが、五行山を出たところで、タクシーのおじさんに話しかけられた。最初は断るつもりだったが、なんとなく成り行きでおじさんのペースに乗せられて、その人のタクシーに乗ることになってしまった。
一度ダナンに戻って荷物を回収して、そこからホイアンまでの道程、一時間半程度だったが、おじさんと車内でずっと会話をしていた。日本に友人が何人もいると言うので、俺は日本に住んでいたのかと勝手に早とちりして、会話を進めようとしたところ、彼は外国に行ったことはないと言う。ベトナムは賃金が低いから、日本とかに出稼ぎに行く人は多いけどね、と言われ、余計なことを聞いてしまったかなと思った。
少々高くついてもしょうがない、と思っていたあたりでホイアンに着いた。値段を聞けば、相場よりもいくらか安くしてくれていた。少し驚きながらお金を渡し、礼を言って別れた。その後は、彼が教えてくれていたバインミー屋に行った。

九月七日

ホイアンは綺麗な街だった。特に中心地は特別整理されていて、道も歩きやすく、観光客向けの小綺麗なお店が多かった。昨夜まで

いたダナンのビーチもこれは同じで、観光客の多い街は外国資本のリゾートホテルが立ち並び、綺麗なリゾートとして開発されていた。

ただ、ホイアンは小さな街だから、少し歩けばそこに住む人たちの生活が広がっていた。今朝は中心地から少し離れたあたりをぶらぶらと散策していたが、同じベトナムでもダナンよりも人々が気さくな感じがする。宿で唯一英語ができた若いお兄さんや、朝ごはんを食べた店のお母さん、飲み物を買いに寄った薬局のおばさん、みんなが見知らぬ観光客の自分に優しく接してくれた。近くに中学校があって、中学生たちはみんな原付で（私からしたら）ヒヤヒヤするような道を運転していた。

九月八日

昨日からベトナムはカントーにいる。南北に長い国だから、中部のダナンから南部のカントーまででも、千キロ以上離れている。だからかどうかは知らないが、ダナンやホイアンは韓国人の観光客が多く、道を走る車もヒュンダイ等の韓国車が多かったが、カントーに来てみればトヨタやマツダなど日本車がよく目についた。それと、車のナンバープレートに数本の花が挟まれているのを見かけたが、ネットで調べてみてもよく分からなかった。誰か教えてほしい。

メコンデルタの都市、ということだけ知っていて、何か目当てがあって訪れたわけではなかったので、昨夜は適当に街をぶらついていた。ダナンやホイアンに比べて観光地、という雰囲気でもなく、観光客向けの場所もあるけど地元の人たちの生活が存在している感じがした。マーケットを少し覗いてみたら、フルーツや魚がたくさん並んでいて、地元の人たちが買いに来ていた。当然だが、観光客の俺が話しかけられたり、売り込みをされたりすることは一度もなかった。ベトナムに来てからと言うものの、客引きに声をかけられることばかりなので、新鮮な感覚だ。

昼頃に長距離バスに乗り込んで、約三時間でホーチミンに到着。二段ベッドの寝台バス、と言った感じでなかなかに快適だった。

九月九日

昨夜は宿についてから少し外を散策したのだが、宿が「ブイビエン通り」と呼ばれる繁華街の近くだということもあって、街の雰囲気に驚いた。これまでの都市に比べて、原付や車の騒音が凄まじく、「ブイビエン通り」に至っては、道を通るだけで耳を塞ぎたくなるくらいの音量のクラブミュージックが両側の店から漏れ出ていた。

ブランドのコピー商品、パチモンが山のように売られていた「サイゴン・スクエア」で見かけた日本人二人組、後輩っぽい男がもう一方に向かって「高そうに見えますよ！いいっすよ！」と言っていた。ホイアンで出会った女の子は、自身のパチモンのバッグを指して「え？これ偽物よ！全然安い安い！」と言っていた。

急に雨が降って来て、ちょうど近くに大きめの書店があったの

で、雨宿りついでにぶらぶらとみていたら、「日本人ですか」と話しかけられた。自分の親よりは年上だろうか、男性が日本語で話しかけて来た。聞けば、九〇年代に広島大学の大学院に留学していて、今はホーチミンの大学で教授をやっているらしい。日本人がいるとたまに話しかけるらしい。日本語で書かれたホーチミンの屋台のフリーペーパーをくれて、少し話したのち別れた。外国で、自分の知らない時代の日本を知る人に出会う、どこか不思議な感覚。

九月十日

有名な観光地をいくつか回った。昨日からなんとなく思っていたが、ホーチミンは散歩が楽しい街だ。それはホーチミンが都会だから、とかではなくて、歩いて行ける距離で景色が変わったり、公園やベンチがあって気楽に休める場所があったりすること、だったりする。

ベトナムに来て一週間が経った。初めは無茶苦茶な交通状況にビビっていたが、それにももうすっかり慣れ、特にホーチミンに着いてからは、バイクタクシーで街を移動するのが楽しくてたまらない。後ろに乗って足を開いていたら、隣のバイクと当たりそうになってヒヤヒヤすることもあるけど、歩道を使ってショートカットしたり、車と車の間をギリギリですり抜けていくのが、スリルと爽快感があって気持ちが良い。

それにしても、ベトナムの交通状況は本当に無茶苦茶で、今日は渋滞と信号無視のせいで、呼んだタクシーが一時間経っても数十メートルしか動いておらず、雨降る中路上で二時間近く待たされたりもした。それなのに、やっと合流したら全然申し訳なさそうにしてないのも、適当でゆるい感じがして良い。

九月一一日

朝イチの長距離バスに乗り込み、カンボジアの首都プノンペンに向かう。初めて陸路で国境を越えるのでワクワクしていたが、検問所で写真を撮っていたら、写真禁止だったみたいで、ちょっと怒られた。

夜ご飯を食べたレストランで、ウエイターの男の人が英語をできたので、「ありがとう」はクメール語でなんというのか聞いてみたところ、手のひらを合わせて「ŏkŏun」だと、教えてくれた。見よう見まねで、何度かやり直しながら言ってみたところ、笑いながら答えてくれた。

カンボジア料理は、ベトナム料理よりも複雑で馴染みのない味がした。メコン川で採れる魚を使っていたりするようで、濃厚な味がする。個人的な好みだとさっぱりとしたベトナム料理の方だ。

夜にマーケットの近く、川沿いで涼んでいると、男が一人近寄って来た。タバコを一本くれと言うので分けてあげると、次は船に乗らないかと営業が始まった。もう帰るからと断ったらどこかに行ってしまったので、特になんとも思っていなかったら、一〇分後にまたやって来て、今度は覚醒剤を買わないかと言われた。当然断ったが、子供が遊んでいるような場所で、覚醒剤を観光客に売っている

人間がいるのか、と思った。

九月一二日

プノンペンでは、ポルポト政権（クメールルージュ）の虐殺に関する場所をいくつか周り、そのまま夜行バスに乗って、アンコール・ワットの街シェムリアップに向かう。約六時間、バスに揺られながら眠る予定だったが、外の光は遮れないし、道が荒いのかかなり揺れるしで、結局寝たり起きたりを繰り返していた。

九月一三日

本当は今日のうちにアンコールワットを観光して、明日にはバンコクに向けて発とうと考えていたのだが、夜行バスで期待していたより眠れなかったのに加えて、アンコールワットの観光がかなり体力を使うと聞き、今日は休息日にすることにした。

少し宿で休憩してから、昼頃にご飯を食べに出かける。適当に入った店で席に案内されると、二匹のネコが我が物顔で椅子に座っていた。店員さんが気づいて追い払ったが、俺が昼寝を邪魔したようで、少し申し訳ない。その店で、パイナップルをくり抜いた皿に入った炒飯と、ビールを二杯飲んだ。そのままいい気分だったので、街の外れの公園まで歩いて行って、ベンチで横になって小一時間くらい昼寝をしていた。明日もずっとこれでいいな、と思った。

レストランで夜ご飯を食べていたら、突然停電で真っ暗になる。蝋燭を机の上に固定して、その光でご飯を食べた。

九月一四日

早朝五時前に、宿の前までトゥクトゥクに迎えに来てもらって、一日がかりでアンコールワット遺跡（群）を巡る。アンコールワットは階段が急で、かなり過酷だった。

この日ガイドをしてくれたトゥクトゥクのおじさんには、夜行バスから降りてすぐ出会った。寝起きでここがどこかもよく分からないし、スマホもうまく繋がらないしで、観光客狙いの営業とは分かっていたが、とりあえず宿までのトゥクトゥクをお願いした。しばらくして、連れが夜行バスにスマホを置き忘れたことが分かり、そんな時におじさんがバスに連絡してくれて、なんとかことなきを得た。そんなこともあり、彼からアンコールワット観光の提案をされた時は、断れなかった。

先に金額を確認したかったのだが、「君が払える範囲でいいよ」と言われたので、不安になりながらも相場を超えない程度の金額を支払うつもりでいた。謙虚で真面目な性格の彼は、俺とのメッセージのなかで、たびたび「僕を選んでくれてありがとう。僕と僕の家族を助けてくれてありがとう。」と送って来ていた。彼には二人の子供がいて、片方は数ヶ月前に生まれたばかりだとも言っていた。結局支払いは、俺たちが払うつもりでいた倍近い金額になってしまった。決して払えない金額ではなかったが、正直痛い出費だ。ただ、今日一日のアンコールワット観光は、彼のおかげで楽しめたし、ここで出し渋るのも申し訳ないと感じていた。彼に子供がい

て、家族を支えなければいけないという話が本当かどうかは分からないが、少々高くても彼になら払ってもいいと俺が思ったことは事実だった。

九月一五日

午前中から、タイ国境の街ポイペトに向かう。昨夜の支払いを済ませた時点で、手元にはドルもリエルも殆ど残っていなかった（カンボジアはＵＳドルも流通している）。ポイペトに着いた後に気づいたが、よくよく考えてみれば、この田舎町に日本円を両替してくれる場所があるかは分からなかった。仮に両替できずに、タイに入国したはいいが電車に乗れない、となったらどうしよう、と不安が募る。バス降り場から国境までは二キロ弱あったが、現金がないので炎天下の中歩くしかない。道沿いの両替所に片っ端から尋ねてみるが、どこも日本円を取り扱ってはいなかった。もう一度シェムリアップに戻るのを覚悟したあたりで、日本円を取り扱っている両替所を見つけ、本当に安心した。

タイに入国してからは、電車で六時間かけて首都バンコクまで向かった。蒸し暑くて、殆ど満席の車内で、向かいに座ったタイ人のおじいさんからお菓子をもらったりして、のんびり電車旅が始まった。このおじさんは、その後何時間も俺にタイ語で延々と何か話しかけていて、俺も分からない顔をしながらなんとなく相槌を打っていた。

車内からは、線路沿いにバッファローの群れが見えたり、二重の虹が見えたりした。虹を指さして、向かいのおじいさんに教えてあげようとしたら、なぜか不機嫌になっていて、どうしたんだと思ったが、後から調べてみると、タイで虹を指差すのはタブーらしいと分かった。なるほど。途中の駅でBLACKPINKのグッズを持った中学生（？）が乗り込んできて、LISAがタイ出身で人気だったりするのかなあ、と思ったりもする。暗くなってからは、街の明かりが殆ど届かない平野を走っていて、ここからは真っ暗な景色が続いた。外からはこの電車がよく見えるんだろうな。

九月一六日

少し中心地から外れた場所にある寺院に行ったら閉まっていて、日も暮れて来てちょうどよかったので、歩いて夜ご飯を食べられそうな場所を探す。しばらく歩くと道沿いにあった、屋台が集まったマーケット（？）で食べることにした。

屋台を決めて、文字は読めないので指さしで注文しようとしたところ、店員さんは英語を全く受け付けていないようで、「？」の表情で全く相手にされない。俺も困りながらGoogle翻訳でなんとか意思を伝えようとするも、横から割り込んでくる現地のタイ人が次々と注文していくので、後ろに追いやられてしまった。Google翻訳を使っている余裕などないなと分かり、iPhoneでメニューの写真を撮った画面を拡大しながら店員さんにアピールしてなんとか注文をとってくれた。

九月一七日

昨日のうちに、王宮や寺院などの観光地はいくつか巡っていて、加えて入場料が高く、暑くて歩き回るのも疲れるので、一七、一八日は手軽な施設をいくつか訪れた。

赤十字病院に併設されているスネークファームは、日本人のレビューも多いが、ほとんどの人は感染症の予防注射で病院に行くついでに訪れているようだった。毒蛇のショーや、実際に蛇を触れたり、蛇に関する様々な展示が見れたりした。

ここで、蛇のホルマリン漬けはかなり迫力あるなと感じていたが、この翌日に訪れたシリラート医学博物館では、夥しい数の幼児のホルマリン漬けや人間のミイラなどが展示されていて、バンコクでの思い出が全て上書きされる勢いだった。

九月一八日

ＪＲ蒲田駅の西口に「Amigo」というタイ料理屋がある。二年近く前に初めて行ってから、そこのカオマンガイが美味しくて、しばらくは週一、二で通っていた。

そういうわけで、タイではカオマンガイを食べるつもりでいたのだが、結局三泊したバンコクでは三回ほど食べた。蒲田で食べるカオマンガイよりも、鶏肉は柔らかかったが、ソーツの味は蒲田の方が好みだった。基本的にこちらの味付けは辛い。

お墓について考える

日本大学　理工学部機械工学科　四年
谷上　龍平

大学も最終学年になり来年から社会人になる。今の自由な時間が多い生活との別れはさびしい。社会人になると、まとまった休暇をとるのが難しくなると予想されるため就活も終わった四年の夏休みは人生最後の長期休暇なのかもしれない。三年次の昨年は夏季インターンシップがあり、夏休みは実家に帰省できなかったが今年は十日ほど山口に帰った。私は帰省すると毎回必ず行うことがある。墓参りだ。小さいころから私の家では慣習があり、よく行っていたが昨年、親族が亡くなったこともあり思い入れが強くなった。墓について考えるのはこの歳では早すぎるかもしれないが今回は日本の墓について、いささか私見を述べたいと思う。

まずは、墓参りの歴史について。もともと日本では遺骨信仰があり亡き人の遺骨を丁重に葬る文化があった。この文化はあらゆる民族で見られ、思い起こしやすい例で言えば日本では古墳、エジプトではピラミッドがある。日本に仏教が伝わる以前は土葬が主であったが仏教の開祖であるブッダが死後に火葬された影響を受けて仏教が日本に広まるにつれて火葬をするようになったといわれている。それでも火葬をするのは僧侶や貴族階級で庶民は長らく土葬の場合が多かった。土葬と火葬は埋葬方法の違いだが火葬するにはそれなりの設備を必要とするため、身分により差が生じていた。土葬だと

棺桶や遺体の腐敗に伴い地面が陥没するため、その上に石塔を立てることがなく埋めただけの簡素なものであった。中には埋めることなく、そのままポイ捨てなんかもあったようだ。庶民がお墓を作るようになったのは江戸時代の頃からである。それまでは集落単位の大きな共同墓地に土葬し、現代のように家系や個人で墓石を作る文化はなかった。江戸時代までは位牌だけを管理しておけばよく、お骨に対しては信仰がみられず、肉体から魂が抜けた後の抜け殻のような感覚で骨には価値を感じていなかったそう。ましてや墓参りの文化もなく仏壇の位牌にお祈りするのが現代の墓参りと同じ意味を持っていた。状況が変わったのは明治以降、戦争の影響もあって遺骨を大切にしようという流れになり戦後に墓埋法ができ、遺骨を墓地以外に埋葬することができなくなった。火葬も普及していったことでようやく家系や個人で墓石に刻み現在のような各々お墓を立て遺骨を骨壺にいれて納めるようになり墓参りの文化が根付いたのだ。火葬をしてお墓を作る文化は実はそれほど歴史のあるものではないのだ。そのような事情があることから墓参りの文化は現代のようなお墓が普及していった戦後に生まれた比較的浅い文化ということになる。

さて、墓参り歴史について今まで触れてきたが近年話題に上がってきているのが墓じまいに関する問題である。墓じまいとは現在のお墓を解体・撤去して更地にし、その使用権を墓地の管理者に返還することである。簡潔に説明すると親族同意のもと遺骨を他の墓地に移送または永代供養墓地に改装することである。（永代供養とは遺族や子孫に代わり寺や霊園が管理維持していくこと）

先祖代々の墓を自分の代でおしまいにしようという動きが日本中で増加傾向にあり、墓に対する価値観の変化を如実に感じる。最近ではニュースにも取り上げられており社会問題となっているようだ。私が見たニュースでは墓じまいをしようという考えに至った経緯として子供や孫に経済的に負担をかけたくない、地方で子供が都会に出ていったため継承する人がいないといった話が多い印象だった。

お墓の面倒を見る人がいなくなった無縁墓が増加しており景観や維持費の面で問題視され、取り壊す事案もあるとのこと。このような事態を防ぐために墓じまいを選択する人も増えているようだ。墓を持たないという選択は少子高齢化が加速している今の日本では合理的なのかもしれない。近年では従来の伝統的な墓地や墓石を使用せず、自然環境に遺骨を還す埋葬方法が選択されることがおおいようで樹木葬や海洋散骨などの種類がある。継承者が近くに住んでいないことから生じる問題もさることながら経済的な話をするとお墓を一から用意するとなると平均で二〇〇万円ほどかかるが自然葬だと五〇万円ほどになり、お金で迷惑をかけたくないという意見が多いゆえに選ばれる理由の一つとなっている。お墓は維持・管理にそれなりのお金を要する。お墓を持つということは将来的には裕福な家庭限定の文化になってしまうかもしれない。ある調査によると新しくお墓の購入を考えている家庭の大半が永代供養を選択しつつあるようだ。私の家系のお墓も骨壺を入れるスペースが空いておらず

今後の話になった際、両親も帰省時には自分たちの遺骨は海に流してくれと言っていた。私も現段階ではどちらかというと海に流してほしい。

しかし、中には自分の代で新しくお墓を作るという人の意見もあり今後は二極化が進んでいくとみられる。墓を持つという選択をした人たちのなかにも変化が見られ地方の郊外にある墓は交通の利便性にかける、墓参りのときに天候の影響を受ける、清掃や除草といった手間がかかるといった点から現在人気なのがビル型納骨堂で都市部では既存のオフィスビルやマンションを改装し、お墓を収容しているようだ。その中でもボタン一つでエレベータのような機械でお墓の方が近づいてくるものもあるというのだからハイテク化が進んでいる。日本は都市化や高度経済成長の進展とともに核家族や単身者といった家族形態の変化と同時に死後の住まいであるお墓の在り方も変化している。

そもそも現代において墓をもつ意味は何だろうか。主には三つあるとされてきた。一つ目は故人が忘れ去られないようにすること二つ目は遺族の思いを形にするため三つ目はご先祖様を祀るためと言われている。また、入る側と見送る側の双方にも意見があるだろう。入る側としては長らく寄り添ったパートナーの近くにいたい、一人は寂しいなど他にも考えられる。見送る側としては居場所がはっきりしているから安心、墓参りという行為を通して故人を思い出すきっかけとなるだろうし、死について考えることで自分の人生を見つめなおす機会にもなると思う。科学技術が発達した現代では写真であったり形見であったり最近では遺骨から人工ダイアモンドを作り肌身離さず一緒にいることもできるらしい。必ずしも墓という形にこだわらなくてもよいのかもしれない。墓を存続させるのがよいのか墓をしまうのがよいのかは難しい問題である。少なくとも私は無縁墓となり何の血縁のないものに墓をいじられるよりは血縁関係のあるものの手で片づけられたいと思う。

日本は宗教に無関心な人の割合が高くすでに墓を必要としない時代に入りかかっているのかもしれない。

人は二度死ぬといわれており一度目は肉体の死、二度目は人々の記憶から消えた日だそう。形はどうであれ家族や先祖を想うことが何よりも大切でそのきっかけがお墓ではなくなりつつあるが今の状態ではないだろうか。誰かが面倒を見るだろうと他人任せにするのではなく一度親族で集まった時に話しあって方針を決めることをすすめる。

インドの諸文化～都市と地方のかかわり～

駒澤大学　仏教学部　四年
田弘　一真

一　はじめに

私は現在卒業論文の執筆を行なっている。論題はインド亜大陸、ベンガル地方における仏教文化の滅亡についてだ。そこで、今年の舎誌を使って一度インドの地方と都市の文化的な関わりの歴史を整理したいと考えた。

二　アーリア人の侵入

インド史を通観して舎誌を書き始めるにあたり、その基点となる事象を考えると、やはりこのような主題が考えられた。インド史について、政治的、文化的の両面において、状況を変化させる原動力として働いたのは、常に北西からの侵入者であった。そのような数ある侵入者のうちの一つとしてアーリア人を捉えることも出来るであろう。では、なぜ私はそれらの中でアーリア人だけをインド史を理解するにあたっての主軸として特別視するのだろうか。

インドでは政治勢力と宗教勢力が密接にかかわり、一方の枠組みがほとんどもう一方の枠組みとして機能することが珍しくない。それらあまたある集団のなかで、今日存在するものを大別すると、ムスリムとそれ以外に分けられるだろう。そのうち、ムスリムをインド史の主軸に据えるのは適切ではないであろう。なぜならイスラム勢力がインドの地を統治した勢力圏は歴史上屈指の広さを誇るが、その勢力の中心は亜大陸外にあり、中東を中心とするイスラム世界がインドにまで拡大した存在であるとみることができ、非イスラム勢力と違い、インドの地に本拠を置くものではなく、主体はあくまでインドの外にある。このような存在とその他の関わりを考えても、インドの歴史を広く説明することはできないであろう。

それでは、アーリア人の存在をインド史の主軸とすることの妥当性を検証するにあたって、次は非イスラムの勢力を検証してみよう。それらの中でアーリア人の存在を最も特別視することは果たして適切だろうか。実際、バラモンの祭官が支配する国家が広くインドで支配的であった時期は遠い昔、仏教誕生以前のころにあったのみで、その範囲も歴史上の他の帝国と比べて特別視するに値するだけの広さはない。アーリア人の存在は、ダルマを国の礎としてたて、物理的にも各地にダルマの存在を石柱として建て、南端を除いてほぼ全インドを支配したマウリヤ朝の存在と比べてなお比肩するものだろうか。インドにおける中世、ラージプート諸国家が乱立する時代には地方言語によってさまざまな作品が作られ、それぞれの土着の信仰の影響を強く受けた信仰が盛んになり、タントリズムの潮流はインドだけにとどまらずアジア各地に非常に広く拡散し、現代日本にすらその姿が見られるほどである。それらの文化を抱えていたラージプート諸国家は、バラモンの支配を受けてはいなかった。それならどうしてバラモン、ウパニシャッドなどのアーリア人の文化をインド史の中で特別視することができるだろうか。

結論として、それはできるといえる。確かに、純粋なるバラモンによる文化がそれ単体でインドにおいてどれだけ支配的であったかということは、時間的にも空間的にも他勢力と比べて抜きんでて強いとは言えず、むしろそれらに及ばない程である。しかし、インドにおける他勢力、シヴァ教もヴィシュヌ教も仏教もジャイナ教もアーリア人、バラモンの存在なしに語ることは決してできない。それらはどれも、アーリア人が築いてきたウパニシャッドまでの文化の上に成り立っている。もちろん、それらの宗教をバラモン教の進化したものだと考えるには、連続性があまりに乏しい。しかし、シヴァ教やヴィシュヌ教に至ってはイスラム教の進出に伴い、諸派がこぞって『ブラフマ・スートラ』の注釈書を書き、ヒンドゥー教としてのアイデンティを確立するのに、それぞれの間に共通するバラモン教とのつながりを頼った。このことから、インド史を理解するにあたって、やはりアーリア人の文化こそが中心として据えうるものであるといえる。

三　アーリア文化と多文化の関係

ここではインド史を理解するにあたっての軸として機能しうると判明したアーリア文化を中心に据えて、様々なインド内の文化、宗教について書いていく。そもそも、インドには様々な民族が存在している。現在のインド共和国で使用されている言語の多様さからその数の多さが分かるだろう。また、インドでは歴史上、亜大陸内が統一されていた時期は極めて短い。歴史を振り返ってみると、国内に様々な小国が乱立していた時期は珍しくなく、一つの大きな勢力がインドの中で力を持っている状態でも、その支配の及ばない地域や民族が同時に存在することが基本的であった。そのような離合集散を繰り返す状況は、インド内の実に多様な諸民族が交流を深めてきた結果である。

紀元前一二〇〇年ごろに成立したと考えられている『リグ・ヴェーダ』にはすでにアーリア人の侵入より以前からインドの地に住んでいたドラヴィダ人の言語からの借用語の存在が見られる。また、紀元前四世紀ごろにチベット系の出身ではないかとされる、シャーキヤ族のシャカが開いた仏教は、アートマンの概念など、バラモン教の思想を受け継いだうえに成り立っているという側面がある。そして、輪廻の概念や、その根底に潜む現世否定的な考えも受け継いでいる。また、その仏教はほぼ全インドを征服したアショーカ王により帝国じゅうに広められた。この仏教はマウリヤ朝、クシャーナ朝と続けざまに大きな帝国による庇護を受け、インド内で大いに広まり、七世紀まで存続した。ヴィシュヌ教とシヴァ教はもともとヴェーダの神々のうちの一つであったものが民間信仰と合一して成立したものである。バラモン教が仏教などの新宗教に圧迫を受け、勢力を回復するための戦略であると考えられる。ヴィシュヌ教の特徴は神への絶対帰依、バクティである。シヴァ教の特徴は神そのものと同一の存在になるというタントリズムという思想である。どちらもそれ以前のヴェーダの特徴である神格を祭式の中で操作し、いわゆる自力を頼りにする傾向からはなれ、他力、神の存在

を非常に重要視している。この二つの信仰はイスラム教の流入に際し大きな変化を遂げる。インドの諸宗教勢力が、自身のアイデンティをヴェーダとのつながりの正当性に見出し、誕生した様々なセクトはブラフマ・スートラの注釈書を競うように書き上げていった。そうしてそれらセクトを包括する概念として、ヒンドゥー教という概念が生まれたのである。

四　おわりに

以上の事柄から、インドの地方諸文化は、どれもアーリア文化と都度距離を調整しながらも、一定の関わりを持ってきたことが分かる。また、現在に至るまでインド内でのアーリア文化の地位は高まり続けている。イスラム教の流入に際して行われた「ヒンドゥー教」の成立時には、それを構成する諸要素はバラモン文化によって包摂され一体化することに成功した。また、そのような性質を持つヒンドゥー教の現在のインド国内での地位は現在とても高く、昨年のG20ニューデリーサミットで議長国のインドが国名のプレートにBHARATと記載したことからも、国内でのヒンドゥー教への支持の大きさがうかがえる。インドは国内の統制という面で常に不安を抱えている。今後インドが国際社会での地位を高めていくことを目指していくにあたり、国外と国内との両方の目線を意識していかなければならない。今後の「インド史」はどのように動いていくのかを注目していきたい。

そういうものにわたしはなりたい

東京電機大学　工学部第二部電気電子工学科　四年
中島　章伸

舎誌を書いていく上で過去の舎誌を読み返してみると、性格が表れているなと思うことがあります。特に岩陽学舎には賢い人が多いですから、読んでいて感心することも少なくありません。今回は賢い人と賢くない人の性格的な違いは何か、賢くない人が賢くなるにはどうすれば良いかについて考えて行こうと思います。私は賢くない人なので、読んでいる方で自分もだと思う方は、私と一緒に一つ一つ反省していきましょう。

まずは、性格がどういった時に表れ、そして賢い人と賢くない人との違いにどう関わってくるのか考えていこうと思います。

性格はまず、文章や話し方という基本的な側面に表れると思います。賢い人は、論理的で一貫性のある文章を書き、読者や聞き手に対して明確で分かりやすいメッセージを伝えることができます。舎誌五十二号で國次さんが書かれた舎誌を読むと、自分の意見を明確に示すだけでなく、その意見を裏付ける根拠も示していました。

一方で、賢くない人は、感情に左右されやすく、思いつきや衝動に任せた文章や言葉を使うことが多いです。私も思いつきの言葉を使いがちです。

話し方においても、賢い人は、相手の話に注意深く耳を傾け、適

切なタイミングで建設的なコメントを行います。先日、舎生の吉谷さんと話したときに、丁寧に話をするだけでなく、思いやりのあるアドバイスもしてくれました。

これに対して、賢くない人は、しばしば自分の意見を一方的に押し通そうとし、他者の話を遮ったり無視したりする傾向があります。私もつい言いたいことを言おうとしてしまう為に、相手に結論が伝わらない事が多々あります。

また性格は、日常生活における態度や行動にも大きな影響を与えていると思います。賢い人は、自己管理が得意であり、計画的に行動することが多いです。彼らは長期的な視野を持ち、目標を設定し、それに向かって着実に努力を続けます。舎生の森本さんは昨年、大学院の試験の為に毎日舎生室に籠もって勉強をしていました。

一方、賢くない人は、自己管理が難しく、計画を立てずに行動することが多いです。目先の楽しさや快楽を優先し、長期的な視野を持つことが苦手です。このため、同じ失敗を繰り返してしまうことが多く、成長の機会を逃しがちです。また、失敗の原因を他者に転嫁し、自分の行動を省みることが少ないため、改善が難しくなります。調べていてすべて自分と重なっているなと感じました。

性格は、個人の人生全体にも関わってくると思います。賢い人は、自分の強みと弱みを理解し、それに基づいて適切な選択を行います。柔軟性を持ち、変化に対応する力があり、困難に直面しても前向きに対処することができます。一昨年まで学舎にいた原田さんは、普段から強みを前面にだし、就活も成功させていました。

一方で、賢くない人は、自己認識が乏しく、無謀な選択をすることが多いです。自分の限界や欠点を認識することが難しく、無計画に行動することが多いため、結果として不幸な選択をすることが多くなります。私も自己認識が乏しいために、よく無茶な計画を立ててしまいがちです。

では、賢くない人が賢くなるためには、具体的にどのような取り組みが必要でしょうか。

最初に、自己認識の向上が重要です。自分自身の強みと弱みを客観的に理解することで、何が足りないのか、どこを改善すべきかが見えてきます。この自己認識は、一朝一夕で身につくものではありませんが、日々の生活の中で自分の行動や思考を振り返り、他者のフィードバックを受け入れることで徐々に高めることができます。私もまずは日々の生活の中で振り返る時間を入れていこうと思います。

次に、目標設定と計画性を身につけることが不可欠です。目の前の楽しさや快楽に流されがちな人は、まず短期的な目標を設定し、それを達成するための具体的なステップを考えることから始めてみましょう。たとえば、一ヶ月以内に達成できる小さな目標を立て、

それに向かって毎日少しずつ努力する習慣をつけると、自己管理能力が自然と身についてきます。私も快楽に流されがちな人なので、まずは一ヶ月以内の目標を立てて行動してみようと思います。

また、感情のコントロールも重要なポイントです。感情的になりやすい人は、まず自分の感情のトリガーを理解し、それをコントロールする方法を学ぶことが必要です。具体的には、深呼吸や瞑想といったリラクゼーションテクニックを取り入れ、感情が高ぶった時に冷静になる時間を持つことが有効です。私は昔からよく短気と言われているので、日々の反省をするときに瞑想も組み込んでみようと思います。

さらに、論理的思考の訓練も賢くなるための重要な要素です。論理的な思考を身につけるためには、日常的に問題解決のプロセスを意識することが必要です。問題に直面したときには、まずその問題を細分化し、それぞれの要素について原因と結果を分析する習慣をつけると良いでしょう。これにより、感情や直感に流されず、冷静に物事を判断する力が養われます。細分化は特に大切だなと感じたので、実践していこうと思います。

最後に、学び続ける姿勢を持つことが大切です。賢い人は、常に新しい知識を求め、自分を成長させることを怠りません。学ぶことは、単に本を読むことに限らず、他者との対話や経験からも得られます。特に、自分とは異なる考え方や価値観を持つ人との対話は、自分の視野を広げ、新しい視点を得るための貴重な機会となります。私は内気な性格で、あまり新しい人間関係を好まない性格だったので、これからは積極的に周りとコミュニケーションをとっていこうと思います。

以上のように、賢い人々が持つ特質は、一朝一夕で手に入るものではなく、日々の積み重ねと自己成長への強い意志から生まれます。賢くない自分を見つめ直し、改善するためのステップを踏むことは決して簡単なことではありません。ですが、自分の未熟さを認め、改善しようとする姿勢こそが、賢さへの第一歩だと思います。私もこれからは自分自身と向き合い、目の前の課題に真摯に取り組んでいくことで、少しずつでも賢さを身につけていこうと思います。私と同じように賢くないと感じる方がいれば、共にこの道を歩んでいきましょう。

夏の思い出

法政大学　法学部法律学科　四年
藤川　遥

舎誌を書くのもこれが最後だと思うと、時間が経つのが本当に早いと感じた。この間、大学に入学し、もう大学四年生である。就活も終わり、あとは残り数単位を取り、バイトと遊びで大学生活に終止符を打つ。今年の夏も帰省し、友達と中学高校の先生とご飯に行った。私は中高一貫校に通っており、一人の先生は七年ぶりでもう一人の先生は四年ぶりだった。久しぶりで会うまではとても緊張していたが、会ったら当時を思い出して、近況報告と思い出話で終始楽しくて笑っていた。七年ぶりに会った先生は英語の先生で、英語が苦手だった私もその授業は楽しくて大好きな先生だった。その先生が授業中によくパリの話をしていて、海外繋がりで少し話が逸れるが、この季節になると高校一年生に行った時のカナダを思い出す。高校一年生の夏に一ヶ月間の短期留学に行った。楽しい思い出は数えきれないほどあるが、私がカナダの好きなところは、街並みと匂い、人の良さである。学校がバンクーバーの都会にあったため、高層ビルも沢山建ち並び、カフェのテラス席やザ・海外のような街並みが大好きだった。私はノースバンクーバーからバンクーバーの学校に通っていたので、ノースバンクーバーとバンクーバー市中心部を結ぶ「シーバス（SeaBus）」という公共交通手段を使っていた。魅力として、シーバスからは、バンクーバーのダウンタウンの高層ビル群や、ノースショア山脈の雄大な景色を楽しむことができ、特に晴れた日や夕暮れ時は、写真に収めたくなる美しい風景が広がっていた。またシーバスは、バンクーバーのダウンタウンからノースバンクーバーへのアクセスが非常に便利で、観光客にとってもノースバンクーバーを訪れる際に簡単に利用できる交通手段として重宝されていた。毎日頻繁に運行されており、環境にも優しい交通手段なので、特に通勤ラッシュ時には、車の渋滞を避けて素早くノースバンクーバーに到着できるため、多くの通勤者にも利用されている。シーバスが到着するノースバンクーバーのロンズデール・キーは、ショッピングや食事が楽しめるエリアで、ロンズデール・キー・マーケットには、地元の新鮮な食材やハンドクラフト製品が並んでおり、観光や買い物の目的地としても人気だった。シーバスを利用することで、バンクーバーの都会的な側面と、ノースバンクーバーの自然豊かな環境の両方を短時間で楽しむことができ、観光で訪れる際にも、地元の生活を感じながら移動できる素晴らしい体験だった。そして、カナダでずっと聴いていた音楽が何曲かあるのだが、今でもその曲を聴くとカナダでの思い出が蘇ってくる。カナダから帰ってきてから、ずっとまた行きたいと言っていたが、もしかしたら卒業旅行で行けるかもしれない。本当に嬉しい。話を今年の夏に戻すと、とにかく久しぶりの先生たちに会えて楽しかった。高校では、特に体育の授業が楽しく、バレーやバドミントン、卓球などをした。特に高校三年生の時の体育は、受験の息抜きみたいな感じでとても自由にやらせてもらっていたので、みんなでふざ

けたりして爆笑していた記憶がある。バドミントンも自由に組んで良かったので、仲良し四人組と楽しく運動していた。今年も家族や帰省するたびに会う幼馴染の友達にも会えたし、何より自然が多いので、目も心も癒される。田舎の良いところだ。小中高は本を沢山読んでいたが、大学に入って読まなくなったので時間がある今、読んでいこうと思う。次に私が好きな本を紹介する。東野圭吾さんの「流星の絆」という本だ。映画化もされているので、知っている人も沢山いるだろう。簡単なあらすじは、神奈川県横須賀市にある洋食店「アリアケ」を営む有明家の三兄妹、功一、泰輔、静奈は、夜中に家を抜け出して流星群を観に出掛けている間に、両親が何者により刃物で惨殺される。三兄妹は身よりが無く養護施設で幼少期を過ごした後に相次いで詐欺などに襲われ、強く生きるためいつしか彼ら自身も、裕福な男性を詐欺で騙していく。事件から一四年経過し時効を迎えようとしていた時期に、洋食チェーン御曹司の戸神行成をターゲットにした三人は、彼の父親の政行が、両親が惨殺された時間に家から出てきた人物に似ていることに気付く。店の名物のハヤシライスの味から、三人は政行が両親を殺害しレシピを盗んだ犯人だと確信する。行成に接近して政行を陥れるための罠を張り、作戦は順調に進むが、静奈が行成に恋心を寄せてしまうという話だ。特に印象的なのは、物語が単なる復讐劇に留まらず、家族愛や人間関係の深層を探る側面も持っている点である。東野圭吾らしい、意外な展開と緻密な伏線が散りばめられており、最後まで読者を引き込む力がある。また、キャラクター一人ひとりの心理描写も非常に丁寧で、彼らの葛藤や感情に共感しやすいという点もある。兄妹の絆がテーマであるだけに、読後には家族の大切さについて考えさせられる。とても切なくて悲しい話だが、何回も見たくなる本でおすすめしたい。もう一つは漫画で、佐々木倫子さんの「動物のお医者さん」である。あらすじは、高校三年生の西根公輝と二階堂昭夫はH大の敷地内を歩いていた際、険しい顔をしたメスのシベリアン・ハスキーの子犬と出会う。高校生にしては落ち着いた雰囲気を醸し出していた公輝は、里親を探していたH大教授の漆原に子犬を押し付けられる。当初からH大を志望していた公輝だったが、子犬の飼育により発生する病院代などを節約するため、H大学獣医学部入学し、獣医師を目指すことになる。子犬は「チョビ」と命名されて西根家で「ミケ」と呼ばれるメスネコや「ひよちゃん」と呼ばれる雄鶏と共に飼育され、大人しく忍耐力のある物分かりの良い犬に育っていくというとても平和な漫画である。ここに出てくる、シベリアンハスキーの「ちょび」が本当にかわいい。悪い人が出てこないので、癒しと面白さの詰まった漫画である。作品全体に流れる軽やかなユーモアと、動物たちとの触れ合いがとても心地よい。動物たちが見せるリアルな行動や表情が、ストーリーに独特の雰囲気をもたらし、読者に笑いと癒しを提供している。特に、シベリアンハスキーのチョビの存在感は圧倒的で、ハムテルや周囲の人々との関係性が深く描かれており、彼が巻き起こすエピソードには何度も笑わされた。また、獣医学というテーマを扱いながらも、専門的な内容が難しくなりすぎず、誰でも楽しめるように工夫されている。

それでいて、動物に対する愛情や責任感など、深いテーマもしっかりと描かれているのが印象的である。この二冊が私のおすすめの本と漫画だ。他にも面白い本や漫画に出会うために本屋にでも行こうと思う。

就活で学んだこと

慶應義塾大学　経済学部経済学科　四年
松本　誠也

私は大学四年生であり、来年の三月には卒業して学舎を出ていくことになるので、今回で舎誌を書くのは最後である。学舎を出た後は、来年の四月から東京都庁で働く予定である。東京都庁に入るには筆記試験や面接が必要だったが、最後の舎誌では、その筆記試験で学んだことについてまとめてみようと思う。

都庁の筆記試験は、教養試験、専門記述試験、論文試験の三つから構成されている。教養試験は、これまで習ってきた数学や英語、理科や社会の知識を使えば解ける問題ばかりだが、専門記述試験では、憲法や民法、政治学や行政学など、これまで学んだことがなかった教科も学ぶ必要があった。中でも覚えることが多く苦労した記憶のある政治学で学んだことを大きく三つに分けて書いてみようと思う。

一つ目は、「議院内閣制」と「大統領制」の違いである。近代以降の政治制度にみられる「権力分立制」は、絶対王権が打ち倒された結果、成立したものである。この権力分立制のうち、立法府優位の制度として確立されたものが英国を代表例とする「議院内閣制」であり、三権分立を徹底させた制度として誕生したものが米国を代表例とする「大統領制」である。

まず議院内閣制は、英国の制限君主政の中から徐々に整備され、一八世紀末までにほぼ確立された制度である。行政府の「内閣」は立法府の「議会」に連帯して責任を負い、議会の信任を失った場合、内閣は総辞職するか議会を解散するかできる。つまり、立法府と行政府間の緊密な連携関係がある。また、内閣は議会に法案を提出できる。そして、首相の地位は任期に拘束されないため、民意を受けた議会が不信任制度を利用してその地位に就く人を交替させやすいという長所を持つ。しかしこれは、世論の動向に左右されやすく政権維持が困難であるということにもつながり、長期的な展望に基づいた政治を実施しにくいという短所にもなりうる。

次に大統領制は、モンテスキューの『法の精神』の影響の下、米国で高度に整備された制度を原点としている。厳格な三権分立を採用しているため、議会といえども大統領を不信任により辞めさせられず、そのために行政を担う大統領が立法府である議会に対して高度の独立性を持つ。一方で、大統領は議会を解散できず法案提出権も持たない。また、大統領は議会の意向に従う必要性が薄いため、

行政権の枠内では政策を迅速かつ強力に推し進められるが、その裏返しとして立法府と行政府間の連動性が無いため、時には議会と大統領の間で対立をもたらすこともあり、かえって政治は停滞し非効率になる可能性がある。また大統領は不信任を気にせずに強大な権限を一定期間保持できるため、独裁的な政治が行われる可能性があるという短所にもなりうる。

このように、議院内閣制と大統領制にはそれぞれ長所と短所があり、どちらかの制度が絶対的に優れているわけではない。そのため、現在のフランスでは両者を折衷させた「半大統領制」が採用されている。

二つ目は、「議会政治」と「二院制」についてである。「議会政治」とは、広義には立法権の主要部分を握る議会が存在する制度を指し、専制政治・独裁政治の対抗概念として用いられる。だが一般的には、議院内閣制のように議会が国権の最高機関として決定的な役割を果たす制度を指し、大統制は除外される。

議会政治の原理として、第一に「国民代表の原理」は、バークがブリストル演説で初めて明確に主張した原理であり、近代議会政治では、議員は独自の判断と意思に基づいて全国民の利益を実現すべきとされる。第二に「審議の原理」では、少数派議員にも発言の機会を与えて慎重な審議を行うとともに、議会審議の過程を有権者に公開することを原則とする。第三に「行政監督の原理」では、行政のすべてを議会に公開し、行政の責任者は不信任か弾劾等の批判に従うことを原則とする。

一方、「二院制」とは、議会を二つの議院で構成する制度を指す。第一に「貴族院型」は、中世の身分制議会の要素を上院に残しつつ、直接公選の下院の機能を強化することで近代議会へと変貌したものであり、例としてイギリスの貴族院や戦前の日本の貴族院が挙げられる。第二に「連邦制型」は、連邦の国民全体を代表する下院と、連邦を構成する州・邦を代表する上院を組み合わせた形態であり、例としてアメリカやドイツの議会が挙げられる。第三に「参議院型」は、貴族院を持たない単一主権国家で二次的なチェックのために上院を設けた形態であり、例として日本の参議院が挙げられる。

一般に、二院制は代表制に対する不信を前提にしている。議会の多数派が「国民代表の原理」と「審議の原理」を忠実に守っていれば一院で十分だが、それを忘れて私的利益を優先するようになれば、議会政治は有効に機能しない。そこで二院制を採ることで、二院相互の抑制作用で議会が少数支配の機関となることを防止するのである。

三つ目は、「圧力団体」についてである。「圧力団体」とは、自己の特殊利益を維持・拡大するために、立法府や行政府に対して働きかけて、公共政策に対して影響力を及ぼそうとする私的な団体のことである。具体的な例としては、経営者団体・労働組合・同業者組合・宗教団体などを挙げることができる。

次に圧力団体の機能は、大別して順機能と逆機能に分けられる。順機能には、第一に「利益表出機能」がある。これは社会に散在する潜在的要求を集約組織し、具体的な要求として政治過程におい

て表現することである。第二に「代表制の補完機能」がある。これは、地域選出の代表者によっては十分に反映されえない個別利益を圧力団体が吸収し、その圧力活動を通して当該利益を政治に反映させようとする機能のことである。他には、政府や議会、そして国民一般に情報を提供する機能なども認知されている。

一方で、逆機能としては、圧力団体の加入者が実際には社会的地位の高いものに偏っていることで、社会的弱者の利益よりもエリートの利益を拡大させるのに利しているという点や、既得権を守ろうとする団体の圧力活動が政治過程に悪影響を及ぼすことがあるという点などが指摘されている。

さて、我が国の圧力団体には、上に挙げた一般的な機能に加えて固有の特徴がある。その特徴として、第一に「政党系列化」が挙げられる。これは、資金提供や組織選挙などを通じた、特定の政党と特定の圧力団体との緊密な関係のことである。もっとも、55年体制の崩壊に伴い、この関係が一部流動的になっている点も指摘されている。第二に「既存集団丸抱え的傾向」を挙げることができる。これは、特定の目的をもって圧力団体を組織したというよりも、既存の枠組みをそのまま利用する形で組織されたという特徴のことである。具体例としては、企業別組合を主流とする労働組合や、村落ごとの一括加入を主流とする農業団体を挙げることができる。第三に圧力活動の中心が行政府中心であることが挙げられる。我が国では、政策形成の中心は行政部にあるため、圧力団体の活動対象も行政部中心である。

以上のようなことを二〇科目弱学習して合格できた東京都庁であるが、入都してからも昇格試験などで筆記試験を行う必要がある。今回学んだこと、そして確立した勉強方法などを忘れることなく、様々な場面で生かしていきたいと考えている。

大学卒業に向けて

東京科学大学　環境・社会理工学院建築学系　四年
北村　俊樹

連日暑い日が続いている。しかし、夕方や夜には雷を伴った雨が降る日もあり不安定な天気になることもある。これからは台風の季節でもあるため荒天にはくれぐれも注意したいところである。それに加えて、最近は地震も多い。宮崎で震度六弱の地震が起き、津波注意報も発令され、南海トラフ地震に関する注意が発表されたかと思えば、その翌日には神奈川で震度五弱の地震が発生した。その時、私は寮の部屋にいたため緊急地震速報の大きな音を聞き、上京してから最も大きな揺れを感じたように思えた。安全というのは当たり前ではないことを痛感しているところである。

さて、これを書いているのは俗にいうお盆休みの期間である。大学は四年次の前期が終了したところだ。平日は研究室で研究活動を

する傍ら、大学院の授業を先行して履修することができるため、大学院生と一緒に建築構造に関する授業を受けた。授業を受けてみての感想としては、基本は学部の授業がそのベースとなっているものの、外部の大学から入学した院生もいるため、より広範な分野を扱っているように思えた。将来、高専や大学の教職を志している私にとっては受講生ではありながらよりよい経験をすることができたように思う。研究室では、今年の元日に起きた能登半島地震の被害事例から専門である建築の基礎や地盤に関する知識について理解を深めた。具体的には、調査データの整理や被害事例にまつわる簡単な実験などである。これらを通して、地震被害の甚大さであったり、データから自分で考えて考察することの重要さであったりを実感することができた。これは間違いなく研究や自分の将来に大きな糧となる経験である。タイトルにも書いた通り、今回の舎誌では大学卒業に向けての二つの関門について述べることで、具体的にイメージを膨らませたいと考える。既に院試は終えているため、大学院生活に向けての試金石となる。

一つ目がいわゆる卒業研究である。私は建物の模型を部品から発注して製作し、遠心振動実験を実施することで応力や変形を考察するというものだ。遠心振動実験とは通常より大きい加速度を土槽に入った模型に与えることで実大の建物より小さい模型でも地盤を振動したときの状態を再現できるというものである。私が所属している研究室では、この実験を卒業研究で実施するというのが伝統となっている。

現在は、模型の具体的な寸法や構成を決定するため、解析ソフトを用いた再現をしているところである。模型の構成としては上部梁と柱からなる上部構造、基礎梁と杭からなる基礎構造に大きく分かれる。今回は平面で解析をしており、具体的に節点を決めてそこに材料特有の定数を代入していくことになる。ここで一つ難しいのは杭や基礎梁をどう設定するかということである。何の変哲もない部材であればいいのだが、細工を考えると途端に複雑になる．二次元の解析で破壊を再現できるかというのが大きな課題である。基礎梁の損傷についてはその部分の剛性のみ下げればよいが、杭の破壊はその部分を特定の荷重を超えると壊れるという設定にしなければならない。また、杭頭と基礎梁の固定度合いや杭先端の条件によっても結果は変わるため、より精度を上げていきたいと感じる。これが一段落すれば模型の決定と発注、模型製作と実験準備をして実験を行った後にデータ整理をして発表という流れになる。一二月の半ばまで全力で駆け抜けたいと思う。

二つ目が卒業制作、卒業設計である。テーマは自由なため自分で課題を設定して設計したいものを手掛けることになる。私は学部の設計課題では必要最低限で乗り切っていたところがある。しかし、学部最後の課題ということもあり力を入れていきたい。そこで私は三年次の文系教養の卒論で再開発について取り上げ、設計する上での考えを持つことができた。具体的には日本で急速に進んでいる再開発事業は同じような用途を高く積む、つまり高層化させることで利益を求めすぎているのではないかという点を主張した。テレビ番

組でもその問題点は指摘されており、卒論の中で扱った事例の中でもその傾向が強く出ていた。私は、この設計で再開発を手掛けていきたいと考える。具体的には駅前の再開発だ。三年次の設計課題では町田駅周辺の再開発に挑戦し、不完全燃焼だったこともあり取り組んでみたいと思う。候補としては現在、実際に再開発計画のある地区を対象にしたいと考えている。

もう一つ取り組みたいこととしてあるのは構造設計である。建築構造を専攻していることも理由ではあるが、設計課題に本格的な構造設計を取り込んだことがないということもあり挑戦してみたいと思うようになった。手掛けたいものとしては小規模のスタジアムや体育館などのスポーツ施設を大空間建築として成り立たせたいという思いがある。また、先日まで履修していた大学院の授業では実務で使われる計算を用いて張弦梁や免震、制振構造を学んだ。可能な限り取り入れることで自分の設計に説得力を持たせたいと考える。

今年は研究活動があるということもあり、なかなか建築物を見に行けてない。その代わりに建築雑誌を図書館で借りたり、買ったりすることで建築を見る目が衰えないように努めている。しかし、実物を見る以上にいいことはないという実感があるため、機会を見て観光リストにある建築を訪れたいと考える。卒業設計自体は卒業研究発表が終了してから約一か月半で仕上げる必要がある。時間との闘いであるが決して無理はしないようにやり遂げたいと思う。

四年になって早くも四か月半が経過したが、上京して大学生になってから一番忙しない生活を送っているように思う。これを書いているのは束の間の休み期間ではあるが、今年度のまとまった休みが五月の連休以来なかったこともあり久しぶりにゆっくりできている感覚がある。ここで気づいたのは適度な休みは必要だということだ。今までは次々に研究室や授業の課題をこなす日々だったこともあり、視野が狭くなってそればかりに集中していたようにも感じる。しかし、そのままであるといつか自分の身体を壊すことにもなりかねないため、無理はしないことを念頭に置いて周りの手も借りながら頑張っていきたいと思う。この舎誌を通して、今一度突っ走ってきた日々を振り返りつつ、立ち止まる時間を設けることで心にも余裕ができたと思う。しかし、これからはさらなる大変な日々が続くと予想される。この機会をよい切り替えとしてこれからの日々も突っ走りたいと考える。そして、編入してよかった、いい大学生活だったと言えるように残りの期間を過ごしていきたいと思う。最後に、大学院での生活にいい形で繋げられるようにしっかり準備を重ねていき、来年からも継続して頑張っていきたい。

地元での演奏

東京音楽大学　音楽学部音楽学科　三年
片山　深晴

今年も舎誌の提出期限が迫ってきました。今回はこの夏に地元で出演したコンサートのことを書いてみようと思います。

今年は八月一五日の夜の飛行機で岩国に帰省しました。一七日に柳井市のサンビームやないで開催された、「次世代アーティストによるサマーコンサート」を控えており、伴奏を引き受けてくれた関東出身のピアノ専攻の友達が一緒に山口に来てくれました。

帰省した次の日には朝10時からさっそく、サンビームやないでコンサートの練習、ゲネプロ、アンコール合わせでした。帰省前日の一四日にレッスンのため東京駅から高速バスで二時間かけて茨城へ行き、一五日に山口へ帰りと、大移動が重なって疲れていましたが、起床後六時間くらい経たないと声帯が起きない為、目覚ましをセットしてがんばって早い時間に起きました。

今回、本番のかなり直前まで東京でオペラの稽古や友達のコンサートの手伝いなどがあり、本番二日前のぎりぎりの帰省になってしまったので、地元でのアンコール合わせに出ることができず、この日初めて他の出演者の方とアンコールの曲を合わせました。楽器と声のバランスは大丈夫かなと、少し緊張して臨みましたが、普段ピアノ以外の楽器の方と演奏する機会は多くないので、新鮮で楽しく感じました。個人でのホール練習の時間を一時間いただいて午後からはゲネプロもあったので、ホールの響き方なども事前にしっかり確認できました。ゲネプロやホールでの練習の時間をこれほど取っていただけることはあまりないので、とてもありがたかったです。かなりよく響くホールだったので、跳ね返りを聴きすぎないように意識し、歌手とピアノとの距離も調節しました。

そして本番の一七日。朝10時か二〇分間ホールで合わせの時間があり、楽屋でメイクやヘアセットをして、持ってきたお弁当を食べ、直前にドレスに着替え、開演直前に一五分間だけ練習室で声を出してから舞台袖へ移動しました。ドレスは歌う曲の雰囲気や他の人の色とのバランスを考えて、今回はピンク色にしました。

私はトップバッターでした。

最初の曲はシューベルト作曲のドイツリート、“Seligkeit（至福）”。ホールの明るい空気造りにも最適で、私の性格や軽めな声にも合っているかなと思うので、選んで正解でした。

軽やかで明るい有節歌曲で、幸せに溢れたかわいらしいピアノの前奏で始まります。歌詞の内容は、一番で天国での至福を讃え、二番ではその幸せについて、より具体的に表現されています。楽譜の一番上にドイツ語で「Lustig（楽しげに）」と書かれているように、一番では三拍子の楽しいリズムに乗って歌い、二番ではドイツ語の子音をより前に出して、少し元気な感じを加えて表現してみました。三番も音程とリズムの表記は一、二番と同じですが、歌詞の雰囲気が少し変わります。ここまでは天国での至福を讃え、「ここで

永遠に楽しみたい」と言っていますが、三番は「でもそれより僕はこの地上にいたいんだ」という文で始まります。私は三番は少しレガートな感じを加え、二番までと少し変化が出るようにしました。

二曲目は、曲の対比を出すために穏やかな曲をと思い、作詞作曲共に武満徹の「小さな空」を選びました。この曲は連続ラジオドラマ『ガン・キング』の主題歌として昭和三七年に書かれた曲です。とても有名でどの世代の方でも楽しめるような曲なので、ご存知の方も多いかと思います。多くのお客さんの母語である日本語ということもあり、発音や表現の工夫でより難しさを感じました。オペラ以外ではこれまであまりやったことがなかったですが、手を使ってみることにしました。空を見上げた時に感じる、どこか懐かしい感じが出せていたら嬉しいです。

そして三曲目は、ベッリーニ作曲のオペラ《清教徒》より“Son vergin vezzosa（私は美しい乙女）”です。最後は思いっきり華やかな曲にしようと思い選びました。

《清教徒》の主人公エルヴィーラが、父親にやっと結婚を許してもらい、その喜びを歌う曲で、沢山の細かい音符で幸せが表現されています。歌はかなり高音まで必要で、伴奏もとても難しい曲です。この曲は譜読みにも時間がかかるし、最初は歌もピアノもお互い必死になりがちで、合わせるのが大変でした。でもできるようになるととても楽しい曲です。この曲を練習してみて、私は高音やトリル、細かいパッセージが得意なのだと気づくことができました。また一年前の技術ではこの曲は絶対に歌えなかったので、少し成長を感じることができました。

演奏後にインタビューがあり、実はこれが一番緊張していましたが、無事話し終えて楽屋に戻りました。

ホールでお客さんの前で歌うのはとても楽しく、調子に乗って失敗しかけたところもありましたが、地元の若い演奏家の方たちと交流して地元のホールで演奏することができ、また自分の歌を沢山のお客さんに聴いていただけて、素敵な良い経験になりました。

歌のことを長々と書いてしまいましたが、実は伴奏者さんの準備もとても大変です。ソロで弾く時とは違い、ブレスの位置ややりたいことなど沢山勝手を言ってくる共演者と合うように、とても時間をかけて練習してくれています。伴奏の部分だけ読むのではなく、イタリア語やドイツ語の歌詞や言葉のアクセント、音節のことまで理解しようとしてくれるので、とても歌いやすいです。

私も中学校高校で、合唱などの簡単な曲の伴奏をしたことがありますが、責任重大で失敗ができないので、ソロの演奏の倍以上緊張したのを覚えています。今回の三曲はどの曲も、技術面でも表現の面でも難しく、また伴奏がないと歌うことができないので、数ヶ月前から楽譜を読み込んで、合わせの録音や動画で確認しながら何日もかけて練習し、一緒にレッスンに通ってくれて、本番で素敵に伴奏してくれた友達に大感謝です。

それからもう一つ、大学で師事している声楽の先生のことを書か

せてください。

私が歌っても曲の雰囲気がなかなか伝わらない時、先生がお手本で歌ってくださると、すごいのです。本当に全て完璧な正解の声という感じで、たったワンフレーズでも、言葉でどう表現したら良いか分からなくなるくらい感動します。先生は大学受験の時に出会ってからずっと、私の憧れです。先生を見ていつも思わされるのは、人としての素晴らしさがそのまま声に出るのだな、ということです。声楽（音楽）をするには練習や語学、文学などの勉強もすごく必要ですが、実はそれ以上に心が大事だと思うので、人間として成長し続けられるよう私も常に意識しようと心掛けています。音楽は私をより良くしてくれるという意味でも、音楽の道を選んで正解だったなと思っています。

最後に、コンサートのゲネプロや本番の送り迎えをしてくれた両親や演奏を聴きに来てくれた友達や親戚、先生、地域の方への感謝を忘れず、これからも精進していきたいです。

音大生になってから毎年少しずつお客さんの前で演奏させていただく機会が増えてきました。東京に戻ってからも大学の行事やコンクール、施設でのミニコンサート、年末の第九、試演会や試験など、秋学期にも本番がたくさんあるので、ひとつひとつ丁寧に、責任を持って準備を進めたいです。勉強で忙しすぎて文句を言いたくなる時もありますが、やりたいことを学びそれを全力で楽しむことができているので、この環境に感謝しながら、これからも学生生活を楽しもうと思います。

ひとつ本番が終わりましたが、夏休みが終わるまでに練習しないといけない曲がまだ沢山残っているので、次に向けて頑張ります。

ディズニープリンセスから学ぶ理想の女性像の変化

駒澤大学　文学部国文学科　三年
河井　風香

はじめに

近年、ディズニープリンセスの実写化映画が増えてきている。アニメーション版と実写版を見比べたときに、明らかに実写版のほうがプリンセスの意志が細かく描写されている。この変化は、時代の変化に伴い、現代の社会課題の問題提起をするためなのであろうかと考えた。それを調べてみたいと思い、この題目にした。特にその変化が分かる『シンデレラ』と『美女と野獣』、『アラジン』、『塔の上のラプンツェル』、『アナと雪の女王』の女性像が分かりやすいと思ったので、その五作品について調べていく。

第一章『シンデレラ』

この章では、『シンデレラ』のアニメーション版と実写版を比べ

て女性像がどのように変わっているかを読み解いていく。アニメーション版は一九五〇年、実写版は二〇一五年に公開されており、アニメーション版と実写版では描かれ方が異なっている部分が多々見受けられる。今回は特にこの題目に関係のあるもののみ紹介していく。

一点目は、シンデレラが王子様と出会うタイミングが異なっている。アニメーション版では舞踏会で初めて会い、そこからお互いに一目惚れをして恋へと発展する。実写版では舞踏会で出会う前に森で出会っている。そして話していく内にお互いの性格に惹かれていく。この場面のみでも大きく変化していることが分かる。アニメーション版では外見から、実写版では性格から恋愛に発展している。女性像とは少し話が逸れてしまうが、時代の変化により現代の外見より性格を重視する傾向があるという恋愛観を取り入れていることが分かる。

二点目は、継母の描写についてである。アニメーション版では継母がなぜシンデレラをいじめているか、また継母の心情はほとんど描かれていない。しかし、実写版ではなぜシンデレラをいじめているかについて「若くて清らかで素直だから」と自分が持っていないものを持っているシンデレラに対して嫉妬していること、そして再婚した夫がシンデレラの実母とシンデレラをこよなく愛していることに対して嫉妬している様子が描写されている。そして、アニメーション版では登場していなかったシンデレラの実母が実写版では登場している。シンデレラに「勇気と優しさを持つことが大切である」ということを伝える場面は印象的である。シンデレラはその言葉を胸に困難に耐えていく。この言葉が実写版映画の主題であった。この描写からもただの意地悪な継母という位置ではなく若さなど自分が持っていないものを持っているシンデレラに対する劣等感などを描き、どこにもぶつけることのできない感情を「いじめ」という形で昇華していたのではないだろうか。現代のいじめをしている人の大半も劣等感からいじめをしていることが多い。客観的に見ることで現代人へメッセージを送ろうとしたのであろうか。勇気を持つことの大切さをシンデレラの実母を登場させることで強調し、従来の受動的なシンデレラ像から抜けだそうとしたのではないだろうか。しかし、『シンデレラ』という物語自体に現代とそぐわないところも多く見受けられる。松田奈穂子氏は「ディズニー版『シンデレラ』は、結婚こそ努力する女性に対するご褒美であるという考え方、結婚こそ女の幸せ、人生の成功という男性にとって都合のいい価値観に貫かれており、前述のシンデレラの意志の強さ、上昇志向はこういった男性中心的枠組みの中で発揮される限り、問題が多いといわざるを得ない。しかし、白雪姫やオーロラ姫には見ることの出来なかった強い意志と上昇志向がシンデレラの特質であること、そしてそれがディズニー映画の女性像における大きな一歩であることもまた確認しておきたい。」と述べている。そして、若桑氏も「結婚してから家庭を持つことしか社会に居場所がないと彼女は思っているのである。」とシンデレラを批評している。『シンデレラ』は現代の理想の女性像とは異なるかもしれないが、『白雪姫』

や『オーロラ姫』の女性像から強い意志を持っている女性像へと変化している。

第二章『美女と野獣』

次に、『美女と野獣』についてアニメーション版と実写版の違いを見比べていく。アニメーション版は一九九一年、実写版は二〇一七年に公開されている。前述と同様に異なっている部分を記述していく。『DisneyDAILY』の記事を一部抜粋する。

冒頭、本を返しに町に出たベルが市場を通り抜けるシーン。夫婦でやっている食料品店に買い物に来たグラマラスな女性客に妻が焼きもちを焼くアニメーション版に対し、実写版では店に訪れる客を男性にして夫に焼きもちを焼かせています。

アニメーション版で新しい本を借りてきたベルが好きな章を羊に教える水場のシーンも、実写版では人力ならぬロバ力で動く洗濯機を発明したベルが、少女に文字を教えるエピソードへと変更されています。発明家の父モーリスゆずりで、ベルもアイデアマンなのですね。

でもベルは村人に、「また女の子に読み方を？」と怒られてしまいます。自信を失ったベルは時々、「パパ私って変？」と父親に尋ねます。モーリスは、「ここは小さい村だ 人々の心も狭い」と答えますが、原作はまだ女性の社会的地位の低かった一八世紀に書かれた小説。ですので、ベルのような悩みを抱えた女性もたくさんいたのかもしれません。いずれにしても皆が仕方ないと、あきらめるような不条理にも風穴を開けようとするベルは、とても魅力的です。

このように現代の社会問題であるジェンダーの描き方についてもユーモラスに描いている。そして、実写版のベルは父の発明の専門的な手伝いもこなせるほど知識を持っている聡明な女性として描かれている。この冒頭の日常を描く場面でもベルが強く聡明で美しい女性であることが細やかに描かれている。同時に社会問題に立ち向かう女性を描くことに成功している。

そして、実写版では野獣やガストンの背景が丁寧に描かれていて、よりキャラクターに深みが増している。女性像だけでなく男性像も描かれ方が変化していっていることが分かる。

第三章『アラジン』

次に、『アラジン』についてアニメーション版と実写版の違いを見比べていく。アニメーション版は一九九二年、実写版は二〇一九年に公開されている。前述と同様に異なっている部分を記述していく。

一点目はジャスミンの性格である。アニメーション版は好きな男性と結婚するということを強く願っていたが、実写版は好きな男性と結婚することも重視しているが、それよりも国民を大切に思っており、国王になるために勉強をして、父である国王にも意見をはっきりと伝える強い女性として描かれている。それは実写版で新しく

追加された「スピーチレス～心の声」の歌詞にも表れている。

二点目はアラジンが変装したアリ王子についてである。アニメーション版ではアリ王子を疑問視しているのはジャファーだけであるが、実写版ではジャファーに加えジャスミンも疑問視している。ここからもジャスミンが聡明な女性として描かれていることが分かる。

第四章『塔のラプンツェル』、『アナと雪の女王』

最後に、『塔の上のラプンツェル』、『アナと雪の女王』について見ていこうと思う。『塔の上のラプンツェル』は二〇一一年に公開され、『アナと雪の女王』は二〇一四年に公開されている。そして、この二つの作品の違いについても言及していこうと思う。『塔の上のラプンツェル』と『アナと雪の女王』を見ても明らかに昔と女性の描き方が異なっていることが分かる。この二つの作品では自由を求める女性が描かれていることが印象的である。それに付随して、女性が強い意志を持ち積極的に行動している様子が描かれている。しかし、この二つの作品の中では異なる部分がある。『塔の上のラプンツェル』では、理想を押しつけられ苦しんでいるラプンツェルをユージーンが外に連れ出し助けるという物語となっている。女性が男性に助けてもらうという今までのプリンセスと同じような物語の構成になっている。しかし、『アナと雪の女王』では最終的に助けるのはアナであり、姉妹愛の力であった。女性が女性を救う物語の構成は稀である。これも時代の変化によるものであると言えるだろう。

おわりに

三作品について一貫して言えることは、実写版では現実的な場面を多く描写し、現代の社会問題に触れていることが多い。そして、『シンデレラ』と『美女と野獣』、そして『アラジン』のアニメーション版を比べてもディズニーにおける女性像が大きく変化していることが分かる。シンデレラとベル、ジャスミンを比べても、シンデレラは受け身型であり、意見をはっきりと言う場面はほとんど見受けられず、王子様の外見を見て恋愛に発展している。しかし、ベルとジャスミンは意見をはっきりと伝え、外見ではなく内面の美しさに着目しているところも異なっていると言える。そして、ラプンツェルやエルサは自由を求め、強い意志を持って積極的に行動している。また、一章と二章、三章、四章の調査からディズニープリンセスも時代によって女性像が変化していっていることが分かった。現代の社会問題において女性の社会的地位が低いことや出産によって出世コースから外されてしまうことがあるなど女性に関する社会問題が多い。そして、家制度の考え方から夫婦別姓に反対している現状や女性管理職の人数が増えないなど、今からずっと変わらないのではないかと思ってしまうほど問題解決への進行が遅い。しかし、変わらないものなどなく、ディズニープリンセスもそのことを教えてくれる。昔の女性の地位のことを考えると、昔より今の方が確実に女性の地位が確立してきている。これからの未来を背負っていく

一員としてものごとは変わらないと諦めるのではなく、自分から積極的にもっと社会問題を解決していきたい。

参考文献リスト

若桑みどり『お姫様とジェンダー　アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』(筑摩書房、二〇〇三年)

松田奈穂子「シンデレラ像の変化に見るディズニー映画の課題と展望　長編アニメーション映画『シンデレラ』と実写版『シンデレラ』の比較分析を通して」(株本ゼミ　二〇二一年度卒業研究要旨、二〇二一年)

島田英子「ディズニーのフェミニズム　プリンセスの女性学と男性学」(『立命館映像学』巻一五、九三―一〇七頁、二〇二二年)。

著者無記名「実写版『美女と野獣』アニメーション版との違いは?」(『DisneyDAILY』https://sp-magazine.disney.co.jp/p/40846、二〇二〇年)

参考映画作品

●ウィルフレッド・ジャクソン、ハミルトン・ラスク、クライド・ジェロニミ『シンデレラ』(Cinderella)、一九五〇年

●ゲイリー・トゥルースデイル、カーク・ワイズ『美女と野獣』(Beauty and the Beast)、一九九一年

●ロン・クレメンツ、ジョン・マスカー『アラジン』(Aladdin)、一九九二年

●ケネス・ブラナー『シンデレラ』(Cinderella)、二〇一五年

●ビル・コンドン『美女と野獣』(Beauty and the Beast)、二〇一七年

●ガイ・リッチー『アラジン』(Aladdin)、二〇一九年

●バイロン・ハワード、ネイサン・グレノ『塔の上のラプンツェル』(Tangled)、二〇一〇年

●クリス・バック、ジェニファー・リー『アナと雪の女王』(Frozen)、二〇一三年

八月と戦争

上智大学　総合グローバル学部　三年
川本　蓮

お題自由のエッセイ(即ち舎誌)は難しい。理由は二つ。一つは授業課題のレポートは、お題も決まって、したがってどういう文献を調べてどういう構成で書けばいいのかわかるが、エッセイではそれらの「制約」がないのでかえってテーマが見つからないということ。二つは、お題自由のエッセイは、書き手が普段何を考えていてどういう性格なのかが透けて見えてしまうようで、恥ずかしく感じることだ。事実、今回私は一〇〇〇字ほど書いてはなんだかふさわ

しくない気がして消し、テーマを変えて書いては消し、を二回ほど繰り返してしまった。

とはいえ、何か書かなければならないのでここは開き直って、最近読んだ本について書こうと思う。八月なので、主に戦争についてだ。何か結論を書こうとした文章ではないのでかなり読みにくいであろうが了承されたい。

アジア太平洋戦争と今の日本は当然ながら切っても切り離せない。もしあの戦争がなければ今のような憲法は存在せずしたがって政治や社会の仕組みも大きく異なっていたであろうし、あの戦争は国内外の大勢の人々に今も続く傷を負わせた。

しかしながら、私はこの八月、戦争の存在を忘れかけていた。我々が太平洋戦争を顧みるのは、八月六、九、一五日であるが、これら「記念日」の存在を忘れかけていたのだ。おそらく日常的に戦争を考えないからだ。実家にいた時分はテレビなどで八月になると増える戦争特番を見ていたものだが、今私はテレビを持っていないので、意識的に調べたりしない限りそういった情報に接することができないからだ。

いずれにせよ、忘れかけたことは私にとってやや衝撃的なことであった。そこで何冊か本を読むことにした。

まず読んだのは井伏鱒二の『黒い雨』だ（井伏鱒二『黒い雨』新潮社、昭和45年）。主人公、閑間重松（しずましげまつ）とシゲ子の夫妻は戦時中広島市内で被爆し、その後遺症で重労働をこなすことができない。養生のために散歩や魚釣りをすれば、村人から怠け者扱いされる。重松は、村在住の被爆者仲間を説得し、鯉の養殖を始めようとする。一方で重松は、同居する姪・矢須子のことで頭を痛めていた。婚期を迎えた彼女だが、縁談が持ち上がるたびに被爆者であるという噂が立ち、縁遠いままなのである。昭和二〇年八月六日朝、重松は広島市内横川駅、シゲ子は市内千田町の自宅でそれぞれ被爆したものの、矢須子は社用で爆心地より遠く離れた場所におり、直接被爆はしていない。しかし、縁談が持ち上がるたびに「市内で勤労奉仕中、被爆した被爆者」とのデマが流れ、破談が繰り返されていた。そんな折、矢須子にまたとない良い縁談が持ち上がる。この話をぜひともまとめたい重松は、彼女に厳重な健康診断を受けさせた上、昭和二〇年八月当時の自身の日記を取り出して清書しようとする。矢須子が原爆炸裂時、広島市内とは別の場所にいた＝被爆者ではないことを証明するためだった。重松は「原爆日記」を書き始める。

しかし実際には、矢須子は重松夫婦の安否を確かめるため船で広島市に向かう途中、瀬戸内海上で黒い雨を浴びていた。しかも再会した重松らと燃え上がる広島市内を逃げ回ったため、結果として残留放射線も浴びていた。この事実を重松が書くべきか悩んでいる折、矢須子は原爆症を発病。医師の必死の治療もむなしく病状は悪化し、縁談も結局破談になってしまう。

原爆の描写は、しばしばグロテスクに書かれることが多い。ゆえに私はあまり読もうとしないのだが、この小説はかなり描写が淡々としている。自身も大やけどを負い、惨状を目の当たりにしている

のだが、主人公はあくまで冷静である。被爆直後、広島市内で知人と会っては爆弾の正体について話したり世間話をしたりしているので、被害は軽く見える。ただし、犠牲者が多すぎるので普通の会社員である重松がお坊さんの代わりにお経をあげるなど、淡々とした描写から垣間見える景色は尋常でない。

そして物語が終盤に差し掛かるころ、矢須子が倒れる。淡々としていた物語が急転する。第三者的に見ていた原爆被害が急に身近なものに感じ、戦慄した。原爆によって一つの家族の幸せが奪われたのだ。

原爆症でささやかな幸せが奪われる話で、こうの史代『夕凪の街桜の国』（コアミックス、二〇〇四）を思い出した。主人公平野は建設会社の事務所で働いているが、原爆スラムのあばら家で母と暮らし、学費の返済と貯金のため靴が減らないような倹約生活をしていた。主人公はまた、原爆の話題に触れずに暮らす街の人々に不自然を感じ、原爆を落とした側から死んでしまえと望まれながらも生き延びている自身や、死んでも仕方がない人間と思われている、またそう思われても仕方がない人間に自分がなってしまったのだと考え複雑な思いを抱いていた。ある日、主人公は、新大橋のたもとで同僚から求愛されるが、同じ橋の下を無数の死体が浮かんでいた原爆投下直後の光景が蘇る。皆実はあの日、助けを求める負傷者を見捨て、死体を平気で跨いだり下駄を泥棒して歩いたり、やりきれない思いから、途中で合流した姉と共に川に浮いた死体に向け瓦礫を投げつけていたのだった。彼女はそんな自分が幸せになるわけにはいかないという衝動から、その場を走り去る。逡巡の末に自分の被爆体験を打越に打ち明ける。打越は「それも承知で求愛した」と返事し、皆実は安堵するが、その日を境に皆実は体調を崩し、原爆症を発症する。足腰が立たなくなり、何も食べられなくなり、血反吐を吐き、髪が抜け、激痛に苛まれる。やがて視界が次第に霞んでいった末に全く見えなくなり、音でしか外界の様子がわからなくなる。皆実は遠のく意識の中で、あの日、自分たちの死を望んで広島に原子爆弾を落とした者は、今日また一人殺せたと喜んでいるだろうか、自分は生き延びた側だと思っていたのにと嘆き、夕凪が終わって風が出てきたと感じながら、最期を遂げる。

「原爆を落とした人は私を見て「やった！またひとり殺せた」とちゃんと思うてくれとる？」のセリフは真実でもある。落とした人の意図はおそらく違うものである。しかし被害者一人ひとりにとってはまぎれもなく人生を奪っていった相手であり、こう思わずにはいられない。

私は学部で国際関係論などを学ぶので、核の話をするとき、政治的な枠組み、マクロな視野で話してしまいがちだ。自国の安全保障の強化を求めるリアリズム的な視点と、反対的な共通の倫理を前提にしようとするリベラリズム的な視点とで語られるが、被害者個々人の人生というミクロ視点は、どちらにも抜けている政治的な主張がどうあれ、核兵器をつかうことは一瞬でたくさんの個々人の人生を奪うことは共通の事実のはずである。核兵器に限った話ではないが、気を付けなければならない。

一九四五年八月六日の朝
一瞬にして死んだ二五万人の人すべて
いま在る
あなたの如く、私の如く
やすらかに　美しく　油断していた。」

（石垣りん『挨拶　原爆の写真に寄せて』）

三島由紀夫の金閣寺を読んで

青山学院大学　経営学部経営学科　三年
末政　快晴

この夏に、Amazon primeに入会し、サジェストを受けたことが契機で、「東大全共闘」という作品を見た。そこに描かれていたのは日本の将来を本気で考える東京大学の左翼的な思想の生徒達と日本を代表する作家である三島由紀夫であった。彼らの東京大学における討論を聞いていく中で私は、三島由紀夫という人物に対して興味を持ち、代表作を一読してみたいという衝動に駆られて駅前の本屋に足を運んだ。「金閣寺」この本に惹かれて一気に読了した。今年度の舎誌はその感想を記述する。

本題に触れる前に「金閣寺」のあらすじを簡潔に記述する。金閣寺は美しい金閣寺という建造物に心を奪われた主人公中心の物語である。幼少期から父親から金閣の美しさを聞かされていた主人公は金閣に対し憧憬を抱き、圧倒的な存在として崇拝するようになった。しかし主人公本人は吃音症であり、性格も内気であったため、周囲の人間から嘲笑されるような存在であったのだ。主人公はその後金閣の僧侶（見習い）となって金閣との一体感に充足を感じる日々を過ごすが、敗戦によってその感情は消えて、美の世界から追放されてしまったかのような感情に至る。金閣寺の周辺が終戦によって米兵が登場するなど理想とかけ離れていく中で主人公は理想の美と現実とのギャップに苦しめられるようになってしまい、金閣に対し愛しさと憎さという相反する感情を強めていき、最終的には放火という形で幕は閉じる。以上が簡単な概要である。

まずこの作品は三つの観点から主に展開されていると考えたので記述する。一つ目は、主人公自らと金閣の美の対照性だ。主人公は非常に内気な性格である。幼少期から吃音症に悩まされ、周囲に揶揄される日々を送っていた。令和の時代に比喩すると「陰キャラ」のようなであり、幼少期のこれらの経験は外界と彼の間に障碍を産んだ。そんな彼にも憧憬を抱く存在があった。金閣寺だ。幼少期に彼は父から金閣の「美」について言い聞かされてきた。「幼時から、父はよく、金閣のことを語った。」という書き出しは主人公の金閣

への憧憬の誘因を美しく書き出している。主人公は金閣を「美」の理想郷と見出すようになり、圧倒的な美の象徴を金閣に見出すようになった。その一方、主人公は自らを「美」と対極をなす存在であると自認しており、「美」に対して憧憬を抱く一方で激しい嫉妬も持ち合わせていたと感じる。そして、主人公は美に対する圧倒的な憧憬とは裏腹に現実においてその美を得られない苦しみに苛まれていく。私は、現代にも類似するシーンを着想した。現代のルッキズムだ。外見至上主義的思想とも揶揄されるこれは人を容姿を中心に判断する考えで、最終的には外見に基づく蔑視を意味する場合が多い。現代の人間は外界に圧倒的な美が遍いている場合、その憧憬とは相対するような自らのルックスに苦しみ、最終的には医療で自らの容姿を矯正する人も少なくない。私は、過去と比較すると、こういった傾向に拍車がかかっていると感じる。ルッキズムは「金閣寺」で主人公が直面した心理的状況に起因しているものだと結論付けた。作中の主人公は美を官能と対立させつつ苦悩し、美と自己の関係、過去と現代という問題を最後まで解決できなかった。金閣の美に対する憧憬は現代社会に取り巻く事象の暗示ではなかったのだろうか。

二つ目は、作者の綴りである。「金閣寺」は主に主人公の一人称視点から語られていて、主人公の率直な心境が吐露されながら物語が進んでいくいわゆる告白体とも言えるような小説だ。この文体が読者の心の中に潜り込み、主人公と同様の境遇の人には特に追体験のような効果をもたらしているのではないかと考えた。個人的に印象深かったシーンを取り上げる。主人公は話の序盤で父親の死に直面するのであるが、絵に描いたかのように主人公が悲しみを直接的に感じる場面は描かれなかったのである。このシーンにおいては本人からの告白がのちに綴られており、「私の感情にも吃音があったのだ。私の感情はいつも間に合わない。その結果、父の死という事件と、悲しみという感情とが、別々の、孤立した、お互いに結びつかず犯しあわぬもののように思われる。」とある。通常の人間は悲劇的な事象に直面したならばそれが同時に誘因となって悲しみという感情が現出する。しかし心に感情が灯って言葉を自らの口から発そうとするのにも関わらず発せれない吃音症のように主人公の情緒は感情と事象に結びつきがないのだ。このような主人公の率直かつ素直な心境が告白体で描かれているという部分が、この作品を名作たらしめている所以であろうと感じた。

三つ目は若者の苦悩を表象的に描いているという点である。作中は戦時中の設定であって、主人公は戦争で国家のため、天皇陛下のために命を捧げるという当時の美徳観念に完全に駆られており、空襲によって金閣と結末を共にし、散っていくという幻想を抱き、夢想し、また特別な美的体験をし、興奮していたのだ。しかし、日本の太平洋戦争の敗北によってその理想は儚くも打ち砕かれてしまったのである。歴史的な建造物で圧倒的な美を誇る金閣への憧れ、そして敗戦後のギャップ。そのどちらの場所にも自らの居場所を見出

すことのできない自分に対して絶望し苦悩する当時の若者の苦悩が緻密に描写されていると感じた。戦後には実際に家族を失った事に対する喪失感や虚無感を抱いてしまい、生活に身の入らない若者が溢れていたという（戦後漫画のようにそれでも必死に生きようとする若者もいた一方で）し、また内面的で自己表現の難しい主人公の姿は金閣の美という憧憬の対象の褪せによって閉塞感に苛まれていった若者の姿を準えているのではないかと感じた。また戦後に限らず、現在の若者にもまた閉塞感が漂っているのではないかと実際に同世代の友人を抱えながら感じる。私の友人は先日「就職したらもう人生でのビックイベントが結婚と出産しかない」や「懲役四三年」などと社会人生活の船出に伴う苦しみを揶揄していた。戦後とは違った苦悩ではあるが、学生時代の終了は現代の若者にとっては苦しみで「働きたくない」と感じている人間が殆どなのだ（主観からの考察でソースはなし）。

まとめになるが、私自身が最終的に感じたことは、三島由紀夫という偉大な作家は、一九七〇年に割腹自殺によってその生涯をおえるが、令和のこの現代の時代にも通じるバイブスのようなものがあったのではないかという事、またまるで令和の時代を見透かしているかのような未来暗示とも言える包含が作品を通して散りばめられていたこと。小説であるが故に後世の人間に対し伝えたかったことは明示されていないものの、そのメッセージは、若者の苦悩に寄り添うような暖色を帯びたかのような思いは確実に現代の読者にも届いていることだ。これらのことを強く感じた。最後に個人的な思いになるが私自身もあと一年半で学生期間に終わりを告げるが、社会人として希望に溢れた精神状態で船出をきれるだろうか。自信はない。また学舎の舎生たちはどうだろうか。希望に溢れて進んでいる若者はごく少数であろう。

私が大学でどのようなことを学んでいるのか

東京歯科大学　歯学部歯学科　三年
宮下　真輝

今年度の舎誌では、私が大学で学んでいることを紹介させていただきたいと思います。

私は、東京歯科大学歯学部に在籍しており、六年間の学業期間のうち、現在は三学年です。大学の一日は五時限で構成されており、全員が全科目を必修で履修しています。授業は朝九時から夕方一七時半まで行われ、放課後は部活もあり、まるで高校時代のような生活です。高校時代と違うのは、出席日数や、定期テスト・総合試験の評価や進級判定が非常に厳しいということです。

歯学部のカリキュラムですが、低学年のうちは一般的な教養科目や、医学に関する基礎的な分野を学びます。そして学年が進むにつ

れて口腔、顎、舌、歯などの専門的分野の学びへとつながり、歯列矯正、虫歯や歯周病の治療や予防歯科学、舌がんなどの口腔外科学など学習を深めていきます。

はじめに紹介させていただく科目は基礎医学である「解剖学」です。一学年では座学で人体の構造について学び、二学年の前期では全身の骨を学ぶ骨学や、中枢神経や血管、筋肉、特に頭頸部の骨、神経、血管、咀嚼筋群（ものをかむときに使う筋肉）については深く学びました。後期では脳神経の走行と、外頸動脈（顔面皮膚や咽頭等の粘膜、唾液腺、顔面筋などを栄養する動脈）の走行や唾液腺、頭蓋骨の成長、隙（筋膜と筋膜の間）の位置を学びました。さらに消化管とその付属器官（肝臓、膵臓、胆嚢など）、呼吸器、腎臓などの泌尿器なども一通り学習し、人体解剖学実習では、実際にご遺体の全身を解剖させていただき、全身の骨、筋、神経、臓器などについて、座学で習ったことの学びを深めていきました。

なぜ、歯科医師が全身のことを学ぶ必要があるのかと疑問に思う方もいるかもしれません。しかし、歯科医師であっても、全身に関する知識がなければ、適切な診断や治療ができません。

たとえば、口腔がんの治療は歯科医師である口腔外科医が担当しますが、下顎の歯茎の粘膜に進行性のがんを発症した場合、下顎を部分切除し、その後、足の腓骨という骨や、腸骨（骨盤を構成する骨の一部）を下顎の形に整形して欠損部位に移植することがあります。舌がんで舌の大部分を摘出した際には、大腿（太もも）の筋肉や皮膚、血管を舌に移植することもあります。さらに小児歯科では、こどもの成長度合を観察するために手根骨（手のひらと手首の間にある骨で舟状骨、月状骨、三角骨、豆状骨、有鈎骨、有頭骨、小菱形骨、大菱形骨の八つで構成される）の骨化をレントゲン写真で確認し成長段階に合わせた治療を選択する必要性が出てくることもあるからです。

もちろん、歯科医師としては、首から上の頭頸部に関しては、特に深く学びます。例えば外頸動脈の枝の一つである舌動脈の一部の舌下動脈はインプラント埋入手術の際に特に注意が必要な動脈です。この動脈を傷つけて出血が起こると、プーリングした血液で気道が閉塞され、窒息死につながることがあります。実際に過去にこのような医療事故が発生し、現在でも裁判で争われている事例もあり、医療事故を未然に防ぐためにも解剖学をしっかり学ぶことが必要となるのです。

次に紹介する科目は「生理学」です。生理学とは前述の「解剖学」や後述する「組織学」のような形態学とは異なり、体内で起こっている現象が生体にどのように影響を与えるかを理解する科目です。例えば、患者さんが痛みを訴えた場合、その痛みが生体内でどのような反応が生じて起こっているのか、どう治療するのかを学びます。歯の痛みで受診した患者さんの診察時には、痛みの種類から、どの程度う蝕（虫歯）が進んでいるのか判断することができます。例えば患者さんが、冷たいものや甘いもの、酸っぱいものを食べた時や、検査で風をかけた際にしみるような一時的な痛みを訴えた場合、Aδニューロンという神経が痛みの刺激を受容したことになり

ます。このニューロンは象牙細管（歯の主体をなす組織の象牙質にあいている無数の穴で歯髄と交通していて、その中に象牙質を作る細胞の一部が入っている）の中に存在しており、有髄神経で伝導（刺激の情報が神経繊維を移動すること）速度が早く、一過性の鋭い痛みを受容します。したがって、このような痛みは象牙質に限局したう蝕や、象牙質知覚過敏症（知覚過敏）などの非う蝕性硬組織疾患（慢性的の物理的、化学的要因によって生じるエナメル質などの堅い組織が損傷されることの総称）により象牙質が露出していることが原因と考えられます。う蝕の場合は、患部を削りコンポジットレジンなどのプラスチック材料を詰めるなどの治療を行いますが、象牙質知覚過敏の場合は、痛みを知覚する神経を鈍らせる薬剤の入った歯磨き粉などを使用します。これらの治療は、生理学で神経の分布や痛みの作用機序を理解していないと正しく行うことができません。

また、歯の痛みは虚血性心疾患（動脈硬化や血栓症により心臓に酸素や栄養が行き渡らなくなる病気）の症状としても現れ、これを「心臓性歯痛」と呼びますが、そういう歯痛の症状からも、狭心症や心筋梗塞といった重大な病気を見逃さないように注意が必要です。このため、歯科医師であっても、循環器の知識や、心電図を読み解く力（虚血性心疾患ではＳＴ上昇という特徴的な心電図が現れる）が必要となります。

さらに、白血病では歯周病様の症状が現われますが、これを単なる歯周病と扱ってしまっては大変なこととなります。重要な疾患を見落さないためには、採血検査で全血球の成分割合や白血球分画、ヘマトクリット値（血液における血球と液体成分（血漿）の比）などをしっかり見ておかないといけません。

このように、口の中や歯は全身の健康状態や疾患と密接に関係しており、歯科医師にとって生理学の学習は非常に重要です。

最後に紹介させていただく科目は「組織学」です。組織学は、生体内の細胞などを顕微鏡で観察し、それらがどのように存在し、生体内でどのような働きをしているのかを知るための学問です。組織学でも消化器や内分泌器（ホルモン調節をする器官）、免疫系、筋組織などを勉強します。この科目は口腔領域において非常に重要です。

例えば、歯周病に罹患した患者さんを治療する場合、後退してしまった歯肉（堅い歯茎の部分）に患者さんの健康な歯肉の一部を移植して成形する「遊離歯肉移植術」という手術が行われます。しかし、移植のために採取する部位を誤って選択すると、移植してもその後に歯肉として機能することはできません。なぜなら歯周病によって後退した歯肉は特殊で、コラーゲンが豊富という特徴があり、口の中の他の部位（頬や口唇の裏など）とは全く異なるからです。この場合は口蓋（上顎の部分）など後退した歯肉と組織学的に同様の構造を持つ部分を移植させないといけません。

また、舌がんなど口腔がんの検査において、正常な舌の粘膜の構造を知らなければ、がんを見逃してしまう可能性があります。このように組織学では正常な組織切片を知ることによって、がんなどで

生じる異常の構造にも気づけるように学んでいきます。

以上、三科目を紹介しました。これらはそれぞれの科目のほんの一部で、伝えきれていないことや、紹介できていない科目（一学年は三二科目、二学年は二四科目、三学年は三二科目の履修科目数）もありますが、今回は、このあたりで紹介を終わらせていただきます。

大学生活は、まだまだ前半の途中です。これからも人の役に立てる歯科医師になることを目指して精一杯頑張りたいと思います。

ウズベキスタン行ってきた

東京大学　理科二類　二年
清永　遥生

八月九日から二十三日にかけてベトナム、インド、ウズベキスタンと三か国に行った。その中でも特に印象に残ったウズベキスタンを旅行記として記す。

ニューデリー市内を一日観光したのち、次の日の朝六時半の便でウズベキスタンのイスラム・カリモフ・タシュケント国際空港へと向かった。空港には二時間前に着いておけば問題ないだろうと思い、空港に朝四時半に着いたのだが、早朝とは思えないほど人がいた。流石インドだ、と思いつつ急いでイミグレーションに向かうもやはりあり得ないくらい人がいる。手荷物検査、出国審査合計で一時間半近く取られ、飛行機の搭乗員に「Uzbekistan? Run!」などと急かされつつも何とか飛行機に間に合った。タシュケントまでのフライトは三時間程度であったが機内食もあればテレビもついている最高のフライトだった。

そしてタシュケントに到着し入国検査を済ませたのち通貨を両替しようと思ったのだが、なぜか空港の両替所が開いていない。困って空港を彷徨っていると出発ゲートの方にあったのでそこで両替できた。助かった。

とりあえずホテルを目指してタクシーに乗ったのだが、街並みが本当に整頓されている。ヨーロッパのどこかと言われても違和感はないレベルだが、少し生活感はない。ソ連の遺構を感じつつホテルに到着、荷物を置いてタクシーの運転手が教えてくれたレストランを目指す。

ウズベキスタン含めシルクロード一帯ではプロフなる炒飯みたいな伝統料理がある。これを食べようと思っていたのだが、教えてくれたレストランはプロフの店だった。入口では直径一メートルくらいの鍋でプロフを作っている。期待に胸躍らせつつ店に入り、メニューを見るとロシア語とウズベク語だけで英語はなく、何かよくわからなかった。偉大なる文明の利器を用いて無事注文し、商品が到着。ウズベクは物価がとても安く、日本円で一品四百円くらいだったのでプロフとサラダとジュースを注文したのだがありえない

くらい大きい。ジュースに至っては百円くらいなのに一リットルの瓶で置かれている。しかも謎に直径二十センチくらいのパンもついてきた。何とか食べきった。料理自体はとても美味しかった。

腹ごしらえに散歩をしようと二キロ先の中央アジア最大のバザール、チョルスー・バザールへと向かった。バザールはなかなかのカオスであった。衣服類から文房具、貴金属や食べ物まで何でもあった。バザールでは少数ながら子供も働いているし乞食をしている子供もいた。一応の区画分けされていて、一番大きいモールには生肉、乳製品、フルーツなどが売ってある。店員は日本語で話しかけてきて根負けしてフルーツとヨーグルトを買ってしまった。勿論空調など無いため安全面が心配だったが一応大丈夫だった。

意外かもしれないがタシュケントには地下鉄が通っている。旧ソ連の都会では冷戦期の核シェルター代わりに地下鉄が多く走っているらしい。モスクワ地下鉄は駅の美術的装飾で有名らしいが、タシュケント地下鉄も駅の装飾が美しい。地下鉄がなければ美術館と言われても違和感はない。また旧ソでは珍しく駅や鉄道の写真撮影も一応合法らしい。ただやはり旧ソ、ドアの開閉の勢いがおかしい。指くらいなら持っていかれるだろう。

地下鉄で市内の博物館や公園をめぐり、タシュケントでも有名なハズラティ・イマーム・モスクに行った。内部の礼拝所など以外は観光客にも公開されているため、中に入ることができたのだが時間が少し遅く、併設の博物館は開いていなかった。しかしモスク内にお土産屋やアトリエみたいな場所もあり楽しかった。

モスクを見終え夜ご飯に向かおうとしていると、モスクの入り口で現地の少年に英語で「中国人？日本人？」と聞かれた。日本人と答えると、その少年は日本語で「日本は憧れの国だから行ってみたいんだ」と言い、京都や東京にある、行ってみたい場所を話してくれた。ウズベキスタンが好きになった。

夜ご飯はタシュケント唯一の日本人経営の日本料理屋に行った。一週間以上日本食を食べていなかったのもあり本当においしく感じた。

次の日、ウズベク最大の観光都市・サマルカンドに行った。ホテルのフロントで「この電車に乗るから何時くらいに駅に着けばいい？」と聞くと一時間前と言われ、朝早いからという理由で朝食を弁当に入れてくれた。優しい人たちだった。ただ、一時間前に着いたが特に検査も何もなかった。『地球の歩き方』という観光雑誌があるのだが、それを読んでいると電車の中で車掌に日本人かと聞かれた。日本人と答えると『地球の歩き方』のウズベキスタン鉄道のページを開いた。何かやらかしたかと困惑していると、「この写真あるだろ？これは俺だ」と言い、颯爽と立ち去って行った。かっこよかった。

サマルカンドは古来よりシルクロードの交差点として栄えてきた。東は西安、南にはカブールやインド、西にはペルシャやイスタンブールと多くの主要都市、国につながる重要な交易路の結節点である。シルクロードの文化が集まる世界遺産ともなっている都市だ。

今回の旅行の大きな目的地でもあったサマルカンドだが、駅を出ると問題発生、日本語を話すタクシー運転手に付きまとわれる。しかも値段が高い。諦めてホテルまでだけと思ったが相場の十倍なので流石に逃げた。タクシーアプリを見せて値段おかしいだろ、と言うと「ゼロが一個隠れているね」などと言われた。ふざけている。

ホテルに荷物を置き、サマルカンドで最も有名な観光地、レギスタン広場へと向かった。イスラムの神学校が三つ左右と正面に配置された広場で、サマルカンドブルーと呼ばれる青色のタイルを用いた建築となっていてとても壮大だった。どの神学校も中に入ることができる。タシュケントのモスクと同様に中はお土産屋やアトリエになっている。皿に模様を彫っている人やからくり箱を作っている人もいた。あるお土産屋で伝統衣装のスザニを見ていると観光客のクウェート人に「このスザニ着て一緒に写真撮ろうぜ」と言われた。一緒に写真を撮るとすぐにどこかに行ってしまった。なんだったのだろうか。

レギスタン広場では近くで音楽祭があるらしく設営の準備が行われていた。大統領も来る大規模なイベントらしく、音楽祭期間中は立ち入り禁止となるそうだ。タイミングが被らなくてよかった。帰国後音楽祭の写真を見たのだが、ド派手なプロジェクションマッピングが行われていたようで情緒もへったくれもなかったがそれはそれで面白そうだった。

昼食はラグマンと呼ばれるトマトうどんみたいなものを食べ、歩いて二キロくらいのウルグ＝ベク・モスクへと向かった。このモスクは丘の上に立っておりサマルカンドの旧市街を一望することができた。旧市街とは少し離れたあたりには拡大中の新市街もあり、まだまだ発展中の都市である、という印象だ。

翌日、もう一つの観光都市ブハラを目指してさらに西に進んだ。十三時ごろ到着し昼を軽く済ませてブハラの旧市街を散策した。サマルカンドに比べると知名度は少し劣るが、ブハラも素晴らしい街である。シャイバーン朝の実質的な首都でもあったブハラには歴史的建造物が数多く存在している。なんなら旧市街にあるホテルは五千円くらいだが歴史的な建物だったりもする。ウズベクの他の都市と比較しても砂漠のオアシス都市といった印象を強く受ける街だった。イラクのバグダッドやシリアのアレッポなどもこんな感じなのかな、と思った。

多くのモスクにはミナレットと呼ばれる尖塔がある。ミナレットからはアザーンという礼拝を呼びかける音楽が流れる。ブハラのミナレットからも音楽が流れておりアザーンかな、と思っていたが明らかにポップ調だった。見てみるとウズベク人の四人組が歌っていた。陽気な人たちだった。

ブハラの伝統工芸などを見つつ散策して、夜ご飯にはチュチュワラ（ロシアのペリメニ）を食べてホテルへと戻った。

次の日、ブハラから四百キロ西のウルゲンチを目指し一日中車の中だった。途中でウズベク国内のカラカルパクスタン共和国に入り軽い検問があったが、砂漠の中の七時間何事もなかった。左手に見えるトルクメニスタンにもそのうち行ってみたい。

次の日ウルゲンチから三百キロ西のモイナクという小さな町に向かった。往復十時間近く車だった。モイナクは世界最大の環境破壊とも呼ばれるアラル海の縮小で大きな損失を被った町であり、かつて漁業が行われていた時の船の墓場がある。砂漠の中に十隻近く船がある姿はなかなか印象深かった。モイナクまでの道は舗装が剥げている区間も多く、往路でタイヤがパンクしたらしい。モイナクで直してもらって帰路に就いた。

ウルゲンチの街は本当に生活感がない。明らかに町の人口規模に合わない数のアパートや夜になったら謎にライトアップするのも旧ソ連の地方部という感じが強かった。ホテルのオーナーはトルコ人のすごくフレンドリーな方で、日本人が珍しいのだろう、色々フルーツや料理をご馳走してくれた。とても楽しいホテルだった。

次の日、ウルゲンチからタシュケントに戻る電車を取ってサマルカンドで乗り換え、タシュケントに戻った。この電車はロシアのヴォルゴグラードからタジキスタンのホジェンドまで約四千キロ近く運転しているらしく全席横になることができるのだが、最も安い席にしたためとにかくシートがとにかく固くて狭く、また空調が弱いため窓を開けているのだが、砂漠地帯を行くため砂が入ってきてつらかった。少し喉を傷めてしまった。

タシュケントからカザフスタンのアルマトイに行こうと思っていたのだが、喉の調子が芳しくないため諦めてその次の日の直行便で帰ることにした。その日の深夜発の便だったので一日中暇であり、タシュケント最大のショッピングモールに行くことにした。日本でもなかなかないくらい綺麗かつ警備が厳重だった。ウズベキスタンのスポーツブランドに日本のひらがなの「て」をロゴにしたものがあり、その店があった。

一週間のウズベキスタン旅行もついに終わりが近づいてきた。夜八時ごろ空港に到着しイミグレーションを受けていると二人に日本人か聞かれた。片方の人は日本語で挨拶を、もう片方の人は「藤井風知ってる？私藤井風好きなんだよ」みたいな話をされた。空港の検査でフレンドリーな会話をしてくる国はウズベキスタンくらいな気がする。空港で少しお土産を買ってウズベキスタンから成田行きの飛行機に乗った。

総じてウズベキスタン旅行はとても楽しかった。シルクロードの文化が融合した建築、おいしい料理、安い物価、比較的良い治安、そしてフレンドリーで親日的な人たちと、旅行をするのに最高な国の一つだと感じた。

次は今回ちゃんと行けなかったインドか何があるかよく知らないコーカサスのジョージア・アゼルバイジャン・アルメニアあたりの国々に行ってみたいと考えている。

ふるさと

日本大学　経済学部経済学科　二年
高木　将士

私の地元である山口県和木町の魅力をここでご紹介したいと思います。そもそも和木町は山口県の最東端に位置する、玖珂郡で唯一残る町であり、人口は約六千人の小さな町です。広島県大竹市と岩国に隣接しており、東は瀬戸内海に面しています。江戸時代には岩国藩の配下にあり、明治の廃藩置県の際には、小瀬・和木・関ヶ浜・瀬田の四村をまとめて、小瀬川村となり、明治三十二年に小瀬川村との分離を経て、和木村が誕生日し、昭和四十八年に現在の和木町となりました。現在では、工業が発達しており、三井化学株式会社やＥＮＥＯＳ株式会社など大手の企業の工場が建設されています。さて、ここからはその魅力についてご紹介していきます。

まず一つ目は、設備が充実しているという点です。和木小学校・中学校をはじめ、和木町にはたくさんの立派な建物があります。その建物たちはどれも役割にあった素晴らしいものです。小学校は建て替え工事が行われ、綺麗で最先端の技術を駆使した教育を行える場所だと言えます。私は新校舎が設立されるときにまさに小学校に在学しており、新校舎が建設されていくその姿を見て、感動とワクワクに胸を踊らされていたのを今でも覚えています。全ての教室にエアコンが設備されており、タブレットやホワイトボードを使用した授業方法によって、教育をする場としてこれ以上ない場所だと感じています。また、幼稚園・小学校・中学校すべて無償で給食が食べられるというのも大きな特徴です。ほとんど毎日、おいしい給食を無料で食べることができるのは大きな魅力です。最近では、幼稚園も新しく工事され、和木子ども園として、非常に綺麗な校舎に建て替えられました。

次に二つ目の魅力は、便利な位置にあることです。ＪＲを利用すれば、乗り換えなしで一時間もかからずに広島駅に行くことができ、岩国にも数分で行くことができます。町自体には大きなショッピングモールはありませんが、町から少しでも出れば、娯楽施設や買い物をする場所がたくさんあり、困ることはありません。すごく便利だと思います。私もよく友達と広島に行ったり、岩国行ったりしていましたが、毎回その便利さに感動していました。少し残念なのが、和木町の中に飲食店が少ないというところです。近場でどこかご飯を食べに行くとなると、だいたい場所が限られてしまいます。欲を言えば、もう少し友達や知人と集まれる場所があればいいなと思います。

魅力の三つ目は、楽しいイベントがたくさんあるという点です。春には、蜂ヶ峯ローズフェスタがあり、たくさんの出店やステージによるパフォーマンスが楽しめます。夏には、小瀬川の花火大会があり、こちらもたくさんの出店があり、多くの町民が集まる祭りです。秋には和木中学校でわき愛あいフェスティバルがあり、キャラクターショーやフリーマーケット、ラッキー抽選会、各種団体による出店などが楽しめます。町民総参加の一大イベントだと言えま

す。どの祭りも非常に魅力的であり、和木町を盛り上げる源となっています。わき愛あいフェスティバルに参加した忘れられない思い出があります。私が中学二年生のとき、好きな人と二人で祭りに行きました。すごく緊張しましたが、ステージでのショーや出店で焼きそばや輪投げ、射的などをして、緊張がだんだんと解け、思いっきり楽しむことが出来ていました。この時間が終わって欲しくないと願っていましたが、無情にも時間が過ぎていき、祭りも終わりに近づいていきました。私は思い切ってその子に自分の気持ちを全て告白しましたが、結果は振られてしまいました。良い意味でも悪い意味でもその年のわき愛あいフェスティバルは忘れられない思い出となってしまいました。

四つ目は、深い友情を築ける点です。幼稚園・小学校・中学校一貫であるため、同級生の人たちはみんな幼馴染のように親しみやすく、仲良くなれるところが魅力です。引越しや中学受験で他のところに行ってしまう人もいるのですが、大半が中学校まで一緒です。ほとんど毎日顔を合わせ、会話をし、遊んだり、喧嘩をしたりして仲を深めることができます。今でも帰省をすると必ず遊びます。おそらく一生続く仲だと思っています。また同級生だけでなくその上下の人たちとも交流があり、仲良くなれます。このような環境にあるからか、スポーツが強いのも大きな特徴です。和木の人たちだけで形成されているチームであるため、スポーツをしているときだけではなく、普段の学校の時も交流しており、チームワークが高いと感じています。狭く深い友人関係を作りたいという人であれば最適な場所だと思います。また、友人関係だけでなく、地域の人とも交流する機会が多いです。コミュニティが狭いため、町を歩いていて、知人に出会う可能性が高く、老若男女仲良くなれます。優しい人が多く、困ったことがあれば、家族・友人以外でも相談できます。私が小学生の時に町内のセブンイレブンで買い物をして、レジでお金が足りず困っていたら、後ろの人が何も言わず足りない分のお金を出してくれました。お礼を言うと、「困った時はお互い様」と当時小学生である私に対して、威張った態度ではなく、優しさを見せてくれました。その時から私は困った人を見た時は必ず力になると決めています。

ここまでは和木町の魅力を書いてきましたが、ここからはどのようにすればもっと魅力的な町になるか、私の考えを書きます。

一つ目は、遊べる場所を増やすことです。先ほど魅力の二つ目で飲食店が少ないことを書きましたが、遊べるところも限られています。代表的な場所で言えば、蜂ヶ峯総合公園、和木町体育センター、プールくらいしか思いつきません。そこで、カラオケやゲームセンター、ボウリング場などの娯楽施設を提案します。あくまで若者からの視点であるため、一概に正解だとは言えませんが、私が和木町に住んでいた時にあればいいなと思っていました。

二つ目は、岩国市との合同の祭りを開催することです。先ほど魅力の三つ目で和木町の祭りを紹介しましたが、さらに魅力的なものにするため、岩国市との合同の祭りを提案します。というのも、和木町の人口は約六千人と決して多いとは言えません。祭りの盛り上

がりと人の数は比例していると考えているため、岩国市の人口と合わせて開催することでさらに盛り上がると考えました。これを開催するにはたくさんの問題が生じることは承知の上ですが、絶対に楽しいものになること間違いなしだと言えます。

三つ目は、ＳＮＳを使用して町のＰＲをすることです。既にやっているとは思うのですが、市ではなく町ということもあって知名度が低いと思います。このネット社会に沿ってInstagram、X、YouTube、FacebookなどＳＮＳをもっと活用して素晴らしさを発信することで、知名度が上がり、町の魅力を世に広めることができると考えました。また、そこで一工夫することで「バズる」ことができれば、それが町の新しい魅力になるのではないかと考えました。

これを読んで一人でも多くの人が和木町に興味を持っていただけると幸いです。まだまだここでは伝えきれない魅力がたくさんあります。気になっていただけるならば、一度足を運んでみてください。

キャンプ実習

日本体育大学　体育学部健康学科　二年
中村　果鈴

私は七月六日から九日の四日間でキャンプ実習に行ってきた。キャンプ地は、長野県上田市の菅平高原にある日体大が所有する実習場だ。ここは標高一二五〇ｍに位置し、避暑地となっているため、朝夜の冷え込みが激しい。就寝時には少し暑く感じられた寝袋も、朝方には欠かせないものとなった。

そんな菅平には、私のようなスマホ依存症の人をも魅了する、広大な敷地と自然があり、この期間だけはスマホから距離を置いて、心身ともに自然を感じることができた。一日目はキャンプサイトにテントや机、椅子を設置するところから始まったのだが、生憎の雨天でテント内を濡らさないよう立てるのに苦労した。机と椅子は、杭と数枚の木の板を紐で固定して、簡易的なものを作成した。紐の締め付けが弱いとすぐに板が斜めになり、机や椅子としての機能を果たさなくなる。紐がほどけないよう、体重をかけながら丁寧に結ぶことを意識した。私達の班のサイトが完成した頃には既に日が傾き始めていたため、お風呂に入りに行った。ここで一日の疲れを癒せると思ったら大間違い。脱衣から着衣まで七分しか時間を確保してもらえないため、ロッカーやシャワーの争奪戦が起こり、お風呂場は戦場と化した。こんなにも一分一秒が大切に感じられたことは過去にない。お風呂から上がってもドライヤーがないため、夕食を

作っている間に自然乾燥させる。乾燥させている間に焚火の影響で、髪の毛が煙臭くなる。これは防ぎようがないため、寝る前にドライシャンプーをして不快感を紛らわせた。夕食づくりは、食材が支給されるだけで何を作るかの指定はないため、皆で何を作るか話し合ったり、役割分担をしたりした。日頃は一人でご飯を作って食べることが多いため、友人たちと円になりながら、普段関わることのない他学部の人たちとも会話をしながら食事をすることができ楽しかった。

二日目は朝食を摂った後、自然観察からスタートした。離れた場所にある滝を目指して歩くのだが、思っていたよりも距離があった。滝に着いたころには歩き始めて二時間半が経過し、皆疲れていた。滝付近は周りが木々で囲われ、水しぶきも相まって非常に涼しかった。涼んだ後、滝の水を使用してティータイムとなり、私はココアを作った。疲れた体にココアが沁みた。その後は自由行動となった。事前に先生が「時間があれば川の中に足を入れてみなさい。教育者としてわかることがあるかもしれない。」と皆に声をかけていたので、私は友人と靴を脱いで川に入ってみた。川の水は非常に冷たく、思うように足を動かせない。数分足をつけておくことで精一杯であった。体温が上昇している状態で、冷たい水にいきなり飛び込むと、冷水ショックから不随運動が引き起こされる。夏休みに入ると川での死亡事故が増加する原因はここにあるのではないかと考えた。冷水による低体温や衝撃から身体を守るためにもライフジャケットの重要性を再認識した。自由時間の後はキャンプサイトに戻り、お風呂を済ませた。夕食ではメロンが出た。隣の人がボソッと、「メロンを出してくれるのは嬉しいけど、メロン出す余裕があるなら、お風呂の時間を長くしてほしい。」と呟いた。これには私も笑ってしまった。一段落着いた後に、キャンプファイヤーをした。キャンプファイヤーの定番曲『山のごちそう』を歌いながら、皆で楽しんだ。他にも数曲歌った後、就寝の時間がきた。しかし、この日は七月七日で晴天だったため、先生に黙って友人数人とテントを抜け出して空を見に行った。東京では光や大気汚染の影響で、星が全くと言っていい程見ることができない。しかしここ菅平では、満天の星空を見ることができた。流れ星はさすがに流れていなかったが、お願い事をした。その内容は秘密！先生にばれたら下山対象になってしまうので、そそくさとテントへ帰った。

三日目のプログラムは山頂までの登山だ。先程も述べたが、私たちのサイトは標高一二五〇ｍに位置している。山頂は一六五〇ｍなので、標高差は四〇〇ｍだ。数字だけ見ると大した事なさそうだが、キャンプ三日目で疲労も溜まっていて、山頂にたどり着くまでに三時間かかった。登山中見たことのない植物を横目に後ろを振り返ると、見たことのない綺麗な景色が広がっていた。自然と疲れが回復していくようなそんな気がした。絶景を見ながら食べるお昼ご飯は、キャンプ実習の中で食べてきたどのご飯よりもおいしかった。食事後、名残惜しくはあったが、私たちはその場をあとにした。サイトに戻ってからは、夕食前にスイカ割をした。小学生以来のスイカ割で皆ワクワクしていた。初手で剣道部の子が目隠しをし

たのだが、本領発揮と言うべきか、一発でスイカを叩き割っていた。就寝前、テントの中で寝袋に包まりながら友人たちと、これまでの思い出や恋バナをしながら最後の夜を楽しんでいた矢先、友人の一人が悲鳴を上げた。何事かと思ったら、手の甲サイズの蜘蛛がテント内にいた。私を含め、皆蜘蛛が苦手で他のテントの人達に助けを求めたが、既に寝袋に入っているから出たくないと言われ、結局私がじゃんけんに負けて捕まえることになった。このことがきっかけとなり、ある程度の虫はティッシュペーパーさえあれば、虫を仕留められるようになった。これはキャンプ実習最大の学びかもしれない。

四日目はテントや机、椅子を撤収し、キャンプ実習は終了した。帰りは疲れていたためか、バスの車内でお弁当を食べながら眠っていた。

キャンプ実習に行くまでは、正直に言うとあまり気乗りがしなかった。プライベートな時間は取れないし、準備物や荷物は多いし。しかし、キャンプ実習を終えた今では、またキャンプに行きたいと思っている。七分しかなかった入浴をどうやって少しでも長く入るか皆で考えたり、お手洗い場には蛾や蜘蛛、バッタなどたくさんいた。そのため、友人と感情を押し殺したりしながら生活するのは、過酷ではあったが想像以上に楽しかった。また、日常生活では経験できないことばかりの繰り返しで、自分自身の経験値が上がったようにも思う。屡述するが、特に虫を触れるようになったことに関しては大きな成長を感じる。辛いことがあっても、同じ境遇の仲間がいれば乗り越えられるし、ネガティブな考えはポジティブ思考に変換することで前向きでいられる。これからこの先、辛いこと悲しいことたくさん待ち受けていると思う。しかしそんな時こそ、悲観的になるのではなく、全ては人生のレベルアップだと思って、高い壁に臆することなくチャレンジしていきたい。

タイに行きタイ

神奈川大学　経済学部経済学科　二年
平中　達海

私は春休みに岩国高校の時出会った友達と海外旅行に行く計画を立てています。なぜ海外に行こうと思ったのか理由は三つあります。一つ目は、視野を広げるためです。海外での生活や異なる文化に触れることで、新しい視点や考え方を学び、将来のキャリアや生き方に役立てたいと感じたからです。二つ目は、挑戦する精神を育てるためです。海外ではもちろんのこと日本語が通じないため、自分の力で状況を切り開かなければならない場面が多くあります。そのような未知の環境でのコミュニケーションや文化の違いに直面することで、自然と挑戦する精神が養われ、困難に立ち向かう力や柔軟な思考力を培う貴重な機会になると思ったからです。三つ目は、

時間に余裕があるためです。春休みは大学生活の中でも比較的長い休暇の一つで、まとまった時間を使って海外旅行を計画できる絶好のタイミングだからです。

そして、タイトルの通り、春休みはタイに行く計画を立てています。タイを選んだ理由は、数多くの魅力が詰まった国だと思ったからです。ここからは、下調べしたタイの魅力について書こうと思います。

まず、タイは日本からのアクセスが良く、直行便が充実しているため、比較的手軽に行くことができます。フライト時間も日本からおよそ六時間ほどなので、短期間の旅行でも十分に楽しめる場所です。また、物価が日本に比べて安いため、私たち大学生にとっても予算を抑えながら充実した旅行が可能です。さらに、タイは歴史と文化が非常に豊かで、多様な体験ができる国です。伝統的な寺院や美しい自然、独特の食文化など、訪れる場所や楽しみ方が無限にあります。例えば、バンコクにはワット・ポーやワット・アルンなどの歴史的な寺院があり、壮大な仏教建築を間近で見ることができます。これらの寺院はただの観光地ではなく、タイ人にとっては日常的に参拝し、信仰を深める場所でもあります。そのため、現地の文化や宗教を肌で感じることができ、異文化理解にも繋がります。また、タイの自然も素晴らしいものがあります。タイ北部のチェンマイは山々に囲まれた美しい景観が広がり、トレッキングや象と触れ合えるツアーなど、自然を満喫できるアクティビティが充実しています。一方で、南部のプーケットやクラビといったビーチリゾートでは、透き通るような青い海と白い砂浜が広がり、リラックスしたひとときを過ごすことができます。これらの場所は、シュノーケリングやダイビングなどのマリンスポーツも楽しめるため、アクティブな旅行をしたい人にも最適です。さらに、タイの食文化は、世界中で人気を博しています。タイ料理はスパイスやハーブを多用し、酸味、辛味、甘味、塩味が絶妙に組み合わさった独特の味わいが特徴です。個人的にカオ・マン・ガイは日本にあるタイ料理でよく食べるので、本場の味が楽しみです。また、タイの屋台文化も魅力的で、街中の至るところで手軽に美味しい料理が楽しめます。屋台での食事は安価で、学生旅行にもぴったりです。

さらに、タイはそのホスピタリティでも有名です。タイの人々は非常に親しみやすく、フレンドリーで、観光客に対しても温かく接してくれます。「微笑みの国」として知られるタイでは、言葉が通じなくても笑顔でコミュニケーションを取ることができるそうです。また、英語も多くの観光地で通じるため、異国の地でも安心して旅行を楽しめるのもタイの魅力の一つです。

タイは、多様な顔を持つ国です。歴史や文化を感じるバンコク、リラックスした雰囲気のビーチリゾート、そして自然豊かな北部の都市。さらに、タイ全土に広がる美味しい食事と温かい人々のホスピタリティが、訪れる人々を魅了し続けています。大学生の春休みという限られた時間でも、タイでは多くの体験ができるため、一度の旅行で数え切れないほどの思い出を作ることができると確信しています。

タイを選んだ理由にはさらに深い魅力があり、特に大学生にとって多くの学びと体験を得る絶好の場所でもあるからです。ここで、タイの他の魅力的な側面も挙げてみます。

まず、多様な文化と民族の共存が挙げられます。タイは、国内にさまざまな民族グループが存在し、それぞれが独自の文化や言語を守りながら暮らしています。タイ北部の山岳地帯では、カレン族やアカ族などの少数民族が住んでおり、彼らの伝統的な生活様式や祭り、工芸品に触れることができます。こうした異なる文化に触れることは、大学生にとって視野を広げ、異文化理解や共生について考える良い機会となると思います。

次に、タイの祭りやイベントも大きな魅力です。タイの新年を祝う「ソンクラン」や、灯篭を流して願い事をする「ロイクラトン」といった伝統的な祭りは、観光客にも非常に人気があります。ソンクランは毎年四月に開催される水掛け祭りで、街中が水であふれ、地元の人々や観光客が一緒になって楽しむ一大イベントです。一方、十一月のロイクラトンでは、夜空に無数の灯籠が上がり、幻想的な風景が広がります。これらの祭りは、タイの伝統や信仰を深く理解する良い機会です。

また、タイには歴史的な都市も数多く存在します。バンコクだけでなく、アユタヤやスコータイといった古都は、かつてのタイ王朝の栄華を今に伝える重要な遺跡が多く残っています。アユタヤは十四世紀から十八世紀までタイの首都として栄え、現在ではその遺跡群がユネスコの世界遺産に登録されています。絶対に行きたい場所です。

さらに、タイは環境保護やエコツーリズムにも力を入れている国です。近年、タイでは環境保護の意識が高まり、自然保護区や国立公園でのエコツーリズムが盛んです。例えば、タイ北部のパイや南部のカオソック国立公園では、自然と調和した観光が推奨されており、トレッキングや野生動物観察など、環境に配慮した体験を楽しむことができます。大学生として、環境問題や持続可能な観光について実際の現地で学べる機会は非常に貴重です。

タイの多様性はまた、近隣の国々へのアクセスがしやすいという点も魅力的です。タイは東南アジアの中心に位置しており、カンボジアやラオス、ベトナムといった他の東南アジア諸国とも接しています。タイを拠点に、これらの国々を訪れるバックパッカー旅行も大学生には人気があります。短期間で複数の国を訪れ、各国の文化や歴史に触れることで、より広い視点で東南アジアの魅力を理解することができると思うので、周辺の国も視野に入れたいと思います。

海外の中でもタイを選んだ理由には、これらの多様な要素・魅力が組み合わさっており、単なる観光だけでなく、学びや自己成長につながる要素がたくさん詰まっています。せっかくの海外旅行なので大学生として節度を守り全力で楽しみながら新しいたくさんの刺激を受け、学び、今後の成長やキャリアに繋げたいと思います。

二十歳になって

中央大学　法学部法律学科　二年
舛本　晃誠

私は今年二十歳になった。二十歳（というより今年）になって変わったことが四つある。まず一つ目がお酒を飲めるようになったことである。二十歳になってすぐに私は調子に乗ってアルコール度数四十パーセントの「サントリージン　翠」やスコッチなどのお酒を飲んだ。何故そのようなお酒を飲むことになってしまったのかというと、コンビニでいざお酒を買おうとした時に「アルコール四パーセントの氷結をレジに持って行くの恥ずかしくね？」と思ってしまったからだ。お酒をあまり飲んだことのないやつが何言ってんだと今思うとかなり恥ずかしいことをした。また、「サントリージン翠」を買った理由は、はじめしゃちょーが自身のyoutubeの動画で「サントリージン　翠」をおいしいと絶賛していたからで、「おいしいならせっかくだし飲んでみようかな」と買ってみたが、あまりおいしくなかった。柚子・緑茶・生姜を使用したジャパニーズジンですっきりと爽やかでキレのある味わいと書かれていたが、よく分からなかった。おいしくないというよりも私がまだお酒に慣れていないので味わい方が分からなかったのだろう。購入時の年齢確認でドヤ顔で免許証を提示してやろうと思っていたのに年齢確認されず、おまけに飲んだ後は頭が痛くなって最悪だった。父が「酒がうまく感じるのは四十ぐらいになってからや」と言っていたが、まさしくその通りだと思う。今は頭が痛くなるので居酒屋に誘われた時ぐらいにしか飲まずに、四十歳ぐらいになったらビールを味わってみようと思う。また、二十歳になったらタバコを吸ってみようかなと思っていたのだが、父と祖父に猛烈に反対された。父は一度タバコをやめた背景があり、タバコの中毒性をよく分かっているからだろう。祖父は現在進行形でタバコに肺を冒されており、健康への悪影響をよく分かっているからだろう。とりあえずお金がないし、タバコの匂いで吐きそうになるのでタバコは吸わないことにした。

二つ目の変化は、東京都知事選に行ったことだ。選挙権自体は十八歳からあるが、公職選挙法によると、投票できるのは選挙日の三ヶ月前の三月十九日までに転入届を提出した者であるため、四月になってから転入届を提出した去年の私は投票権がなく、今年になってようやく初めて選挙に行った。誰に投票したかは言わないが、とりあえず私の期待通りの結果は得られなかった。選挙に行く前に、皆誰に投票するか気になったので大学で誰に投票するか大学の友人に聞いてみたのだが、意外と東京で一人暮らししていても住民票を移していないため、選挙に行けないという人が多くて驚いた。調べてみると、原則住民票は移さねばならないが、大学生はそれを免除されている節があるとのこと。私が情弱だっただけらしい。また、選挙会場に行くと、ネットでは若い人の投票率が低いと騒がれていたが、意外と十代、二十代ぐらいの人が多くて驚いた。ネットの意見を鵜呑みにせずに、自分の目で確かめることが大切だと今回の選挙で気付かされた。今回の選挙では過去最多の五十六人

が立候補したり、石丸氏がＳＮＳを生かしたアピールをしたりとこれまでとは異なる（当選者以外は）新しい選挙で実に興味深かった。最初、選挙のはがきが来た時はめんどくさいので行こうか迷っていたが、今思うと、新たな発見もあったので投票に行って良かったと思う。これからも、先人達が血みどろになりながらも勝ち取ってきた民主主義の恩恵を噛みしめつつ選挙に足を運ぼうと思う。

三つ目は、国民年金だ。誕生日の数日前に年金を払えという封筒が来ていた。読んでみると、納税は国民の義務であり、払わなければ将来もらえる年金が少なくなって損しますよと書いてあった。さらに、国民年金法によると、二十歳になったら国民年金に強制加入させられるらしい。なんともひどい話である。私は今年バイトをクビになっており、収入が零にもかかわらず、月に一万七千円も払えはさすがに無理である。去年バイトを頑張って一生懸命貯めた貯金がすぐに底をついてしまう。すべての人が真面目に働いているとは思わないでいただきたい。世の中には私のような人間もいるのである。封筒には払えなければ、大学生には学生納付特例制度があるよと小さく書かれており、助かったと思ったが、これもよく調べてみると免除ではなく後から追納しなければならないらしい。こういうときだけ高校を卒業してすぐに大手の会社に就職して会社に厚生年金を払ってもらっている友達が羨ましくなる。大卒なら金が稼げると聞いて大学に進学したのに、現状私は年金も払えない貧乏生活で、友人は沢山金を持っている。つい最近二百万の軽自動車を購入したらしい。最近やっと車の免許を取った私とは大違いである。勉強ばっかりしても幸せにはなれないよ的な言葉を、かつて学歴厨だった高校生の頃の私は弱者の僻みとしか思っていなかったが、今の私ならこの言葉を聞いてロックバンドのギタリスト並みに首を縦に振るだろう。兎にも角にも両親は「自分の年金ぐらい自分で払え」と言って払ってくれそうにないし、後から追納するのも面倒なのでとりあえず単発バイトでもしようと思う。

四つ目は運転免許を取得したことだ。車の普通免許は十八歳から取得できるが、私が通っていた高校では教習所に行くのもバイトをするのも禁止だったので取るのが周りよりも遅れてしまった。高校で何故教習所もバイトも禁止なのか当時、先生に聞いてみたところ、「まだ一般受験の人は頑張ってる」「生徒で一体となって志望校を目指すのに君たちだけ他のことをするのはダメ」と言われた。今思えば、「周りの学生に迷惑にならない程度ならバイトをしたり教習所に行ったりしてもよかったのでは？」と考えてしまうが、もう終わったことなのでそこは良しとしよう。また、去年は東京に来たばかりで精神的にも時間的にも余裕がなかったので今年になってようやく免許を取得した。両親がとれとれうるさいので仕方なく取得したが、今思えば取得して良かったと思う。車の運転ができるようになって世界が変わった。自転車では行けないような距離でも車なら汗もかかずに行くことができる。行きたい場所に楽々行けるのは素晴らしいことだと思う。しかし、同時に人を簡単に殺めることができる道具であることも忘れずに気を付けて運転しようと思う。

このように、二十歳になっていろいろ変わったが、現状私が卒業

できるか分からない落ちこぼれ大学生であることに変わりはない。お酒やドライブなどにうつつを抜かさず、これからも目の前の単位を全力で拾うことに注力していこうと思う。

大学で学んでいること

青山学院大学　文学部フランス文学科　二年
三上　広太

私は青山学院大学の文学部フランス文学科に在籍している。大学では文学に限らずフランスについて幅広く学んでいるが、最近になってフランス文学を読むことの難しさを以前に増して実感している。しかしそれと同時に、フランス文学の奥深さ、魅力にも気付かされた。一年生までは言語を中心にフランスについて学んでいたが、二年生に上がってフランス文学について本格的に学ぶ授業も増えてきたからだと思う。しかしフランス文学は文学の中でもマイナーで、フランス文学科にでも入らない限り、教育の中や普段の生活でも多くの人たちが触れる機会が少ないと思う。というのも、例えば日本文学と比べると、当たり前だが、フランス文学はフランス語で書かれており、ほとんどの人が初見ではそもそもフランス文学を読むことができない。英米文学と比べても英米文学ではウィリアム・シェイクスピアなど日本人にも馴染みのある作者や作品が多いのに対し、フランス文学は全体的に日本人にあまり馴染みがない。このような理由で他国の文学よりもフランスの文学は触れられる機会が少ないと考えるが、フランス文学を読まないのはもったいないと言えるほどフランス文学は魅力的である。文学的な魅力はもちろんであるが、単に文学を楽しみ、学べるだけでなく、文学から分かるフランスの文化やその文学が書かれた歴史的な背景など、一つの文学作品からでも多くのことを知ることができる。

そんなフランス文学の中でも、授業で扱われた『カンディード』という作品が興味深かったため、『カンディード』についてまとめる。『カンディード』という作品は、十八世紀に発表されたフランスの啓蒙思想家ヴォルテールによる文学作品であり、楽園のような美しい故郷を追放されてしまったまっすぐな心と純朴な気質をもつ純真な若者カンディードが、恩師パングロスの説く「最善説」の教えを胸に、大地震、戦乱、盗賊や海賊の襲撃など、度重なる災難に立ち向かい、そして最後の最後についに一つの真実を見つけていく物語である。この作中で出てくる「最善説」という考え方が現代の私たちにも反面教師的な教訓を与えてくれて面白い。そもそもカンディードの恩師、パングロスの考える最善説とは何なのかを検討すると、最善説とはこの現実世界は神によって可能な限り最善の状態で創造されたという考え方である。つまり、苦悪などがこの世に存在するにもかかわらず、この世界は全体的に見て存在し得る世界の中でもっともよいとする思想こそが最善説という考え方なのであ

る。パングロスの最善説的な考え方は人間中心的な視点に基づいており、人間が自然の中心であり、全てを知り、全てを制御できると考えている。しかし結局は大地震のシーンでは、自然の前では人間は無力であった。このように人間が自然の中心であると考えるパングロスの教えが矛盾したものとして描写され、皮肉として風刺されている。これは現代の私たちにも、人間中心、自己中心的になってはならないことを教えてくれる。作者であるヴォルテールは読者に自分自身や身の回りのものについて見つめ直すよう訴えかけているのだろう。作中のパングロスの最善説という考え方を通して、現代の私たちにも教訓を与えてくれるのだ。

また、授業の中で『カンディード』から読み取れる当時のフランスの文化を分析し、考える機会があった。『カンディード』の物語の中では飢えている主人公カンディードが出会っていく、上の立場の人々に何度も助けられる。このような描写を通して、当時のフランス社会の大きな身分の格差が風刺されていることが分かる。

ここで、『カンディード』が書かれた十八世紀フランスの身分格差について興味を持ったため、具体的な身分格差の例として上流階級の人々と庶民的な人々の食生活の違いについてまとめる。富裕層の人々、庶民的な人々のいずれも主食はパンであったが、上流階級の人々は小麦から作る白いパンを好んだ。当時の小麦は高価なもので、白いパンは上流階級しか手の届かないものであった。一方で、多くの農民たちは安価で栽培しやすいライ麦や大麦を育ててパンにした。また、身分に関わらず当時の人々は一日三食であったが、身分によって食べている料理にも違いがあった。貴族などの上流階級の人々は、肉や魚、エキゾチックなスパイスのような希少な食材を用いた多様な料理、ケーキや豪華な菓子等の贅沢品を楽しんでいた。また、銀や金で作られた豪華な食器が使われたコースの食事が中心だった。それだけでなく、社交の場として招待客を迎えた豪華な宴会も頻繁に開かれた。一方で、当時の農民や労働者などの庶民的な人々は、パンや野菜等の自家製の粗末な食材を中心とした簡素な食事が多かった。使われていた食器も木製や、つの製のものだった。富裕層の人々のように社交の場としての食事を楽しむことも少なく、食事の目的は主に、生存し生きていくためであった。上流階級と庶民の食文化を通して、当時のフランスでの社会的な身分の格差が浮き彫りになるが、「パンがなければケーキを食べればいいじゃない」というマリー・アントワネットの言葉として広く知られているこのセリフから、特に分かりやすく身分差が明らかになる。現代の私たちにも馴染みのあるこのセリフは、当時のフランスの身分格差を象徴している。この言葉は、貴族が庶民の生活困難を理解していないことを示しており、貴族と農民の間の大きな生活水準の違いを強調している。このように当時の貴族の豪華な食事と農民や労働者の質素な食事を比較すると、十八世紀のフランスの社会階級の格差が浮き彫りになる。この機会を通して、フランス文学からは文学の知識だけではなく、作品が書かれた当時の時代背景や文化も学べ、新たな発見が出来ることを実感した。

このようにフランス文学は難しい分野ではあるが、その分学べる

ものも多い。文学から学べる思想等を通して、自分の考えを豊かにすることもできる。そして文学を通して自分を見つめ直すきっかけになるし、なによりも視野が広がると思う。実際に、最近になって文学に限らず、様々なことに対して多角的な視点で見ることができるようになってきたと感じている。また、フランス文学科に入学することは自分にとっては新しいことへの挑戦で、かなりハードルの高いものであった。しかし、結果としてそれだけ多くのことを学び、経験することができている。フランス文学に挑戦し、多くのこと得られたことで、挑戦することの重要性と面白さ、素晴らしさにも気付かされた。このことを含めて、フランス文学科に入学して良かったと思っている。しかしフランス文学は異国の地の異国の言語で書かれた文学ということもあり、やはり読み取ることが難しく、読むのが嫌になることもある。そんな時にもフランス文学の魅力を思い出し、せっかく大学という良い環境で勉強できているため、挫折せず、励んでいきたい。

参考文献

・Voltaire,Candide ou l'Optimisme,Hatier,二〇一五
・ヴォルテール、植田祐次訳、「カンディード他五篇」、(岩波文庫、二〇〇一)

今年のMBOs

明治大学　経営学部経営学科　二年
茅原　鼓海

皆さん、こんにちは！

明治大学経営学部経営学科グローバルマーケティング専攻の茅原鼓海です。

大学に入学してから一年と五ヶ月が経ち、この間ずっとゼミの入試に向き合ってきました。そしてついに、念願だった古川ゼミに所属することができました。グローバルマーケティングを学べる大学は日本でも数少なく、古川ゼミはその中でも特に評価が高い場所です。グローバルマーケティングのプロフェッショナルを目指して、海外研修への参加やインターナショナルビジネスコンテストへの出場を通して、日々学びを深めています。

古川ゼミの活動の中でも今回は、二〇二四年度に私が設定した「MBOs（目標による管理）」について、皆さんにご紹介したいと思います。

「MBOs」とは、経営学の専門用語で「目標による管理」を指します。これは、経営学部の学生なら誰もが知っている、私の尊敬するピーター・ドラッカーが提唱した概念で、組織のマネジメント手法の一つです。個々の担当者が自身の業務目標を設定し、その進捗や実行を自ら管理することを意味します。

私が所属するグローバルマーケティングを学ぶゼミでは、ゼミを

一つの社会組織と見なして、「MBOs」を導入し、日々の活動に取り組んでいます。

ゼミで「MBOs」を導入する目的は、ゼミ生が仲間任せにせず、自らゼミ（組織）に貢献する目標を持ち、主体的に活動に参加することにあります。また、互いの目標を把握し合うことで、お互いに刺激し合いながら理想的な組織を目指しています。年度末には各自が目標の達成度を発表し、目標に対する責任感を持つようにしています。さらに、目標達成度や測定期間を明確にして、正確に管理することも重要です。

さて、ここからは私が設定した「MBOs」についてお話しします。私の「MBOs」は次の四つです。

一つ目は、視野を広げることです。

私が所属しているゼミでは、冒頭で触れたように海外の企業を中心に日本の企業と比較して学んでいくゼミです。しかしこれから二年半かけて海外の企業を学ぶ前に、国内の状況や外国企業以外の側面、例えば文化や環境についても理解する必要があると考えました。

そのために、国内の状況を把握するために「明治大学鳥取派遣プログラム」、外国企業以外の側面を知るために「美しい海を未来へ残そう！～PIG EGGプロジェクト in バリ島～」に参加することを決意しました。これらのプログラムを通じて視野を広げたいと思います。

目標達成度は、これらのプログラムに加えて他に三つのプログラムを設定し、合計五つのプログラムに参加できたかどうかで評価します。また、各プログラムにおいて実施、まとめ、情報発信の流れができたかをパーセントに換算し、達成度に含めます。

二つ目は、多くの人と積極的に関わることです。

大学生のうちに、多くの人と出会い、さまざまなことを学びたいと考えています。私のゼミは設立して三年目で、一期生が今年卒業します。まずは卒業する前に一期生十九人から話を聞き、最終的には社会人とも直接アポイントを取るという流れで、徐々にハードルを上げて来年の就職活動に役立てます。

目標達成度は、月四人に設定し、アポイントを取る・質問を作成する・会う・まとめるという流れができたかをパーセントに換算して評価します。

三つ目は、移動時間の有効活用です。

私は大学へ通う際に大森駅を利用しており、最寄りの大森駅から大学まで片道二十分ほどの乗車時間があります。週五日通うと、一週間で約二百分、つまり三時間二十分を電車で過ごすことになります。この時間を有効活用するために、秋学期からは講義動画の視聴や課題に取り組む時間に充てていきます。

目標達成度は、乗車時間中に勉強できた時間を計測期間中の乗車時間で割り、その割合が八十％に達したかどうかで評価します。

四つ目は、スケジュール管理の徹底です。

私は複数のサークルやアルバイトを掛け持ちしており、家で過ごす時間より外で過ごす時間が多いほど忙しい日々を送っています。

ゼミの活動も加わり、スケジュール管理が一層重要になると考えています。インターネットが普及し、スマートフォンでスケジュール管理ができる時代ですが、私はあえてノートを使って管理したいと思っています。これは、スケジュール管理に加え、日々の出来事を日記として記録し、自己の振り返りやモチベーションの維持に役立てたいからです。

目標達成度は、三つ目と同様に、パーセントを算出し、その達成度が八十％に達しているかを基準にします。

以上の四つの「MBOs」を達成することで、残りの大学生活二年半をゼミに捧げ、グローバルマーケティングのプロフェッショナルを目指していきます。

最後に、私が学生生活の大半を費やしているゼミ活動について、より多くの方に知っていただけたら嬉しいです。上記の内容に少しでも興味を持っていただけた方は、ぜひ「古川ゼミナール」で検索してみてください。ブログを読んでいただけることが、私たちの大きな励みになります。私たちの研究成果や活動記録をぜひご覧いただければと思います。

寮生活と岩陽学舎での一人暮らし

昭和大学　薬学部　二年
妹尾　晏奈

一人暮らしを始めるということは、人生において大きな転機となります。特に、寮生活からの移行は、生活の環境が劇的に変化するため、それに伴って多くのことを学び、新たな感情や発見が生まれます。私は昨年の一年間、山梨県の富士吉田市で四人部屋での寮生活を経験していましたが、一人暮らしを始めたことで、自分自身の生活における様々な側面に目を向ける機会を得ました。そのため、私が一人暮らしを通じて学んだこと、そして昨年の四人部屋での寮生活との違いについて述べたいと思います。

寮生活では、複数の人と生活空間を共有するため、自然と決められたリズムで生活を送っていました。特に朝や夜の時間は、同じ寮の人たちと洗面所やシャワーを共有するため、スケジュールが限られていました。また、食事も寮の食堂で決まった時間に提供されるため、食事時間も自動的に決まっていました。このような決められたリズムの中で生活することで、ある種の規律が自然と身についていました。一方で、一人暮らしを始めると、生活リズムは完全に自由になります。食事の時間、シャワーのタイミング、就寝時間など、すべてが自分次第です。この自由さは、一見すると非常に魅力的です。しかし、同時に自己管理の難しさを実感することにもなりました。寮生活で強制的に維持されていた規律がなくなることで、

当初は夜更かしが増えたり、食事が不規則になったりしました。しかし、これらの経験を通じて、自分に最適な生活リズムを模索し、最終的には自分に合ったリズムを見つけることができました。今では、健康的な生活を維持するために、計画的に時間を使うことの重要性を理解しました。

次に、寮生活ではプライバシーが非常に限られています。ルームメイトと部屋を共有することで、常に誰かが近くにいる状態が続き、自分だけの空間や時間を持つことが難しい場面が多くありました。例えば、勉強やリラックスの時間を確保することが難しかったり、音楽を聴いたり、お菓子を食べたりする際も周囲を気にする必要がありました。このような状況では、自分の感情や考えを内省する時間が限られ、常に他者との関わりを優先せざるを得ない面がありました。一人暮らしでは、完全に自分だけの空間を持つことができます。自分の好きな時に好きなことをできるということは、初めての感覚でもありました。この自由を得たことで、私は自分の内面と向き合う時間を増やすことができました。自分の感情を整理し、考えを深めることで、自己理解が深まったと感じています。また、自分だけの時間を持つことが、精神的な安定感をもたらしてくれることにも気づきました。プライバシーの確保が重要であることを実感したのは、寮生活を経て一人暮らしを始めたからだと考えます。そして寮生活のときは、食事や光熱費は初期費用としてもともと払っていたため、生活費の管理が比較的簡単でしたが、一人暮らしになると、食費や水道光熱費、日用品など、すべての費用を自分で管理しなければなりません。この変化は、経済的な自立を強く意識させるものでした。そのため数字が目に見える形にした方がいいと考え、家計簿をつけ始めました。これにより、生活に必要なものと、単なる欲しいものを明確に区別する力がついてきました。また、節約するために外食を控え、できるだけ自炊やお弁当作りをするようになりました。そして、突然の出費にも対応できるように、計画的に貯金をすることの重要性も理解しました。さらに、自分の知らない世界を知るためにもいい経験になると思い、アルバイトも始め、貯蓄だけではなく、自分のためになる経験をするための資金として働いたお金を利用しています。一人暮らしは経済的な自立を促し、自分自身の生活を管理する責任感を育む大きなきっかけとなりました。

一人暮らしでは、すべての生活を自分で管理する必要があります。寮生活では、掃除や洗濯、食事の準備などにおいて、他の住人や寮のスタッフが一定のサポートを提供してくれます。しかし、一人暮らしではそれがありません。すべての家事を自分でこなさなければならないため、自己管理能力が問われます。最初は、家事や生活のスケジュール管理に苦労しましたが、次第に効率的にこなせるようになりました。これにより、自分の生活をより計画的に管理する力がつきました。自己管理能力が向上することで、生活全体がスムーズになり、ストレスも減少しました。また、自分の得意分野や苦手な部分を見極め、どうすればそれらを改善できるかを考えるようになりました。このプロセスを通じて、自己成長を実感すること

ができたと思います。

一人暮らしの最大の課題の一つは、孤独感とどう向き合うかということです。寮生活では、常に誰かがそばにいるため、寂しさを感じることは少なく、仲間とのコミュニケーションが日常の一部として自然に行われていました。しかし、一人暮らしになると、帰宅しても誰もいない部屋に一人で過ごす時間が増えます。この孤独感に対処するには、意識的な努力が必要です。ですが、学舎の先輩方が頻繁に声をかけてくださり、ご飯や遊びに行くことであまり深い孤独感を感じずに楽しく一人暮らしをスタートすることができました。また、友人や家族との連絡を頻繁に取り、コミュニケーションを大切にすることで、孤独感を和らげることができました。孤独と向き合うことで、他者との繋がりの大切さを改めて実感しました。

一人暮らしを始めたことで、四人部屋での寮生活とは異なる多くのことを学びました。生活リズムの自由さ、プライバシーの確保、経済的な自立、自己管理能力の向上など、一人暮らしには多くの利点があります。その一方で、孤独と向き合うことの難しさも経験しましたが、岩陽学舎に入舎したことで、同じ地元の人がいる安心感や先輩方との関わりにより、深い孤独感を感じることなく新しい環境での生活をスタートすることができました。また、一人暮らしを始めたことで実家での不自由ない生活を送れていたことへのありがたみを感じ、日々の家事などを円滑に行っている両親への感謝と尊敬の気持ちが芽生えました。これらの経験は私にとって非常に貴重なものであり、自己成長を遂げるための大きな一歩になったと感じます。寮生活で培った仲間との繋がりやサポートの重要性を再認識しつつも、一人暮らしを通じて得た自立心や自己管理能力は、今後の人生においても大いに役立つと考えます。

大学一年生の半分を振り返って

東京科学大学　工学院　一年
上野　佑記

東京に来てから、五か月近く経ちました。大学での授業にも東京での生活にもすっかり慣れ、山口での生活がどのようなものだったかを忘れてしまうほどです。両親とは週に一回ほど電話で連絡を取り合っていますが、その間隔がだんだんと長くなり、怒られています。

大学では、最初は同じユニットの人たちと一緒に過ごそうとしていましたが、七、八人で行動することが多く、どうしても会話に入れず、ただ後ろをついて歩くだけになることが多かったです。それが自分にとっては結構ストレスになり、次第に一人で過ごすことが増えていきました。

その後、一人でも特に不便を感じなかったので、このままでもいいかなと思っていたのですが、ある日の線形代数の演習で、答えが

合っているか確認したくて、思い切って隣の知らない人に話しかけてみました。すると、意外にも会話が弾みました。それからというもの、その人と顔を合わせる機会が増え（おそらくお互い後ろの席に座ることが多かったため）、いつの間にか毎日一緒に昼ご飯を食べるほどの友達になりました。

その後、何度か話すうちに、彼が中国からの留学生だと知り、驚きました。振り返ってみれば、確かに一文一文が短めだった気もしますが、それまで普通に会話していても全く気づきませんでした。むしろ、会話のペースがゆっくりで、とても話しやすかったです。彼は日本に来てまだ一年も経っていないそうですが、日本のアニメを見ているうちに自然と日本語を覚えたと言っていました。自分は六年以上も英語を学んでいるのに全く話せないので、趣味を通じて言語を学ぶ方法がこんなにも効果的だとは驚きです。（ちなみに、彼も英語はあまり得意ではないそうです。）

大学の授業は一コマが百分ぐらいあり、内容が濃く、量も多いので、集中力が続くか不安でした。しかし、実際に授業が始まってみると、内容がとても新鮮で興味深く、自然と引き込まれていきました。教授の話すトピックはこれまで知らなかったことばかりで、新しい知識を得る楽しさを実感しています。特に今まで全く興味のなかった生命の授業が、生命が導き出したもっとも最適化された構造が、自分では想像がつかないようなものであることに驚きの連続で、しかも計算式がほとんど出てこないので脳死で聞くことができ、とても楽しいです。

一方で、理解が追いつかないと感じることも増えてきました。特に、数学や物理の授業は、授業中にすべてを理解するのが難しく、焦ることもありましたが、あとで教科書を見返して自分で問題を解いてみると、少しずつ理解が深まっていきました。また、教科書の問題や先生の出した問題は答えしか載っていないことが多いので、テストの前には、同じユニットの人たちと問題を解きあって議論することもありました。これはとても楽しく、一緒に勉強することで、自然と仲間との絆も深まったような気がします。

大学では、デジタル創作同好会「traP」というサークルに入りました。traPには、以下の七つの班があります。

・アルゴリズム班（競技プログラミング）
・グラフィック班（イラスト・ロゴなどの制作）
・ゲーム班（ゲーム制作）
・サウンド班（音楽・効果音の制作）
・ＣＴＦ班（ＣＴＦ競技）
・SysAd班（部内インフラの制作・管理・運用）
・Kaggle班（データ分析）

最近の私は、主にＣＴＦ関連の勉強に取り組んでいます。ＣＴＦ競技とは、情報セキュリティの知識を使って隠された文字列（Flag）を見つけ出す競技で、さまざまなジャンルの問題が出題されます。例えば、Crypto（暗号）、Forensics（ファイル解析）、Pwn（実行ファイルへの攻撃）、Reversing（実行ファイルの解析）、Ｗｅｂ（Ｗｅｂサービスへの攻撃）、Misc（その他、雑多な問題）などがありま

す。

せっかくなので、Ｗｅｂ分野で使われる攻撃手法の一つ、ＳＱＬインジェクションについて紹介します。ＳＱＬインジェクションとは、データベースを操作する際に使うＳＱＬというプログラムを悪用して、アプリケーションに不正な操作をさせる攻撃手法です。例えば、

sql = "select k,v from kv where k like '%" + key + "%';"

というＳＱＬ文があったとします。このとき、パラメーター key に

' union select 1,data from secrets;#と入力すると、

sql = "select k,v from kv where k like '%' union select 1,data from secrets;"

という文が組み立てられ、secrets テーブル内のデータを表示することができます。

まだＣＴＦの勉強を始めたばかりで、問題をみても何をしてほしいのかすら分からないようなことも多いですが、少しずつ知識と経験を積んでいきたいです。

最後に、私は、大学生になってから決めたことが二つあります。

一つ目は、放課後に図書館で課題をやったり復習をしたりすることです。なぜなら、自分が強制された環境でないと全く集中ができないということに、受験勉強の時にいやというほど気づかされたからです。高校三年生になって、勉強は塾か徳山駅前図書館の自習室ですると決めてから、何とか自分で勉強できるようになった気がします。暗くなってから東工大のキャンパスを見渡してみると、ライトアップされてとてもきれいです。この景色は、日が暮れるまで頑張った人の特権です。

二つ目は、一日の計画を立てることです。特に、起きる時間を決め、それに合わせて寝る時間を前もって決めておかないと、寝るタイミングを逃してしまい、気づいたら外が明るくなっていた、なんてことにもなりかねません。これは冗談ではなく本当で、何もしないと三日に一回ぐらい徹夜する生活が普通になってしまいます。

また、計画を立てることで優先順位を明確にすることができます。やりたいことややるべきことがたくさんある中で、自分はどうしても楽なことからやってしまいます。そのため、何をいつまでにやらなければいけないかをリストアップし、取り組むようにしています。もちろん、怠惰な自分ですから計画通りに進まない日のほうが多いですが、それでも大まかなスケジュールを立てておくことで、明日何を修正すればいいかが分かります。

すでに一年生のうちの半分が過ぎたわけですが、あっという間でした。この調子で二年、三年、四年と過ぎていくのなら、これからの大学生活も、きっと同じようにあっという間に過ぎてしまうだろうなと感じています。そのため、今この瞬間を大切にして、できるだけ多くのことを経験し、学びたいと思います。

都市部と地方におけるエンタメの規模の違いについて

明治大学　政治経済学部地域行政学科　一年
江﨑　光賀

はじめに

私は将来、アニメのプロデューサーになりたいと考えている。その夢を叶えるために、私は上京してきた。後々詳しく述べたいと思うが、現在アニメの制作会社はその多くが東京に位置し、地方にある数少ない制作会社も東京に一つは支社を置いているという状態だ。このような現状から、アニメにかかわるためには上京するという選択肢一択であることは明確であった。しかし、想像と実際の「東京でエンタメ業界にかかわること」は大きく異なることに気づいた。今回東京で実際に暮らし始めて気づいたのは、東京におけるエンタメには三つの「優位性」があるということだ。今回はその三つの「優位性」やその他のアニメ業界に関することについて触れていきたいと思う。

一　人脈

東京でエンタメ業界に触れる上で、まず初めに驚いたのは、人脈の多さ、多彩さである。例えば、先日私の大学でとある特別講義が開かれた。その講義は少し特殊で、単位が出ないいわば「講演会」のようなものを週一回、全七回に分けて行うというものであった。私は当然その講義に参加したのだが、なんとその講義の講師がブシロードムーブ取締役にして現役のアニメプロデューサーである大貫祐介さんであった。なぜ大貫さんがこの講義を引き受けたかというと、実は大貫さんは私の大学の卒業生であり、話が来たとき快く引き受けたという経緯があるそうだ。東京に来て実に一カ月もたたないうちに、地元では絶対に会うことができない方の話を直接聞くという貴重な経験ができたのである。実際、この講義では、アニメ業界に関する多くのことを学ぶことができた。大貫さんの話は業界人ということもあって、ネットのサイトや本の情報では到底入手できないような話も多くあり、毎講義驚かされるような話ばかりであった。特に私が驚いた話が、アニメプロデューサーになる方法であった。それまでも私は当然、アニメプロデューサーになる方法について、数々の専門書やサイトの情報などから集めており、知り尽くしているつもりであった。アニメプロデューサーになるためには、特殊な例を除くと、まず初めにアニメの制作会社に入社し、制作進行という役職から制作デスク、プロデューサーとキャリアアップしていく方法が一般的である。しかし大貫さんは、広告会社からプロデューサーになっており、この方法は私が調べたどの資料にも載っていなかった。その話の後も大貫さんは、プロデューサーには広告、宣伝、制作など多くの種類のプロデューサーがいることなどを話してくださった。また、講義が終わった後も、食事会が開かれて講義では聞くことができなかった話も聞くことができた。このほかにも、バイトやサークル、大学内の友人など、多くの人と知り合うきっかけがあり、東京という大都市ならではの人脈の広げ方に自分でも驚愕し続けている。もちろん、この岩陽学舎でも人脈というも

のをとても強く感じた。私が入舎してからの数カ月は、三、四年生の先輩方の就活の時期でもあり、エンタメ業界の現在の就活状況について詳しく聞くこともできた。こう言った経験を増やし、これからもこのような人脈を今以上に広げていきたいと思う。

二　イベント

一つ目の「人脈」はどちらかというと制作側から見た優位性だが、二つ目にあげる「イベント」については、需要側（お客さん目線）から見た優位性である。ここでも例を一つ上げると、イベント開催場所とその情報源に関するものがある。私は普段から様々なサイトや公式ＳＮＳなどをチェックしているのだが、その開催場所のほとんどを占めるのが東京をはじめとした大都市なのである。多くのアニメイベントは東京、大阪、名古屋で三大都市イベントのような形態をとる。ここで注目してほしいのが、福岡や広島などの準都市的立ち位置の地区が入っていないことである。つまり、ただ純粋に人が多いだけでなく、その都市自体が圧倒的知名度や大都市として確固たる地域でなければ、アニメイベントが開催される頻度は少なくなるのである。ただし、ここ数年はアニメ自体の爆発的人気と需要によって、広島や福岡、新潟、札幌を含めた六、七大都市イベントのような形も増えつつあり、現在の大都市集中型がどの程度変化するのかは定かではないといった点もある。実際、私は東京に来てから、アニメの個展を四つほど回った。地元とは違い、少ない交通費で授業終わりなど気軽にいくことができるというのは、需要側にとって理想的なものではないだろうか。次に、情報源というのは、どのアニメがどのようなイベントを開催するのかを告知するときの方法や規模についてだ。ドラマやバラエティ番組のコラボイベント等は、テレビＣＭや新聞、街頭広告が活発なものも多いが、アニメのイベントがそのような広告形態をとることは非常に少ない。ではアニメの制作会社はどのように情報を発信するのか。もっとも代表的なのが、Ｘ（旧 Twitter）やインスタグラムなどのＳＮＳでの告知である。現在放送されているアニメのほとんどすべてが、何らかの形で公式のＳＮＳアカウントを運営している。その中で、イベント開催時の告知を行っている。また、最近では、アニメの公式アカウントとは別に、イベントとしての公式ＳＮＳアカウントを立ち上げるといったことが多くなっている。その理由として考えられるのが、イベントの継続性が高くなってきたことだ。例えば、人気アニメの一つである「転生したらスライムだった件」の個展では、全国展開した後、第二弾として再び展示会を行った。もちろんその際の展示物などはすべて新規のものになっており、運営の力の入れ具合がうかがえる。テレビアニメの多くが二期や三期というように続編を次々と公開している今だからこそ、このようなイベントの継続性が生まれつつあるのだろう。こうしたＳＮＳでの広告・宣伝については、話題性が生まれるといったメリットもある一方、大きなデメリットが存在する。それは、エコーチェンバー現象とフィルターバブル現象による弊害だ。エコーチェンバー現象とは、主にＳＮＳにおいて、自分と似た興味関心を持つユーザーをフォローすることで、意見を発信すると自分と似た意見ばかりが返ってくる状況を指

す。また、フィルターバブル現象とは、「インターネットの検索サイトが提供するアルゴリズムが、そのユーザーが見たくない、または興味がない情報を遮断する機能」のために、自分が見たい情報以外が入ってこなくなる、または極端に情報が偏るという現象だ。この二つの現象が、ＳＮＳでの宣伝を難しくしている。私は先日とあるアニメのコラボカフェに行ったのだが、そのアニメがマイナーだったこともあり、アニメイベントの有名まとめサイトでも取り上げられていなかった。しかし、私はその作品の原作者をフォローしていたため、開催情報を知ることができたのである。このような状況から、ネット等の情報だけではカバーすることが非常に難しいのだが、このような事態を避ける方法が一つだけ存在する。それが、現地での情報収集だ。実際、私が言ったコラボカフェの通りでは大規模な告知が行われており、現地に住んでいれば情報を得ることはたやすかっただろう。こうした背景から、開催地である東京の圧倒的な優位性はゆるぎないものであることがわかる。

三　機会

三つ目の優位性は、機会の多さである。冒頭で軽く触れたが、現在のアニメ制作会社の実に八十％以上が東京に本社を構えている。この時点で、アニメ業界への就活において東京が圧倒的な一強状態であることがわかる。それに加え、先ほど述べた二つの優位性も大きくまとめると機会の多さに関係してくるため、非常に力を持った優位性であるとわかる。しかし、機会の多さがそのままいい方向に直結するわけではない。人脈の優位性の例では、そもそも講義に参加しなかったら大貫さんと話をする機会も得ることができなかった。つまり、大切なのは機会の多さを有効的に使うための積極性であるということだ。

最後に

私はこの数カ月で多くの経験をし、アニメ業界について知ることができた。しかしこれは氷山の一角でしかないのだろう。これからも多くもことに気づきや発見をし、夢に手が届くよう努力していきたい。

将来の進路

上智大学　総合人間科学部心理学科　一年
河村　七恵

『人生で大切なのは速度ではなく、方向である』

これは私の座右の銘である。大学生になり四ヶ月が経過したが、月日の流れが早いのとは対極に、私自身の歩みはとてもゆっくりである。慣れない環境に適応していく過程でうまくいかないことも多くあり、焦ることも多くあった。しかし、その度に進む方向さえ間違えなければ大丈夫だと自分に言いきかせてきた。

「ところで、自分の進みたい方向とはどこなのだろう」そんな問

いが浮かんできたので、初めての舎誌では私の目指す将来像について書いてみようと思う。

現在、私は心理学科に所属している。この学科を選んだのは、国家資格である公認心理師の資格を取り将来は心理士として働きたいと思っているからである。心理士の活躍分野は主に三つで医療、教育、司法と多岐にわたるが、私はその中でも医療現場、司法現場において自らの学びを深めたいと考えている。

まず、医療現場において心理士は精神科や小児科、外科まで幅広く活動している。精神疾患や発達障害の子供への支援、カウンセリングがよく知られているが、他にも末期癌の患者へのターミナルケア、長期入院をしている子ども、その保護者との面談なども行っている。

その中でも私が関心を持っているのが近年増加している摂食障害の青年への治療である。摂食障害は一般的に、「ご飯を食べられなくなる病気」だと思われていることが多い。しかし、この障害は食事そのものに留まらず、深層にある心理的要因によって引き起こされることが多く、その解決には熟練した心理的アプローチが求められる。例えば、食欲不振の背後には過去のトラウマや自己肯定感の低さが潜んでいる場合があり、これらを理解し、適切なサポートを提供することが重要である。

また、末期癌の患者、その家族に対するカウンセリングでは、その患者の心の奥深くにまで気を遣わなければならない。そのためには、友好な人間関係と専門知識が不可欠である。心理士としてだけではなく、一人の人として信頼してもらわなければ、死と向き合うときに本音で話していただくことは不可能であるからである。この業務を通して、患者とその家族が希望を持って生きられるようなケアを行いたい。

次に、司法現場では少年院と裁判所という二つのフィールドで活動している。

少年院では、少年の更生やカウンセリングに携わっており、非行行動の根本にある家庭環境の問題や精神疾患などを検査し、その少年が更生に向かうための道筋を提案する。現在、私は「少年友の会」という団体に所属しボランティア活動をおこなっている。その団体では実際に非行少年と話す機会があるのだが、どの子も話してみると意外と「普通」の少年である。何を「普通」とするかという議論も起こりそうであるが。

世論では少年の凶悪犯罪が増えていると言われているが、実際にデータを見てみるとそれは誤りであることがわかる。「最近の若者は・・・」という言葉もよく耳にするが、そのようなラベル貼りが少年犯罪を引き起こすこともある。実際に少年に話を聞くと「頑張ってもどうせ大人は認めてくれないから。理由を話しても『若者』という括りでしか対応してくれず、一人の人間として理解してくれないから」という言葉が出てくる。ニュースだけを見て非行少年を批判することは簡単であるが、彼らを理解しようと見守ることも必要なのではないか。基本的に私は性善説に共感するため、どのような非行少年にも過程環境や人間関係など、犯罪行為に結びつく

理由があるのではと考える。更生しようとする機会を与え、更生しようとする動機を促すために、私はあなたの味方であるということができる心理士が必要なのだと思う。

また、裁判所においては犯罪を犯した被告人の精神鑑定も行なっている。精神疾患や発達障害が被告人の行動に影響を与えている場合、その責任能力の有無は重大な法的意味を持つ。この分野に関しては最近読んだある裁判の判決文が印象に残っている。この事件は、ある統合失調症を患っている男性が、父親の自殺をきっかけに「近隣住民のA一家とB一家は自分達を攻撃する工作員であるという妄想を抱き、彼らに対する報復をしなければならない」と考え、それぞれ殺意を持って殺害したというものであった。裁判ではこの被告の責任能力について議論が行われた。裁判官が出した結論は、「殺害を計画した動機は妄想によるものであるが、殺害という行為自体は殺意を持って自分の意志で行っているものである。そのため、被告人は責任能力を持っていたといえるため無期懲役に課す」というものだった。

近年、多くの事件で「責任能力」という言葉を耳にする気がする。発達障害や精神疾患が世の中の表に出てくるようになり、世論の中で議論されるようになったからだろうと考える。今回の事件では有罪判決となったが、責任能力の損失によって不起訴になると、その後の進路は大きく三つあるが主には精神科の閉鎖病棟に約十八ヶ月間、強制入院する。その後も少なくとも三年、平均的には五年間の通院が必要で、その期間も社会復帰調整官という方々が付き添って、社会復帰に向けて細かくサポートしていく。

この時、精神症状を出している患者は罪を償う機会を失うことになる。それは、なぜだろう、誰のためになるのだろうか。現在の私の考えは、人間が人間たる理由に起因しているのではないかというものだ。脳死問題からもわかるように、現代の社会の中で「生きている」という状態の判断の基準となるのは「知的能力」である。そのため、責任を取る能力を持ち合わせていない精神病患者や未成年者は、「治療」や「教育」が重要視されるのだろう。

刑務所において更生が行われる目標は、一）社会からの隔離、二）矯正教育、三）社会復帰のための訓練であり、再犯を防ぎ社会に適応するためであるといえる。そこで、実際の調査結果を見てみると、精神障害者の再犯率は九・四％であったのに対し、同じ期間内での一般犯罪者の再犯率は三十四・六％であった。このことから、更生の機会を失うことで再犯につながることは少ないことがわかる。一般的には、被害者やその家族の感情を落ち着かせるために罰があり、その人たちへの謝罪として罪を償うのだという印象が強いのではないだろうか。その理論に従えば、精神障害者を責任能力の有無によって罰しないことは社会規範に反することになるのだろうが、実際の目的を考えると強制入院という手段でも十分にその目的を満たしているのではないだろうか。私は個人的には、非行少年は罪を償う更生の機会が与えられるのに、責任能力損失者はその機会がないことには納得ができないので、今後の学生生活の中で考えていきたい。

秋学期からは専門分野の授業も増えてくる。私は心理学を学びながら、どれだけ多くの心理学の知識を持っていても、その人がカウンセラーとして優れているとは判断できないと考えるようになった。最も大切なのは、人間性であり、人の痛みを感じ、理解しようとする姿勢や思いやりを持っていることだと私は考える。自分の将来の選択肢を広げていくために、いろいろと寄り道をしながら自分のペースで充実した大学生活を送りたい。

夏休みを半分終えてみた感想

早稲田大学　創造理工学部　一年
北川　創大

私の通う大学は、七月二十一日から十月三日まで授業がありません。夏休みは本当はもう少し短いですが、この期間が実質的な私の夏休みとなります。高校時代には考えられなかった二か月と少しの夏休みですが、あっという間に半分が過ぎてしまいました。この文章では、夏休みに何をしたのか、そして残りの夏休みに何をする予定かを書こう思います。

まず、夏休みが始まってからの最初の一週間は、できるだけ多くのバイトのシフトを入れました。現在、私はプログラミングや電子工作や、それを制御する作業を含むバイトをしていますが、まだ研修中の段階です。バイトを始めた当初は、まったくの初心者であったため、研修を通して少しずつ技術を身につけています。この夏休みの間に技術を磨き、できるだけ早く通常の業務に参加できるようにしたいという思いが強かったため、最初の一週間はバイトに集中しました。

特に、七月二十七日から一週間程度帰省する予定が既にあったため、それまでに研修を少しでも進めたいという気持ちがありました。そのため、通常よりも多くのシフトを入れ、電子工作やプログラミングに触れる時間を増やしました。その結果、技術も少し向上したと感じています。バイト先では、電子工作の知識を深める機会が多く、もともと趣味で行っていた電子工作で作れるものが増えました。新たに得た知識を活かして、自分でさまざまなものを作れるようになり、その点では非常に充実した日々を過ごしています。

七月二十七日から八月五日までの間、帰省していました。私の地元は山口県光市室積という場所で、久しぶりに戻ってみると、その空気がとてもおいしいと感じました。都会の喧騒から離れ、自然に囲まれた環境で、何もせずにただ椅子に座って過ごす時間は、何にもとらわれていない感じがして平和そのものでした。家に置いてある漫画を読んだり、実家にあるお菓子をつまんだりと、特に何もせずに過ごしました。実家には、私が好きなドラえもんの漫画があり、久しぶりに読んでみると、やはりとてもおもしろかったです。こうして、何もしない時間を過ごし、気づけば八月に入っていました。

八月五日に帰省から戻ってからは、すぐにバイトを再開しました。また、少しずつサークルの活動にも顔を出すようにしました。これまで、あまりサークルの行事に参加していなかったため、私の顔を知らない先輩や同級生も多くいました。夏休み前にもっと積極的にサークルに参加しておけばよかったと感じました。八月に入ってからは、バイトの研修も順調に進み、ついに研修の終わりが見え、通常の業務にも少しだけですが、参加させていただけるようになりました。バイト先の先輩とも少しずつ話す機会が増え、さまざまな面白い情報を得ることができるようになりました。

また、最近では、はんだごてや電子部品を購入し、バイトで得た知識を活かして、再び電子工作に取り組むようになりました。以前行っていた電子工作と比べて、作れるものの幅が広がったことを実感しています。例えば、欲しいものがあったとき、すぐに購入するのではなく、自分で作ってみようという新しい選択肢が誕生しました。その結果、家の中での時間の楽しみが増え、趣味としての充実感も感じています。

さらに、最近は時間に余裕ができたことから、料理にも挑戦し始めました。これまで、料理といえば、中学校の家庭科の授業で作った料理か、唯一まともに作れるカレー、もしくはカップ麺にお湯を入れるという三択しかありませんでした。最近レシピ本を購入し、さまざまな料理に挑戦しています。料理には時間がかかりますし、食器を洗うのは正直言って面倒ですが、自分の好きなものを好きなだけ食べられることは非常に満足感があります。

また、大学の同級生が単発のアルバイトをしているという話を聞いて興味を持ち、私も八月二十日に単発のアルバイトを経験してみました。朝三時から八時まで、ヤマト運輸での仕分けのバイトをしてみました。私は少しずぼらな性格で、午後三時から八時と勘違いして応募してしまい、結果的に終電後の二時間半ほどを不審者のようにヤマト運輸の周りをスマホ片手に徘徊することになってしまいました。深夜のバイトが始まる前にすでに疲れてしまったのですが、冷房の効いた倉庫での作業だったため、涼しく快適に働くことができました。思った以上に力仕事が楽しかったのは新しい発見でした。バイトが終わった後、バイト先で仲良くなった方と一緒に牛丼を食べに行きました。肉体労働の後の牛丼は格別に美味しく感じました。しかし人生初の徹夜だったためかなり疲れ、体内時計も狂いました。そこだけは少し後悔しています。

この夏休みで一つの問題として感じているのは、料理を始めて食事の量が増えたにもかかわらず、ほとんど運動をしていないことです。その結果、体重が百キロの大台に乗ってしまいました。ここまで体重が増えると、靴下を履くときにお腹の膨らんだ部分が邪魔になり、少し苦労するようになりました。また、階段を上るのも一苦労で、体が重く感じるようになっています。そのため、これからの夏休みの後半では、運動にもっと力を入れようと考えています。まだ具体的な行動には移していませんが、ジムに通ったり、日常的に運動を取り入れたりして少しでも痩せようと思っています。

さらに、今まで夏休み中は勉強にもあまり力を入れていませんで

した。前期はまだ内容が簡単でなんとか耐えているのですが、特に数学ではまだ理解が不十分な部分があり、英語ももともと得意ではないため、後期の授業がどうなるか少し不安です。九月は勉強や運動にもっと時間を割き、バランスの取れた生活を送ろうと思います。

この夏休み、実家に帰省した以外では、東京から一歩も外に出ていません。基本的には、バイト先の秋葉原、大学の最寄り駅である高田馬場、そして住んでいる学生寮の最寄り駅である大森の三か所を行き来しているだけです。しかし、夏休み後半には友人と京都や大阪に旅行に行く予定があり、それを楽しみにしています。

日本の教育現場に関するレポート

上智大学　総合人間科学部教育学科　一年
野村　宗一郎

序論

日本の教育システムは、世界的に高い評価を受けている一方で、さまざまな課題を抱えている。日本の教育は、伝統的な価値観を重視しながらも、近年ではグローバル化や情報化の進展に対応するための改革が求められている。本レポートでは、日本の教育現場における現状と課題、そして今後の展望について具体例を交えながら論じる。

一．日本の教育制度の特徴

日本の教育システムは、義務教育として小学校六年間と中学校三年間を基本とし、その後、高等学校や専門学校、大学への進学が一般的である。このシステムは、戦後の教育基本法のもとで整備され、基本的には全国共通のカリキュラムが導入されている。この共通カリキュラムにより、日本全体で均質な教育が提供され、一定の学力水準が保たれている。

二．教育現場における現状

二・一　画一的な教育

日本の教育は、全国共通のカリキュラムを用いることで、全国的に均質な教育を提供しているが、その反面、画一的な教育が行われる傾向が強い。例えば、全ての生徒が同じ教科書を用い、同じ授業を受けることで、個々の生徒の興味や能力に応じた学びが十分に提供されていないという批判がある。このため、個性や創造性を育む教育が不足しているとされる。具体的には、美術や音楽といった創造性を発揮する科目が、受験科目に含まれないために軽視されがちであることが問題となっている。

二・二　詰め込み教育と受験競争

日本の教育現場では、特に中学・高校の受験に向けた詰め込み教育が強調される。生徒たちは、難関校への進学を目指し、膨大な量の学習内容を短期間で習得することが求められている。例えば、有

名私立中学校や高校への進学を目指す生徒たちは、学校外での塾や予備校に通い、夜遅くまで勉強に追われる生活を送ることが一般的である。このような教育の在り方は、学力向上には効果的である一方で、生徒の学習意欲を削ぎ、ストレスや精神的な負担を増大させる原因となっている。結果として、学業成績は優秀でも、実生活で必要とされる批判的思考力や創造力が十分に育まれないという問題が生じている。

二・三　教員の過重労働

日本の教育現場では、教員の過重労働が深刻な問題となっている。教員は、授業だけでなく、部活動の指導や学校行事の運営、さらには保護者対応や事務作業など、多岐にわたる業務を担っている。具体的には、部活動の顧問として平日の放課後や週末に練習や試合に参加する教員が多く、休息時間がほとんど取れない状況にある。このような状況は、教員の健康を害し、結果として教育の質にも悪影響を及ぼしている。また、過労が原因で教職を離れる教員も増加しており、教員不足の問題も深刻化している。

二・四　教育格差の拡大

日本の教育において、地域間や学校間での教育の質に格差があることが指摘されている。特に都市部と地方部、公立学校と私立学校の間で教育資源や教員の質に違いがあり、それが学力格差を生む原因となっている。具体的には、東京や大阪といった大都市圏では、教育資源が豊富であり、優秀な教員が集まりやすい反面、地方の過疎地域では、教員不足や学校設備の老朽化が問題となっている。また、私立学校は高い授業料を背景に、最新の設備や優秀な教員を確保することができるが、公立学校は限られた予算の中で運営されているため、同じ水準の教育を提供することが難しい状況にある。

二・五　いじめと不登校の問題

いじめや不登校は、日本の教育現場における重大な社会問題である。いじめが原因で精神的・身体的に追い詰められる生徒が後を絶たず、最悪の場合、自殺に至るケースも報告されている。例えば、近年の報道では、ＳＮＳを通じたいじめがエスカレートし、学校での問題が家庭にも持ち込まれることが問題視されている。また、不登校の問題も深刻であり、文部科学省の統計によれば、年間で不登校の生徒数は増加傾向にある。不登校の原因としては、学業不振、友人関係のトラブル、家庭内の問題などが挙げられ、学校に行きたくても行けない生徒が増加している。これらの問題は、学校全体の学習環境を悪化させるだけでなく、被害生徒の将来にも深刻な影響を及ぼす。

二・六　グローバル化への対応

日本の教育は、グローバル化の進展に対応するために、外国語教育や異文化理解の促進が求められている。しかし、現状では、英語教育がまだ十分ではなく、多くの生徒が英語を「試験のための科目」として捉えている。例えば、高校生の英語学力を測るために行われる「全国学力・学習状況調査」では、多くの生徒が実用的な英語力に乏しいことが示されている。また、国際的な視野を養うためのプログラムや海外留学の機会も限られており、グローバル人材の

育成が十分に進んでいないという課題がある。

三．教育改革の取り組み

これらの問題を解決するために、日本政府や教育機関はさまざまな改革に取り組んでいる。

三・一　個別最適化教育の推進

画一的な教育からの脱却を図るため、個別最適化教育が注目されている。ＩＣＴ（情報通信技術）を活用し、生徒一人一人の学習ペースや理解度に応じた教育を提供することで、個々の能力を最大限に引き出すことを目指している。具体的には、タブレットやＰＣを用いた学習が導入されており、プログラミング教育の導入によって論理的思考力や問題解決能力の育成が進められている。例えば、東京都の一部の公立小学校では、全生徒にタブレットを配布し、デジタル教材を活用した授業が行われている。

三・二　教員の働き方改革

教員の過重労働を解消するために、働き方改革が進められている。部活動の指導や事務作業の負担を軽減するために、外部指導者の活用や業務の効率化が図られている。具体的には、外部の専門家による部活動指導の導入や、ＩＣＴを活用した事務作業の効率化が進められている。また、教員の業務量を減らすことで、授業準備や生徒指導により多くの時間を割けるようにする取り組みも進行中である。例えば、大阪府では、教員の業務時間を短縮するために、事務作業を支援する専門スタッフの配置が進められている。

結論

結果として、日本の教育現場は様々な課題があり、私自身も学校現場に対して生きづらさを実感しながら生活していたため、日本の教育現場の課題点は理解できる。そのため、一人一人生徒の個性にあったカリキュラムを作成し、提供することが求められると私は考える。

私とロシア語についての雑記

早稲田大学　文学部　一年
濱田　琴音

大学に入学して早くも約三か月が経ち、最初の春学期があっという間に過ぎていった。私が通っている早稲田大学文学部では、一年次は各自の興味に応じて自由に科目を選択する。その中でも最も比重が大きいのは、週四コマある第二外国語である。文学部生は一年次で第二外国語を徹底的に叩き込まれるのだ。私はロシア語を学んでいる。そのことを人に話すと大抵「え、なんでロシア語？」という反応が返ってくる。確かに日本でロシア語を知っている人の数はそれほど多くないため、多くの人にとってロシア語はなじみがないものだろう。さらに大学でロシア語を選択する学生の数も年々減っ

ているということを耳にする。早稲田大学でもロシア語が選べるということを知らない学生が意外と多いようだ。今年度の舎誌では、そんなロシア語を私がなぜ学ぼうと思うようになったのか、そしてロシア語の魅力などを書いていきたいと思う。

私が初めてロシア語に触れたのは、小学生の時に観た映画『戦争と平和』（一九六五―六七）がきっかけである。この映画はロシアの文豪トルストイの同名小説を原作とした全四部からなる超大作である。俳優、映画セット、映像などすべてが当時のソ連の一流の芸術家たちによって作られた見応えのある映画であるが、その中でも特に私が心を惹かれたのは、ロシア語の台詞の美しさである。今まで聞いたことがなかった不思議な音の響きは私の心をすっかり捉えてしまった。ロシア語という未知の言葉があると知り、日本語や英語に加えて新たな言語の扉が開いたように感じた。主人公たちが心情を吐露する独白や男女の繊細な駆け引きで交わされる言葉の数々は、一度観ると忘れられない強烈な印象を私に与え、こんなに豊かで美しい言葉で自分を表現できたら、どんなに素敵だろうかと思った。

もう一つのきっかけは、家にあったロシアの歌謡曲のＣＤである。「カチューシャ」や「ともしび」といった日本でも有名な歌が収められており、何度も聞いて口ずさんだりしていた。戦争にまつわる歌が多いのもあるだろうが、ロシアの民謡は物悲しい曲が多く、幼い私の情緒が激しく揺さぶられたのを覚えている。

中学生になってからはロシアの小説を読むようになった。とりわけドストエフスキーの小説を読んだ時の衝撃は忘れられない。私がロシア文学に強く引き付けられたのは、ロシア文学の登場人物たちの生きざまを追っていくことで、私自身が人生に対して前向きになれるように感じたからだ。ロシア文学は一般的に暗いとか重苦しいというイメージを持たれがちである。実際、ロシア文学の登場人物たちは孤独や貧困などを背負い、宿命的に理不尽な目に遭うことも多く、深い苦しみが作品の根底に一貫して流れている。ところが、彼らは人生に絶望しているかというとそうではない。彼らは心の中に一縷の望みを持っており、何度踏みにじられても、他人に笑われようとも、必死にそれを信じ続けているのである。小説が真っ暗闇のような深い絶望を前提にしているからこそ、人々の内にある希望の光がより際立っているように感じる。このように作家たちが希望を託した小説を読むことで、現代に生きる私もまた勇気づけられるのだと思う。

こうした体験もあり、大学ではロシア語を勉強してもっと深くロシアについて学びたいという気持ちを持っていた。進路について考えていた時、早稲田大学文学部では第二外国語としてロシア語を選択できること、さらに百年以上続くロシア文学・文化研究の伝統があることを知り、志望することにした。

先にも書いたように、日本でロシア語を理解する人は少ないし、そもそもロシア語を学べる大学も限られている。ロシアは日本と隣国でありながら、多くの日本人にとって謎めいた国に違いない。しかし、実はロシア語やロシア文化は日本でも見かけるものがある。

例えば、日本でもよく知られている童話である『おおきなかぶ』はもともとロシアの民話であった。また、ロシアの民謡やクラシック音楽もＢＧＭとしてよく使われ、大森駅近くの商店街で『ともしび』が流れていたのを耳にしたことがある。さらにはロシア語が由来となっている日本語もいくつかある。イクラもその一つでロシア語では鮭の卵だけではなく魚卵全般を表す。他にもアジトやノルマ、インテリなどの言葉もロシア語がもとになっているといわれている。このようにロシア語やロシア文化は案外身近なもので、歴史的にも文化的にもロシアと日本は交流を重ねてきた背景もあり、相互に影響を及ぼしているのである。

ロシア語は英語のアルファベットではなく、キリル文字という独特な文字を使って表す。発音も特殊で、日本語はもちろん英語ともかなり違うため、初心者である私には上手く話すのは難しい。しかし、ロシア語の最大の魅力はその音やリズムであると思う。ロシア語には鋭く発音する字と軟らかく発音する字があるのだが、それらが組み合わさることによって心地よい響きを作り出すのだと思う。

現在ロシア語はロシア連邦ではもちろん、多くの旧ソ連構成国の中で公用語または主要な言語として使われている。しかし近年、各国のナショナリズムの高まりによって、バルト三国などではロシア語離れの傾向もある。ロシアによるウクライナ侵攻はその動きをより一層加速させることになるだろう。日本におけるロシア語の人気も急落している。それでも私がロシア語を勉強しているのは、言語を通じてロシアのことを知るためというのもあるが、ロシア語が東欧や中央アジアの国々と私とを結びつけるものになると思うからだ。ロシア語やロシアという国についてさえ、日本で学べる機会は限られているのに、ましてや東欧や中央アジアに関してはほとんど知ることができない。しかし、ロシアとは物理的に距離が近いことや歴史的な背景もあり、言葉がロシア語と非常に近かったり、似たような文化を持っていたりする。これらの国々のことについて学ぼうと思ったら、ロシア語を知っていることが足がかりになるのではないだろうか。

最後に、私が最近熱中して読んだ作家アンドレイ・クルコフについて紹介したい。彼はウクライナ在住のロシア語作家である。実はウクライナの東部や南部ではロシア語話者の割合が高く、ウクライナ語よりむしろロシア語を得意とする人も少なくないようだ。クルコフはレニングラード（今のサンクトペテルブルク）で生まれ、キーウで育った。彼はロシア語、ウクライナ語のほか複数の言語を操ることができ、日本語を勉強したこともあるそうだ。邦訳は四作出版されており、代表作に『ペンギンの憂鬱』（一九九六）があるが、この作品は欧米でも高い評価を受け、ベストセラーとなった。『ペンギンの憂鬱』は題名の通り憂鬱症のペンギンが登場するという現実離れした奇抜な設定ではあるが、小説を読んでいくうちに自然と彼を受け入れ、だんだん愛着を持つようになるのが魅力の一つだ。また、激動のウクライナを作家自身が見つめて日記形式でつづったルポルタージュも出ている。どの作品も読みやすく、ウクライナの独特の雰囲気を感じられる。ロシア語の小説を読んでみたい人や、

ウクライナの社会や生活に興味がある人はぜひ手に取ってもらいたい作家である。

私の成り立ちとウインドサーフィン

明治大学　法学部法律学科　一年
林　つぐみ

初めての舎誌ということで何を書けば良いのかかなり考えました。初回で私を知っていただこうと思い、私の成り立ちとウインドサーフィンについて書こうと思います。私は周南市熊毛出身で二〇〇六年三月二十一日に生まれ、既に十八年もの月日が経っています。幼少期から活発な子で小学校のときは外遊びが大好きで男の子たちに混ざりよく遊んでいました。四年生でYAMAGUCHIジュニアアスリートアカデミーの入団審査に合格し、週三の身体トレーニングと週末の専門トレーニングをこなしてきました。その隙間時間に勉学にも励み、自分なりに努力をしてきました。この出来事は後から話すことになるウインドサーフィンと出会ったきっかけでした。

中学校では陸上競技部に入部、週末はウインドサーフィンの練習に取り組みました。中学生時代が一番心も体も成長するタイミングで私はこの三年間での成長に希望を持っていました。しかし、その希望はすぐに消え、辛い三年間を過ごすことになりました。その理由はオーバーワークが原因で発症した第五腰椎分離症でした。二年半のリハビリ生活、体育の授業でさえも欠席せざるを得ませんでした。ただただ上手になりたい、試合で勝ちたいそんな一心で多忙な生活を送っていました。私は常に努力は報われると信じていたし、手を抜かずにやり切ることに全力で、それが私にとっての美学であり、信念でした。ですが、この意志は良い影響をもたらすこともあれば、その反面、心身のストレスを上手に対処できないとこのように怪我をしたり、失敗をしたときに人一倍落ち込んだりしてしまいます。今振り返ると、自分自身を見つめ直すきっかけになったし、これから粘り強く努力していくための大きな糧になったと思います。

高校では、下松高校に進学し三年間の文武両道生活を送りました。茶華道部に入部し、日本の文化に触れながらウインドサーフィンとの両立を図りました。そして中学校時代の不完全燃焼をガソリンにフル回転で駆け抜けました。再スタートからの地道な努力を重ね、周りの人たちのサポートのお陰もあり、高校三年間で二回の全日本優勝を果たすことができました。この成績とこれからの活躍に期待してもらい、明治大学に入学、明治大学体育会ボードセーリング部の一員になることができました。どんなときも自分と向き合い、人として成長できた三年間でした。

ここからは私の人生の半分を捧げているスポーツ、ウインドサーフィンについてこの舎誌を読んでくださる方に知っていただくため

に大きく分けて四つお伝えしたいと思います。まず、ウインドサーフィンとは、簡単にいうとヨットとサーフィンを融合させたような競技で風を使って水面を滑走するマリンスポーツです。ウインドサーフィンは一九六七年にアメリカ・カリフォルニアで、ホイル・シュワイツアー（Hoyle Schweitzer）とジム・ドレイク（Jim Drake）の二人の手によって誕生しました。シュワイツァー氏は元々、サーファーでコンピューターのソフトウェア会社の副社長でした。当時、彼の家には週末にもなるとサーファーやヨットマンが集まり、パーティーが開かれていました。そんな仲間達の中で、ヨットマンで超音速機の設計家ドレイク氏と出会います。この二人の出会いがウインドサーフィンを生み出したのです。サーフボードにヨットのセールを載せて走れないものか、という誰もが考えもしなかった発想が原点だったようです。

次に、エンジンなし、風の力だけで動くことができるウインドサーフィンの基本原理について説明します。それは飛行機が空を飛べるのと同じ原理、「揚力」のおかげです。セールの風上側と風下側の気圧差によってセールは風下に引っ張られ、それが推進力となり走ります。ただし風に対してどんな方向にでも走っていけるというものではなく、一般的に、風向に対して四十五度以上の角度では走り続けることはできず、それを「デッドゾーン」と呼びます。ウインドサーフィンが思い通りに走るためには、横流れを防ぐための抵抗が必要で、フィンやダガーなどのパーツがその役割を果たし、その抵抗する力を「抗力」といいます。またウインドサーフィンは風より速いスピードで走れます。実際に吹いている風を「真の風」、走り出したあとに発生する風を「進行風」とし、この二つの風をベクトルで表した「見かけの風」をセールに受けて走ります。「見かけの風」は実際の風より大きいので風より早く走ることができます。

三つ目は競技カテゴリーについて説明します。アイススケートにもスピードとフィギャーがあるように、ウインドサーフィンの競技もレース系とパフォーマンス系の二種に大別できます。レース系には、ヨットレースと同じように、広い海域を使用して風上にも風下にも走る「コースレース」とシンプルなコースでスピードを競うタイプの「スラローム」があります。また、近年急激に進化を遂げつつその存在感を増しているのが「フォイル」です。ボード全体が水面を離れて浮き上がり、音もなく走って行く「フォイル」は、ついにコースレースやスラロームレースと同様の競技性を持つようになってきました。パフォーマンス系には「ウェイブ」と「フリースタイル」があります。この二つの競技は、繰り出す演技が採点される事で勝負が決していきます。そして「スピード」。決められた範囲を走り、直線でどれだけのスピードが出せるかをＧＰＳで計測します。

最後にウインドサーフィンの魅力は海の上を滑走していく気持ちよさだと思います。自分の力だけでなく自然の力を頼りながら目的地まで誰よりも速く到達することはなんとも感動的です。人工の動力ではなく風や波の力だけで滑走するウインドサーフィンはごく当

たり前に自然の素晴らしさを教えてくれます。穏やかな風からかなり荒れた海まで乗りこなせてしまうほどポテンシャルの高い競技はなかなかないと思います。自然の脅威を身をもって体験することができ、自身の成長に直結することも多いように感じます。風を読み、波に乗り、風を操り自然と一体化するというウインドサーフィンの根幹がこの競技の奥深さです。ここまで、私の成り立ちやウインドサーフィンについて書いてきましたが、少しでも私自身、ウインドサーフィンについて知っていただければ嬉しいです。私の成り立ちはスポーツに溢れたものでしたが、これからはさらなるスポーツ界での活躍はもちろん、様々な知識を身に付け社会に通用する人材として成長したいと思います。そしてウインドサーフィンを通してこの四年間で全日本学生選手権（個人・団体）で優勝し、National Teamに選出され世界選手権で成績を残すことが大きな目標です。決して簡単な目標ではありませんが、日々の時間を大切にし、一つ一つ課題をクリアしていき必ず目標を達成します。また、応援していただけるよう人としても成長していきます。拙い文章でしたが最後まで読んでいただきありがとうございました。

引用 https://jw-a.org/windsurfing/8.21

公益財団法人岩陽学舎役員名簿　（令和６年10月１日現在）

役　職	氏　名	住　所	勤　務　先　等
名誉理事長	吉 川 重 幹	東京都	吉川家第32代当主
名誉顧問	広 中 平 祐	東京都	フィールズ賞・文化勲章受章者、岩国市名誉市民
顧　問	弘 兼 憲 史	東京都	漫画家　㈲ヒロカネプロダクション社長
顧　問	向 阪　啓	川崎市	吉川林産興業㈱監査役
理 事 長	伊 藤 進 吾	岩国市	桧山事務器㈱代表取締役会長
常務理事	大 田 憲 明	横浜市	元公益財団法人岩陽学舎理事・舎監
〃	光 井　純	東京都	光井純＆アソシエーツ建築設計事務所㈱社長
理　事	大 森 隆 司	横浜市	元大学教授
〃	佐 倉 弘之甫	岩国市	元岩国市教育委員会教育長
〃	川 神 康 孝	岩国市	元シャープ㈱社員
〃	柿 木 秀 雄	東京都	リンクアンドモチベーション関連会社社長
〃	原 元 典 夫	岩国市	元㈱山口銀行取締役
監　事	武 田 昇 平	東京都	弁護士（ひかり総合法律事務所）
〃	松 井 宏 通	広島市	㈲岩国さんあい代表取締役
評 議 員	谷 本　浩	東京都	元全日本空輸㈱社員
〃	松 重 義 信	岩国市	元㈱カシワバラコーポレーション役員
〃	中 村 信 利	岩国市	吉川林産興業㈱取締役
〃	手 嶋 良 夫	東京都	元日本興亜損保社員
〃	菊 元　斉	岩国市	㈱岩崎宏健堂社員
〃	橋 本 聖 嗣	岩国市	岩国市職員
職　員			
事務局長・舎監	三 宅 克 彦	東京都	元㈱カシワバラコーポレーション

2024 年 11 月発行

編集責任者　三　上　広　太

発　行　者　田　弘　一　真

発　行　所　岩陽学舎舎生会
〒143-0024
東京都大田区中央 3 丁目 31-15
URL : http://www.ganyogakusya.jp/
電話　03 (3778) 5931

©岩陽学舎舎生会